

付かない位みてあつた。老公爵の方でも同じやうな嫌惡の情を持つてゐたが、公爵の方ではその感情は侮蔑の念のうちに吸ひ込まれてしまつてゐた。ルイシーヤ・ゴオルイに滞在してゐるにつれて、小さい公爵夫人は、ブリアンヌ嬢が特に好きになつた。彼女はブリアンヌと一緒に日を送つた、夜は頼んで自分の部屋に寝てもらひ、そして、よく男の話をしたり、その惡口を言つたりした。

「お客様がいらつしやるのでございますつてね、公爵。」と、ブリアンヌ嬢は薔薇色の指でナブキンを擽げながら言つた。「あのクラアギン公爵閣下とその御息様ださうでございますね？」彼女は尋ねるやうな調子で言つた。

「ふん！……その閣下は成り上り者だ。私が大學へ推薦してやつたのだ。」と、老公爵は憤然として言つた。「それから彼の息子だが、何の爲めに來るのか私にはさつぱり譯が分らない。嫁のリザヴェタ・カルロウナや、公爵令嬢マリヤは多分知つてゐるかも知れないが、私には何うして彼奴が息子を連れて來るのか分らない。私は息子には用はない。」と、かう言つて、公爵は娘を見た。すると娘は赤くなつた。「氣分でも悪いのか、え？　あの馬鹿者のアルバチチが今日言つたやうに、大臣が怖いのか？」

「Non, mon père. (さ、え、お父様。)」

ブリアンヌ嬢は自分が口を切つた話題には失敗したが止めはしないで、温室の事や、丁度咲いてゐる花の奇麗なことをなどを喋り續けた。肉汁が濟むと公爵も穩かになつた。

晝食後公爵は嫁のところに出掛けて行つた。若公爵夫人は、小さな卓に倚つて、侍女のマーシヤと何か無駄話をやつてゐた。彼女は男を見ると、さつと顔色を變へた。

若公爵夫人は非常に變つてゐた。今では美しいどころではなく、寧ろ醜く見えた。頬はこけ、唇は釣り上り、眼は

凹んでゐた。

「え、何ですか氣が沈んでたりません。」と、彼女は公爵がどんな具合かと尋ねたのに對して答へた。

「何か欲しいものは無いか？」

「Non, merci, mon père. (い、え、お父様、有難う御座いますが、何にも。)」

「あ、それなら至極結構だ、至極結構だ。」

公爵はその室を出て、應接間へと這入つていつた。そこにはアルバチチが、頭を垂れて立つてゐた。

「道を元の通りに埋めて置いたか？」

「はい、埋めました、閣下、どうぞお許し下さいまし、全く考へ違ひで御座いました。」

公爵は、不自然な笑聲で用人の言葉を遮つた。

「あ、よろしい、よろしい。」

公爵が手を差出すと、アルバチチはそれに接吻した。やがて公爵は自分の書齋へ行つた。

その晩方、ワシリーイ公爵は到着した。彼は途中でバルコンスキイ家の馭者や從僕達に迎へられた。彼等は、わざ／＼また雪で埋めた道の上を、わい／＼叫びながら、ワシリーイ公爵の馬車や雪橇を小屋の方へと引つ張つた。

ワシリーイ公爵とアナートルとは、別々の部屋へ案内された。

アナートルは、軍服を脱いでから、兩手を卓の兩側につきながら、その前に腰掛け、美しい大きな眼で、微笑しながら無心に卓の片角を見詰めた。彼は、これまでの自分の生活を、不斷の遊興と見做してゐた、それは、何の道誰れかしらだが、彼の爲めに用意して呉れる義務を負うてゐるものやうに思つてゐるのである。で、彼は、意地悪のこの

老紳士と、金持の醜いその娘とに對する訪問をも、丁度それと同じ氣持で見てもあつた。そして、彼の豫想では、この訪問も結局萬事非常に面白い愉快なる筈であつた。そんなに金持だと云ふなら、何うしても結婚せずに置くものか、間違ひなく甘く行くに決つてゐる。」と、アナトールは思つた。

彼は何時もの習慣通り、顔を剃り、いかにも優美な風に丁寧に香水をふりかけ、何物にも打勝つやうな機嫌のいい持前の表情をしながら、美しい頭をぐつと眞直ぐにたてて、父親の部屋へ這入つて行つた。二人の従僕が忙がしさうにしてワシリーイ公爵に着物をきせてゐた。ワシリーイ公爵は頻りに四邊を見てゐたが、息子が這入つて來ると、「ああ、眺へ向きの様子だ。」とでも云つた風に、愉快さうに息子に首肯して見せた。

「ねえ、お父さん、冗談は兎に角として、こゝのお嬢さんはそんなに不器量なんですか、えゝ？」と、彼は途中で幾度となく言ひ交はされた問題に逆戻りでもするやうに訊いた。

「痴愚な！ お前にとつて何よりも肝心なことは、老公爵に對して恭しく如才なくすることだ。」

「でも、あんまり僕に不愉快な事を云ひ出したら、僕は御免を蒙りますよ。」と、アナトールは言つた。「僕はどうもまあ云ふ年寄りは感心しませんからね。」

「だが、これだけは忘れては不可ん、お前にとつては、この會見が一番大事だ、何事もそれに懸つてゐるのだと云ふ事をな。」

かうしてゐる間に、一方家内の女中部屋の方では、大臣とその息子が到着したのを、とつくに知つてゐたばかりでなく、二人の風采のことまでも細かに噂してゐた。公爵令嬢マリヤは、内心の動搖を一生懸命に抑へつけながら、只一人自分の部屋に坐つてゐた。

「何故あの人は手紙を寄したのかしら？ 何故リザは私にあんな事を話したのか知ら？ いゝえ、そんな筈はない！」と、彼女は鏡を眺めながら獨語つた。「どんな風にして客間へ這入つて行つたら好いんだらう？ 私があの方を好くとすれば、あの方の前でどんな風にしてゐれば好いのか、私には分らないわ。」それに彼女は父親の眼付を考へただけでも恐ろしかつた。若公爵夫人とブリアンヌ嬢とは、侍女のマーシヤから、もう何もかも必要な報告を聞きとつた。二人は大臣の息子が、頬の赤い、眉毛の濃い、非常に綺麗な男だといふこと、その父が脚を引き摺りながら、骨を折つて二階に上つて行つたこと、それとは違つて、息子は若い驚のやうに、一時に三段づも飛び上りながら父親の後について行つたことなどを聞いた。かうしたいろく々な報告を聞いて、若公爵夫人とブリアンヌ嬢とは、元氣のいい話を廊下に響かせながら、公爵令嬢マリヤの部屋へ行つた。

「Ils sont arrivés, Marie. (お客様はもう被居つてゐてよ、マリイ、)あなた知つてらしつて？」と、若公爵夫人は腹一ぱいの聲を出しながら、どしりと腰掛椅子に腰を掛けた。

彼女は、朝の中着てゐた長上衣はもう着てゐなかつた。その代り一番上等の衣服の一つをつけてゐた。髪は念入りに結つてあり、顔は熱心な興奮の色に満ちてゐた。が、寝れた、蒼褪めたその顔色は隠せなかつた。ペテルブルグの交際社會で始終着つけてゐた華奢な着物をきると、縹緞の下がつたのが一層眼立つてあつた。ブリアンヌ嬢も、その服装に、殆んど人の目につかぬ位な巧みな手入れをした、それが彼女の若々しい美しく顔を一層引き立てた。

「まあ、あなた、平素の儘でいらつしやるのね。もう直ぐに、お客様が客間へお出でになつたと言つてきますよ。」と、ブリアンヌ嬢は言ひ始めた。「私達も下へ降りて行かなければなりませんわ。だのに、あなたはちつとも御自分の服装に構はないでいらつしやるのね。」

若公爵夫人は椅子から立ち上つて、呼鈴を鳴らして侍女を呼び、せか／＼して、楽しさうに、公爵令嬢マリヤの身につけるべき物を考へたり、その考へを實行し出した。公爵令嬢マリヤの自尊の感じは、求婚者が到着したのでソワ／＼とした爲めに傷つけられてゐた、が、それよりも更らに、彼女の二人の友だちが、そんなにソワ／＼すべきものでないと思つてもゐないのが心苦しかった。自分の爲めにも、彼等の爲めにも恥しく思つてゐることを二人に話すのは、自分自身の興奮してゐるのを曝露するも同様である。尙ほまた、二人の言ふが儘に着物をきることを拒めば、動やもすると、繰り返して擲論はれ、無理矢理に着せられることになるに違ひない。彼女は上氣したやうになつた。美しい目が曇つてきた。顔は眞赤な點々で覆はれた、そして、一番よく彼女の顔に現はれる、美しくない、犠牲にされたと云ふやうな表情を浮べて、彼女はブリアンヌ嬢とリザとに體を委せた。二人の女は、彼女を美しく見せるやうにと心から眞面目に骨を折つた。マリヤは如何にも引き立たない縹緞なので、彼女と競争しやうと云ふやうな考へはテンデ二人の頭に這入つて來なかつた。だから、二人がマリヤに衣服を着せにかゝつたのは、衣裳で顔を奇麗に見せることが出来るといふ、世間一般の女が持つてゐる極く無邪氣な、而かも堅い信念から來た全くの好意であつた。

「いゝえ、ほんとに、あなた、その着物はよくないわ」と、リザは遠くから公爵令嬢マリヤを横目で見ながら、言つた。「おすこにある海老茶の天鵞絨のを着せてお貰ひなさいな。えゝ、ほんとよ！ ねえ、これがあなたの一生涯の變り目になるかも知れないんぢやないの。それはあんまり色が明るすぎるわ、それは駄目よ、いゝえ、駄目よ。」併し、着物が悪いのではなかつた。公爵令嬢、顔と姿全體とが不可なかつたのである。けれどブリアンヌや若公爵夫人にはさうとは思はれなかつた。二人は矢張り、マリヤの髪に青いリボンを結び、髪を高く梳き上げ、海老茶の着

物に空色の飾帯をやゝ低目に結んだら、それでスツカリ好くなるに違ひないと想つた。公爵令嬢マリヤのオド／＼した顔と姿とは、とても變へることが出来ないのだから、如何にその顔のお化粧や飾りやを見好くしたところで、顔そのものは、矢張り、食しく醜く見えるであらうと云ふことを彼等は忘れた。公爵令嬢マリヤが溫和しく、されるが儘に、二三度やり變へられてから、髪が頭の頂邊に結び上げられ、それは令嬢の容貌をすつかり變へて、全く醜いものにしてつた。青い飾帯のついた上等の海老茶の天鵞絨服を着せられた時、小さい公爵夫人は、二度ばかり令嬢の周圍を廻つた、そして小さい手で、その髪を伸ばしたり、こつちの飾帯を引き下げたりした、それから頭を彼方へやつたり此方へ曲げたりしながら、ツク／＼と彼女を眺めた。

「いゝえ、駄目よ」と、彼女は両手を拍ちながら、きつぱりと言つた。「Non, Marie, décidément, ça ne vous va pas, Je vous aime mieux dans votre petit rob. grise de tous les jours. Non, de grâce faites cela pour moi. (駄目よ、すわ、マリイ、それはあなたには似合ひませんわ。何時も着て被居る、あの小さい鼠色の方が似合つてよ。いゝえ、どうぞ、あれを私の爲に着て下さい。)カーチャ、」と、彼女は侍女に言つた、「あの鼠色のお石物を持つてきてあげとくれ、まア見てゐらつしやい、ブリアンヌさん、私の着せ方を、」彼女は手を下ろすよりも先きに藝術的な快感を覺えて微笑しながら、言つた。けれどカーチャが言ひつけた衣物を持つて來ても、令嬢マリヤは未だ鏡の前にちつと坐つて自分の顔を見詰めてゐた。そして、その鏡の中に、彼女は、涙の溜つた自分の眼と、今にも泣き出さうとして顔へてゐる自分の口とを見た。

「さア、あなた、」と、ブリアンヌ嬢は言つた、「ほんの、もう一度の御辛抱ですよ。」

小さい公爵夫人は、侍女の手から着物を取つて公爵令嬢マリヤの傍へ寄つた。

「さア今度は、淡泊あつりした美しいのに見ませう。」と、小さな公爵夫人は言った。

彼女の聲と、ブリアンヌ嬢の聲と、カーチャの偷笑しのびわらとが一緒になり、さながら鳥の囀りのやうな、一種陽氣なサメキとなつた。

「Non, laissez moi ! (さあ、打捨うつちやつといて下さい。)」と、公爵令嬢は言った。

その聲には、鳥の囀りがビタリと止んだ位痛切な、苦痛な響があつた。みんなは、哀願するやうに自分達を見てゐる、涙と物思ひとに充ちた美しい大きな眼を見た、そしてこの上無理にすゝめるのは、無駄でもあり、残酷でもあることを覺つた。

「Au moins changez de coiffure. (でも髪だけはお直し下さいな。)」と、小さい公爵夫人が言った。「ねえ、私、さう言つたでせう。」彼女は咎めるやうにブリアンヌ嬢に向つて言つた。「かう云ふ髪かみの結び方が、ちつとも似合はない顔があるつて。駄目よ、駄目よ、直して下さいよ。」

「Laissez moi laissez moi ! (打捨うつちやつといて下さい、打捨うつちやつといて下さい。)」そんなこと、私には何うでもいゝのですわ。」と、公爵令嬢は涙を抑へかねた聲で言つた。

ブリアンヌ嬢と小さい公爵夫人とは、その服装では公爵令嬢マリヤが如何にも見みせらしく、平常ふぜんよりは一層見劣りがすると思はずにはゐられなかつた。けれど今はもう遅かつた。公爵令嬢は彼等のよく知つてゐる表情を浮べて——深い物思と悲哀との表情を浮べて彼等を眺めた。その表情は決して二人の恐怖を喚び起すものではなかつた。(彼女はさうした感情を誰の心にも抱かせることは出来なかつたのだ。)併し、さうした表情が彼女の顔に現はれてくると、彼女は押し黙り、そして何うしてもその決心を饒なへさないと云ふことを二人は知つてゐた。

「Vous changez, n'est-ce pas ? (ねえ、お直しにならなかつて?)」と、リザが言つた。けれど、公爵令嬢マリヤが答へなかつたので、リザは部屋を出て行つた。

公爵令嬢マリヤは一人残された。彼女はリザの思ふやうにはしなかつた。髪も直さなければ、鏡さへ覗いて見なかつた。頼りなげに眼を伏せ、胸を落して彼女は考へながら坐つてゐた。彼女は夫となるべき人を描いて見た、夫れは強い、威嚴のある、何とも云へぬほど懐味の深い、忽ちのうちに今までとは全然違つた幸福な夫自身の世界に、きつと自分を連れて行つて呉れる人であつた。あの年とつた乳母の娘の家で昨日見た子供のやうな自分自身の子供が、自分の懐の中にあるやうな気がした。夫は自分と子供とを懐なごしさうに見詰めながら立つてゐた。「けど駄目だわ、そんな風になりつこはありやしない。私はあんまり醜いんだもの。」と、彼女は思つた。

「どうぞお茶にいらしつて下さいませ。公爵様公爵様がもう直きにいらつしやいますから。」と、戸口の所で待女の聲が言つた。

彼女はふと我に歸つた。そして自分の考へてゐたことに戦おのかされた。で、彼女は階下へ降りて行く前に先づ禮拜室へ遣入つた。そして救世主の大きな聖像の、燈明で輝やいてゐる黒い姿に眼を据たゑながら、數分間兩手を組み合せて、その前に立つてゐた。公爵令嬢マリヤの心は、惱ましい疑ひに満ちてゐた。彼女には愛の喜び、男に對する現世的な愛の喜びを味はふことが出来るだらうか？ 公爵令嬢マリヤは、結婚と云ふものを空想しながら、家庭の幸福や、子供の事などを夢見た、が、彼女の最も肝要な、最も強い、最も秘密な夢は、現世的な愛に就いての夢であつた。その感情は、彼女が他の人々に、また自分自身にさへ隠さうとすればする程、一層強くなつた。

「あゝ神様、」と、彼女は言つた。「かうした惡魔の誘惑を、何うしたら心の中で壓おさし鎮しづめることが出来るのでございま

せうか？ 何うしたら、悪い考へをみんな捨て、了つて、あなたの御心に協ふやうな平和な心持になれるのでございませうか？」から尋ねると直ぐに、神の答は彼女の心に這入つてきた。爾自らの爲めには何物をも望むな。貪慾であるな、憂慮するな、羨むな。人々の未來も、爾自らの運命も、爾にとつては未知のものに相違ない、併し、凡ての物に對して用意が出来てゐるやうに暮さなくてはならぬ。結婚の義務に對して爾を試みるのが神の心であるならば、神の心に従ふ用意をするが宜い。」かうした、氣慰みな考へを抱いて、(やはり禁ぜられたこの世の夢の叶ふことを望みながら)公爵令嬢マリヤは十字を切り、溜息を吐きながら、着物のこと、か、髪のかき方、何うとか、何んな風に這入つて行かうとか、何を言はうとかいふ様な事は考へないで階下へ降りて行つた。一筋の髪も、その御心に依らなければ人の頭から落ちることはないといふ、神の導きに比べれば、凡てさうした事に何の意味があらうぞ。

## 四

公爵令嬢マリヤが部屋へ這入つて行つた時には、ワシリーイ公爵とその息子とは既う客間にゐて、小さい公爵夫人とブリアンヌ嬢とを相手に話してゐた。公爵令嬢が踵で歩きながら重い足調で這入つて行くと、紳士達とブリアンヌ嬢とは立ち上つた。すると、小さい公爵夫人は、公爵令嬢を指して、「マリヤが参りました！」と、紳士達に言つた。公爵令嬢マリヤは、みんなをすつかり見た、みんなを細かに見た、自分の顔を見た時一寸眞面目になつたが、やがてまた急に微笑んだワシリーイ公爵の顔も見た。マリヤが人々に與へる印象を知らうと、好奇心をもつて客人達の顔色

を窺つてゐる小さい公爵夫人の顔も見た。今迄見た事のないやうな非常に熱心な眼付を「彼」の方に向けてゐる、リボンをつけた、可愛い顔のブリアンヌ嬢をも見た。が、公爵令嬢には「彼」を見ることが出来なかつた。彼女は部屋に這入つた時、たゞ何かしら或る大きな、輝やいた、美しいものが自分の方へ動いて來るのを見ることが出来ただけであつた。ワシリーイ公爵が先づ彼女の方へ近寄つた、で、公爵が彼女の手を接吻しようとして屈むと、マリヤはその禿頭に接吻した、そして公爵の言葉に答へて、忘れるどころではなく、自分によく公爵を覚えてゐると言つた。それからアナトールが彼女の傍へ行つた。それでも尙ほ彼女は、彼を見ることが出来なかつた。彼女は、たゞ柔かい手が確りと自分の手を握つたのを感じただけであつた、彼女は白い顔に一寸唇を觸れた、その上には香油をつけた美しい亞麻色の髪があつた。彼女は、アナトールをチラと見ると、その美しさに驚かされた。アナトールは、外づされた軍服の鈕釦に右の手の拇指を添へ、胸を張り、背を反らしながら立つてゐた。彼は、浮かせた片脚を慄はせながら、頭を少し一方へ傾けて、晴やかな顔で、公爵令嬢を黙つて見詰めてゐた、けれど彼女のことには少しも考へてゐないらしいかつた。アナトールは氣轉の利く男ではなかつた、また談話が巧みでもなければ、上手でもなかつた、が、社交上非常に大切な沈着と物に動じないで自若としてゐる能力を持つてゐた。若し自信のない人が、初対面の人に對して黙つてゐて、さう云ふ風に黙つてゐるのは失禮であるといふ自覺と、何か話すべきことを見出さうとして焦燥つてゐる容子とを露したなら、その結果は面白くないものであらう。アナトールは、黙つて、片脚を慄はせながら、晴々しい顔をして公爵令嬢の髪を見守つてゐた。彼が、何んなに長くても、かうして同じやうに沈着に黙つて居ることが出来るのは明らかであつた。「若し黙つてゐるのを氣拙く思ふ人があるなら、さう云ふ奴は喋るがよい。だが俺は喋りたくない。」と、かうその態度が言つてゐるやうであつた。その上、女達に對する彼の態度には、他の何物よりも強く女た

ちの心に好奇心と、畏れと、戀をすら起させるやうな風があり、自分自身が優れてゐるといふ横柄な自覺を持つてゐる風があつた。その態度は、女たちに向つて、「俺にはあなた方の心は分つてゐる、分つてゐる。だが、あなた方の爲めに何んで私が頭を痛める必要があるものか。勿論、あなた方は、之れだけで満足せう！」と、かう言つてゐるやうであつた。恐らく自分では、女達に會つた時さうは考へないのであらう（實際彼は何時でも物事を考へるといふ様なことはあまりしない方だから、この事だつて恐らく考へてはゐなかつたらしい。）が、その態度と容子とは、そんな風になるのであつた。公爵令嬢マリヤはそれを感じた、で、自分は彼の注意を惹かうとは思つてもゐないと云ふことを彼に見せようともするやうに、ワシリーイ公爵の方へ振り向いた。小さい公爵夫人の白い齒並みを隠したり、現はしたりしてゐる小さい柔毛の生えてゐる唇と、その楽しさうな聲とお蔭で、談話は皆に行きわたり、活氣付いてゐた。小さい公爵夫人は、饒舌な陽氣な人々がよく使ふ飄忽な調子で、ワシリーイ公爵に應じた、かうした調子で物を言ふのは、相手の人々と自分との間に、冗談や、楽しい、幾らか内所の、をかしい憶出の、ズツと前からの一種の引き續きがあると假定しての上のことである、ワシリーイ公爵と小さい公爵夫人との場合のやうに、かうした憶出のない時でさへ、さうである。ワシリーイ公爵は、直ぐこの調子に撥を合せた。小さい公爵夫人は有りもしない色々なおどけた事件を材料にして、この假定した共同の憶出話に彩をつけた。そして、これまで殆んど知らなかつたアナトールをもその仲間に加へて了つた。ブリアンヌ嬢も、うまくその仲間に加はつた。公爵令嬢マリヤさへ、みんなの愉快な仲間に加へられるのを心嬉しく思つた。

「ねえ、公爵、もうかうしてあなたを掴まへたからは、何處までも付け込みますよ、」と、小さい公爵夫人は勿論フランス語でワシリーイ公爵に言つた。「アンネットのところの夜會では、よく何時もお逃げなさいましたが、此處ではさ

うは行きませんよ。あなたは、私たちの親愛なアンネットを覚えていらしつて？」

「ええ、覚えてゐます。だがアンネットの様に政治のことを論じちゃ不可ませんよ！」

「それから小さい茶卓のこと？」

「ええ、勿論！」

「何故あなたはアンネットの所へちつとも被來らなかつたの？」と、小さい公爵夫人はアナトールに訊いた。「ああ、解つてゐますわ、解つてゐますわ。」と彼女は目示しながら言つた。「私、あなたのお身持ちはあなたのお兄様のイツポリーイトから伺ひましたわ、ねえ、」と、彼女はアナトールに向つて指を振つた。「パリイでのお手柄も知つて居りますよ。」  
「だが彼は、イツポリーイトはお前に言はなかつたか？」と、ワシリーイ公爵は言つた（息子に、さう話しかけながら、小さい公爵夫人が逃げ出さうとしたところを、丁度うまく掴まへたとも云ふやうに、夫人の腕をとつて）彼はお前に話さなかつたかね、彼が、イツポリーイト自身が、われわれの美しい公爵夫人に思ひ焦がれてゐたといふことや、公爵夫人が彼を相手にしなかつたといふことの一伍一什を？」

「Oh, c'est la perle des femmes, princesse. (お、公爵夫人は女の中の眞珠ですよ。公爵令嬢、)と、彼は公爵令嬢のマリヤに向つて言つた。

ブリアンヌ嬢はまたブリアンヌ嬢で、パリイといふ言葉が出たので、みんなの憶出話しの仲間入りをする機會を逸さなかつた。

ブリアンヌ嬢は、アナトールがパリイにゐたのはもうずつと以前のことなのか何うか、パリイは氣に入つたか何うか、といふ様なことを馴れ／＼しく尋ねた。アナトールは機嫌よくこのフランス女に答へた、そして微笑しながら女

を見詰めて、女の祖國の事に就いて話した。アナトールは、この美しい令嬢を一目みると、この「ルイシーヤ・ゴオリイ」でも決して退屈する事はないと思つた。「満更ら棄てた容色ぢやないぞ。」と、彼は彼女をツク／＼と見ながら思つた。「あの女は満更ら棄てた容色ぢやないぞ、あの相手友達は！ 俺が公爵令嬢と結婚した曉には、この女と一緒に連れて来て貰ひたいものだ。」と、彼は黙想した。「la petite est gentille (可愛う奴だ)」

老公爵は、自分の部屋でゆつくり衣物を着ながら顔を感めて、自分の爲すべきことを思ひ廻らしてゐた。客の着いたのが腹立しくならなかつた。「ワシリーイ公爵が俺にとつて何だ、彼奴も彼奴の息子も？ ワシリーイ公爵は大法螺吹き、頭の空虚な馬鹿者だ、息子だつてヒドイ奴だらう、大抵。」と、彼は一人で唸つた。彼が腹立しかつたのは、この訪問がこれまで絶えず押し退け、押し退けてきた未定の問題を、老公爵が常に自分自身を欺いてゐた問題を、その心の中に復活させたことであつた。問題と云ふのは何時か思ひ切つて娘を手離して、その良人にやる氣になれるかどうかと云ふ事であつた。公爵は、直接自分自身に對して、この問題を提出する氣には一度もなれなかつた、若し然うすれば、公平に夫れに答へなくてはならないのである、が、その場合には、公平と對峙して感情以上のもの、即ち自分の人生が有り得るか否か、と云ふ問題が生ずるのを豫め承知してゐたからである。老公爵は、公爵令嬢マリヤを大切に思ふ容子を表には見せなかつたが、彼女のゐない生活といふものは、彼には考へられなかつた。「で、何の爲めに彼女は結婚しなければならんのか？」と、老公爵は考へた。「多分不仕合せになるだらう。アンドレーと一緒になつたりザを見る、(今日此頃あれより宜い良人を見付けるのは六ヶ敷いことだと私は思ふ)だが、リザは自分の運命に満足してゐない。ところで、誰れが、愛故にマリヤと結婚しやう？ 彼女は不纏綴で品がよくない。結婚するとすれば、親類とか金とかのお蔭だ。だが、老嬢だつて立派に暮して行けるぢやないか？ 實際は、その人たちの方が

幸福なのだ！」かうニコライ・アンドレーキツチ公爵は、着物をきながら、黙想した、が、それでも、絶えず延ばし、延ばしよてきた問題は即決を迫つた。ワシリーイ公爵は、明らかに結婚の申し込みをする意思で、息子をつれてきたのらしい、で、恐ろしく今日か明日のうちには直白な返辭を促すだらう。世間の名望や地位は立派なものである。「よし、俺には異存はない。」と、公爵は自分に向つて言つた。「たゞ彼女の良人になるだけの價値のある人間であつて欲しいものだ。俺が知りたいのは其所なのだ。俺が知り度いのは其所なのだ。」と、彼は聲に出して言つた。

「俺が知りたいのは其所なのだ。」  
そして彼は何時もの活潑な歩調で客間に這入つて行き、チラツと一目で一座を見渡した。彼は小さい公爵夫人の服装が變つてゐると、ブリアンヌ嬢のリボンと、變な風に結つた公爵令嬢マリヤの髪と、フランス女とアナトールとの微笑と、自分の娘が、みんなの話の仲間外れになつてゐるのに氣がついた。「彼女はまるで馬鹿者のやうに飾り立てゝゐる！」と、老公爵はいま／＼しきりに娘をチラリと眺めながら、思つた。「彼女には羞耻の念がないのか、それに彼女に話しかけようとしてもしてゐないの。」

彼は、ワシリーイ公爵の傍へ行つた。

「やあ、御機嫌よう、御機嫌よう、よくお出で下すつた。」

「愛する友達の爲めには七露里は近いものです。」と、ワシリーイ公爵はロシアの諺を引いて、何時もの早口な、落ちつき拂つた、慣れ／＼しい調子で言つた。「これが私の二番目の奴です。可愛がつて、懇意にしてやつて下さい。」

ニコライ・アンドレーキツチ公爵はアナトールをツク／＼と眺めた。

「立派な男だ、立派な男だ！」と、彼は言つた。「さア、此處へ来て接吻して下さい。」彼は顔を突き出した。

アナトールは老人に接吻した。そして父親が豫期してゐるがいと云つて聞かせたこの老公爵の偏人たる何か實例の出るのを待ち受けたが、好奇心をもつて、落ちつき拂つて彼を眺めた。

老公爵は長椅子の隅の何時もの場所に腰掛けて、ワシリーイ公爵の爲めに眩掛椅子を引き出し、それを指した、そして政治上の事件や、新事件に就て質問し始めた。彼は、ワシリーイ公爵の言葉にちつと耳を傾けてゐるやうではあつたが、絶えずチロ／＼と娘のマリヤを見てゐた。

「ぢや彼奴等はまだポツタムから手紙を寄こしたのだね？」と、彼はワシリーイ公爵の最後の言葉を繰り返へし、そして急に立ち上つて、自分の娘の傍へ行つた。

「お前がそんな服装をしたのは、お客様のためののか、えゝ？」と、彼は言つた。結構だ、非常に結構だ。お前はお客様の前へ出る爲めに、妙な新流行の髪結び方をしたのだね。ではお客様の前で私はお前に言つて置くが、これからは私の許しなしに、衣服を着變へることは決してならんぞ。」

「私が悪うございました……」と、小さい公爵夫人は赤くなつて口籠つた。

「いや、お前は何をやらうと自由だ。」と、老公爵は娘の前にもちよつとお辭儀をして、言つた。「だが此娘は何もわざ／＼自分を不慮にする必要は少しもない——そんな事をしなくても十分醜いのだ。」

老公爵は、それきりもう娘には眼もくれないで、再び元の所に座つた。娘は涙含んだ。

「いや、とんでもない、その髪は御令嬢には非常によくお似合ひです。」と、ワシリーイ公爵が言つた。

「時に若公爵、君の名は何と云ふかね？」と、老公爵はアナトールの方へ振り向いて言つた。「此處へ來給へ、何か話をしてお近付きにならうぢやないか。」

「いよ／＼面白くなつて來たぞ。」と、アナトールは思つた。そして微笑しながら老公爵の傍に腰を掛けた。

「さう／＼、君は何でも外國で教育を受けたといふ話だつたね。つまり君のお父さんや私等の様に、補祭から読み書きを習つたのぢやないのだ。何かね、今は近衛騎兵にでも勤めて居るのかね？」と、老公爵はアナトールを近々／＼とく／＼見ながら尋ねた。

「いゝえ、私は普通師團に移りました。」と、アナトールは噴飯さうとするのを漸つと堪へながら、答へた。

「あゝ、それは結構だ。では、あなたは皇帝と祖國の爲めに盡さうといふのだね、えゝ？ 今は、丁度戦時だ。君のやうな立派な若者は軍務に就かなくては不可い。軍務に就かなくては不可い。戦地へ行く命令を受けたかね、えゝ？」

「いゝえ、公爵、我々の聯隊はもう戦地へ行きました。併し私は附屬官にされたのです。お父さん、私は何附にされるのですかね？」と、アナトールは笑ひながら父の方へ振り向いた。

「なか／＼天晴れた勤め方だね。天晴れだ。私は何附けにされてるのですかねか！ はゝゝゝ！」と、老公爵は笑つた。

アナトールはそれよりも高い聲で笑つた。老公爵は俄に眉を擧げた。

「うん、彼方へ行つてもよろしい。」と、老公爵はアナトールに向つて言つた。アナトールは微笑しながら、また女達の方へ近づいた。

「君は彼等を外國で教育したんだね、ワシリーイ公爵？ えゝ？」と、老公爵はワシリーイ公爵に向つて言つた。

「私は出来るだけのことをしたのです。確かに外國の教育は我が國の教育よりも遙かに優れて居りますよ。」

「それはさうだ、だが此頃は萬事が變つて、萬事が新式だ。立派な男だ！ 立派な男だ！ きア私の部屋へ來給へ。」



彼はワシリーイ公爵の腕を取つて、自分の部屋へ導いた。

老公爵と對坐さしむかひになると、ワシリーイ公爵は卒直つとまに自分の希望のぞみを老公爵に知らせた。

「いや、君は、」と、老公爵は愕然おつとして言つた。「私が彼女を、いつまでも引き止めて置くと思ふのかね、私が彼女を手放すことが出来ないと思ふかね？ 妙なことを考へたものだ！」彼は腹立たしさうに言つた。「明日だつて宜いのだ！ たゞ、私が言つて置きたいのは、自分の婿を、もつと能く知つて置きたいといふことだけだ。私の主義はよく御存知であらうが、私は、何事も包み隠しと云ふ事はしない。で、私は明日君の前で彼女の考へを訊いて見やう。その上で息子さんに此處に逗留して貰ふことにしやう。勝手に逗留してゐて貰つて、私がよく見やう。」(と、公爵は荒い鼻息をした。)  
「行き度ければ勝手に行くても宜い、私には何方どこだつて同じことだ、」と、彼は、自分の息子に別れを告げた時に叫んだやうな、鋭い聲をあげて叫んだ。

「私は卒直に申しませう、」と、ワシリーイ公爵は、大變に洞察力のある相手に對して狡猾な手段を弄するのは無益だといふことを知つてゐる老獪な人らしい調子で言つた。「ねえ、あなたは他人の腹の底まで見徹す方です、アナトールは天才ではありません、併し正直な、腹の好い若者で、息子としても親族としても善い人間です。」

「成程、成程、甚だ結構だ、考へて見ませう。」

長い間、男の世界から離れて、寂しい生活を送つてきた女の常として、その場にアナトールが現はれると、ニコライ・アンドレーキツチ家の三人の女達は、みんな等しく、それまでの生活は眞實の生活ではなかつたと云ふ氣がした。彼等の思想、感情、觀察の力は忽ち倍加した。彼等の生活は、それまで闇の中を過ぎてゐて、突然意味の満ちた新しい光りに照らされてもしたやうであつた。

公爵令嬢マリヤは、自分の顔や自分の髪のことには忘れて了つた。ひよつとしたら自分の良人になるかも知れない人の、その美しい嬌わだかまりのない顔が、彼女の注意を悉く奪つた。彼女は、アナトールを親切な、勇敢な、固しつりした、男らしい、寛大な人であると思つた。彼女は、全くさう確信した。未來の結婚生活のかげくの夢が間斷つぎなしに彼女の想像の中に浮んでゐた。彼女はそれを追ひ拂ひ、そして、そんな氣振りを見せまいとした。

「だけど、私はあの人に對して、冷淡過ぎはしないだらうか？」と、公爵令嬢マリヤは思つた。「私は自分を抑へやうとしてゐるのです、心の奥底では、あの人に接近し過ぎてゐるやうに思はれるんですもの。けど勿論あの人には、私があの人を何の位ほど思つてゐるか分らない、で、若しかしたら、私があの人を好いてゐないと思つて被居こるかも知れないわ。」

かうして彼女は、アナトールに親切にしやうとしたが、それには何うすれば宜いのか分らなかつた。

「*La pauvre fille ! Elle est diablement laide !* (哀れな娘！恐しく不經よこしま織だ！)」と、アナトールは公爵令嬢のことを思つた。

アナトールが着いたので、矢張り非常に興奮させられたプリアンヌ嬢は、マリヤとはまた全然異つた物思ひに心を奪はれてゐた。これと云つて別に定まつた社會上の位置があるのではなく、友達や親戚もなく、自分の故國からも遠く離れた若い美しい娘は、公爵ニコライ・アンドレーキツチに仕へ、公爵の爲めに本を讀んでやつたり、公爵令嬢マリヤの友達となつてゐたりして、一生を送らうとは、勿論思つてゐなかつた。プリアンヌ嬢は、もうずつと以前から、醜い、衣物の着方の下手な、無態ぶたいなロシアの公爵令嬢達に比べて、自分がはるかに立ち勝まさつてゐることを見分ける目がある、自分と戀に落ちて、自分を連れて行つて呉れる、ロシアの公爵が現はれるのを待つてゐた。そして到頭その口

シアの公爵がやつて来たのであつた。ブリアンヌ嬢は、かつて伯母から聞いた或る物語を覚えてゐた、それを自分の心持ちに適はしいやうに作り上げ、想像の中で繰返へし繰返へしして楽しんでゐた。それは、或る一人の少女が唆かされた、所がその少女の可哀相な母親(Sa pauvre mère)が出て来て、その娘の結婚もしないで、男の誘惑者に身を委せたのを責めたと云ふ物語であつた。ブリアンヌ嬢は、想像の中で、誘惑者たる「彼」にこの物語を話しながら、屢々感動しては涙を流した。ところで、この「彼」ほんとのロシアの公爵が現れたのである。公爵は、キツと自分と飄落ちをする、すると「私の可哀相なお母さま」が、その場に現れてくる、そして、彼は私と結婚するに相違ない。これが、アナトールにバライイのことを話してゐるその時に、ブリアンヌ嬢の頭の中で自然に作りあげられた彼女の未來の歴史の總てであつた。ブリアンヌ嬢は計畫を立て、それに依ると云ふことはなかつた、(彼女は、何うするかと云ふやうなことを一寸考へてみることもしなかつた)けれど、これはみんなズツと前から彼女の心の裡に用意されてゐたのであつた、そして今、アナトールが現はれるや否や、悉く彼の周圍に集中されたのである。で、彼女は、出来るだけ多く彼を惹き付け度いと思ひ、それに力めた。

小さい公爵夫人は、さながら喇叭の音をきいた年とつた軍馬のやうに、思はず自分の位置を忘れて何等前後の考もなく、何の苦もなく、たゞ單純な、浮ついた陽氣な心から、何時もの癖通り男と巫山戯る方へ駆け出す許りにしてゐた。女連中のなかでは、アナトールは女にチャホヤされるのには厭き／＼した人のやうな様子をするのが常であつたが、自分が之等三人の女に與へた影響を見て、その虚榮心は快く得意がつてゐた。のみならず美しい、挑發的なブリアンヌ嬢に對して、ともすると急激に變つて来て、至極野郎な、至極向見ずな行爲をさせる、例の烈しい、獸的な感情を覚え始めてゐるのであつた。

お茶がすむと一座の者は喫煙室へ移つた、公爵令嬢マリヤは眞琴を弾くやうにと所望された。アナトールは公爵令嬢の方へ面を向け、ブリアンヌ嬢の傍に座り、自分の腕に凭れ、眼には笑ひと喜びとを湛へて、公爵令嬢マリヤを見詰めてゐた。公爵令嬢マリヤは、アナトールの眼が自分に向けられてゐるのを感じ、苦しいやうな嬉しいやうな動搖を覺えた。彼女の愛するソナタは、魂の感動するやうな詩の世界に彼女を連れて行つた、そして彼の目が彼女に向けられてゐると云ふ思ひが尙ほ一層その世界に詩趣を加へた。アナトールの目は、實際公爵令嬢を見詰めてはゐたが、その目色は、彼女とは關係はなくて、ブリアンヌ嬢の小さい足の動作と關係をもつてゐた、彼は、丁度その時ピアノの下で、彼女の足に自分のを觸れてゐたのである。ブリアンヌ嬢もまた公爵令嬢マリヤを見詰めてゐた、そして彼女の目の中にも、公爵令嬢の之れを見たとのこない、怯えたやうな喜びと希望との色があつた。

「まア、何んなに、あの女は私を愛して呉れるんだらう！」と、公爵令嬢マリヤは思つた。「私は今、何んなに幸福なんだらう、それから、之れからだつて、こんなお友達と良人とを持つて何んなにか幸福だらう！ あの方は、私の良人になつて下さることが出来るか知ら？」彼女は彼の顔をチラリと見る勇氣もなかつたが、矢張り彼の目が自分を見詰めてゐるのを感じながら、かう思つた。

晚餐が終つて一座の者が別れる時、アナトールは公爵令嬢マリヤの手に接吻した。公爵令嬢は、自分が何うして、さう大膽なことが出来たのか分らなかつたが、自分の傍へ綺麗な顔が近寄つてきた時、近い眼をあげて眞正面にそれを眺めた。公爵令嬢の後で、アナトールはブリアンヌ嬢の手の上に顔をうつむけた(それは禮儀に背いた事であつたが、彼は何事をも、いつもと同じやうな確信のある卒直な風でやつてのけた)するとブリアンヌ嬢は顔眞赤にして、どきまぎしながら公爵令嬢をチラリと見た。

「Quelle délicatesse ! (何んて淑やかな人なんだらう!)」と、公爵令嬢マリヤは思った。「アメエリイ(ブリアンヌ嬢の名)は、私が嫉妬して、これまでの親切や、いろ／＼誠實に盡して呉れたことを、私が忘れてもするかと思ふかしら?」公爵令嬢は、ブリアンヌ嬢の傍へ行き、情をこめて彼女を接吻した。アナトールは、小さい公爵夫人の方へ行つた。

「いえ、不可ません、不可ません!」 Quand votre père m'écrira que vous vous conduisez bien, je vous donnerai ma main à baiser ! Pus avant ! (あなたのお父様が、あなたの品行が好くなったといふお手紙を下さつたら、その時にはこの手に接吻させて上げませう! それまでは不可ません!)」かう言つて、小さい公爵夫人は、アナトールに向ひ、その小さな指を振り、微笑しながら部屋を出て行つた。

## 五

皆は散り／＼になつた。アナトールは寢床へ這入ると直ぐ、グツスリ眠つてしまつたが、他の者は誰れもその晩は長い間眠つたかになつた。

「あの方——あの初めていらした方、あの綺麗な親切さうな方が、私の良人になつて下さるやうな事になるかしら? あの方は屹度親切に違ひないわ。」と、公爵令嬢マリヤは思つた。そして、之れまで殆ど感じたことのないやうな恐怖に襲はれた。彼女は四邊を見廻すのが怖かつた。其處の暗い隅の衝立の蔭には誰か立つてゐるやうに思はれた、しか

もその誰かと云ふのは彼であつた。——悪魔だ。そして夫れは白い額と、黒い眉毛と、赤い口とを持つてゐるあの方であつた。

公爵令嬢は呼鈴を鳴らして侍女を呼び、自分の部屋に寝て呉れるやうにと頼んだ。

ブリアンヌ嬢は、その晩、當もなく誰れかを待ち受けながら、長い間冬園の中を歩き廻つてゐた。その誰かに微笑ひかけたり、自分の墮落の爲に自分を責める哀れな母親の言葉を想像して、ほろ／＼と涙を落したりした。

小さい公爵夫人は、床の敷方がよくなかつたといふので、侍女に當り散らしてゐた。彼女は、横にも俯伏せにも寝られなかつた。矢張り不快で気分が悪かつた。彼女の腹が彼女を妨げたのであつた。彼女の腹は今晩、何時もより一層彼女を妨げた。と云ふのは、アナトールの姿を見て彼女は、未だ妊娠とならず、まだ身軽で楽しかつた時分の事をマザ／＼と思ひ出したからであつた。彼女は、寢間帽子をかぶつて寢衣を着け、肘掛椅子に座つてゐた。眠さうな顔をして髪を亂してゐるカーチャは、何かぶつ／＼と咳きながら、三度目に重い羽蒲團を叩いて、裏返した。

「何處も彼處も凹凸だらけぢやないか。」と、小さい公爵夫人は言つた。「私は我慢して眠るつもりなんだよ。だから私が悪いのぢやない。」彼女の聲は、泣き出さうとしてゐる子供の聲のやうに顫へてゐた。

老公爵も、矢張り眠られなかつた。ウト／＼眠つてゐたチホンは、老公爵が腹立たしさに歩き廻つてゐるのや、鼻をかんでゐるのなどを聞いた。老公爵は、自分の娘の爲に、自分が侮辱されたやうに感じてゐた。侮辱は、苦痛なものであつた。それは、自分に關してゐるのではなく、自分以外の者、即ち自分よりも可愛がつてゐる娘に關してゐたからであつた。彼は、この事件を十分考へて、正當な事、當然な事を見附けなければならない、と自分自身に言ひ聞かした。が、そんな事所ではなく、ます／＼腹立たしきを感じるに過ぎなかつた。

「初めての風來者が来たばかりで、もう父親も何も彼も忘れて仕舞ふ、そして二階へ駆け上つて、髪を結ぶ、そわ／＼する、そして少しも落付いてはゐない。父親を棄てるのが嬉しいのだ！ それを俺が付けてゐるといふことも知つてゐるのだ。チエ……チエ……チエ……あの馬鹿者が、ブリアンヌばかりを見てゐることを俺が知らずに居るものか。(あの女は追ひ出してはなけれやならない)だが俺には何うして、あれが分る程の自尊心がないのだらう？ 假りに彼女が、自分の爲めに自尊心を持つてゐないとしても、少くとも俺の爲めには持つて呉れなければならん。それから、あの馬鹿者が、彼女のことは思はないで、ただブリアンヌばかりに目を付けてゐることを俺に知らせてやらなければならぬ。彼女は自尊心といふものを少しも持つてゐない。併し、俺はそれを彼女に見せてやる……」

娘が迷つてゐることや、アナトールがブリアンヌを手に入れやうとしてゐることなどを娘に告げてやれば、マリイの自尊心は、刺戟され、自分の仕事(娘と別れない希望)は達せられると言ふことを老公爵は知つてゐた。で、老公爵は此事に就いて安心した。彼はチホンと呼んで着物を脱ぎ始めた。

「飛んでもない奴等が来たものだ！」と、老公爵は、胸に白髪が生えてゐる老いさらばへた老公爵の體に寝衣のシャツを着せてゐる時に、思つた。

「俺は彼奴等を招きはしなかつたのだ。彼奴等が俺の生涯を掻き亂しにやつて来たんだ。そして俺の生涯ももう長くはないのだ。」

「畜生奴！」と、彼は頭がまだ寝衣に蔽はれてゐる時呟いた。

チホンは、老公爵に、何うかすると自分の考へを聲に出して云ふ癖があることを知つてゐるので、シャツの中から現はれた顔の、怒つたやうな、訝かしげな眼付を見ても平氣な顔をしてゐた。

「彼奴等は寝たか？」と、公爵は尋ねた。

チホンは、凡ての善良な侍僕のやうに本能で、主人の考へ方を知るのであつた。彼は、主人が聞いたのは、ワシリーイ公爵父子のことだと推量した。

「はい、お客様方はお就床になつて、燈をお消しになりましたして御座います。」

「さうだらう、さうだらう……」と、公爵は早口に言ひ、上靴を足に突掛け、寝衣に腕を通して、何時も寝る寝椅子の方へ行つた。

アナトールとブリアンヌ嬢との間には、言葉も取交はされたものではなかつたが、二人は、お互にロオマンヌの第一編即ち「哀れな母親」の前の所までは十分に理解し合つてゐた。彼等は、内密でお互に、話したい事がいろいろあるやうに思つた。で、早朝から二人限りで逢ふやうな機会を求めてゐた。公爵令嬢が何時もの時間に父親の所へ行つてゐる間に、ブリアンヌ嬢はアナトールと冬園の中で出會つてゐた。

その日、公爵令嬢マリヤは、特に身振をしながら書齋の扉口へ近付いた。彼女は、誰も彼も自分の運命が今日決まるといふことを知つてゐるばかりでなく、その事に就いて自分が考へてゐる事まで知つてゐるやうに思はれた。彼女は、チホンの顔付と、湯を持つて廊下を行きながら、低く彼女に點頭をしたワシリーイ公爵の従僕の顔付とに、それを読んだ。

その朝、娘に對する老公爵の態度は、非常に優しく、非常に愛想がよかつた。その愛想のいゝ表情を公爵令嬢マリヤはよく知つてゐた。その表情は、公爵令嬢マリヤが數學の問題などの解らなかつた時、よく焦れ込んで、皺くちゃになつたその手を握り締め、立ち上つて、令嬢の傍を去つて行く時、低い聲で同じ言葉を幾度も繰り返す時の父

の顔に見る表情であつた。

彼は、早速要點に這入り、殊更ら他人行儀な(貴女)と云ふ言葉を使つて話し出した。

「あなたのことで、私に申込みがあつたのだ」と、彼は態とらしく微笑しながら言つた。「あなたも既う推量はしてゐるだらうと思ふが」と、彼は續けた。「ワシリーイ公爵が被保護者を連れて此處へきた譯は、(公爵ニコライ、アンドレ・キツチは何ういふ譯か、アナトールを被保護者と呼んだ。)'私の美しい眼の爲めではなかつたのだ。昨日あの人達は、あなたのことで私に申込みをした。が、知つての通りな主義だから、私はこの事をあなたに任せる。」

「でもお父様、私お父様の有仰ることを何うとつたらいいのでせう？」と、公爵令嬢は赤くなつたり、蒼くなつたりして尋ねた。

「何うとる！」と、父親は腹立たしきうに叫んだ。「ワシリーイ公爵は嫁としてお前が気に入つたから、自分の被保護者の爲めに、お前に結婚の申込みをしたのだ。之を何うとつたらいいのだつて、何うとつたらいいのだつて？ ……」

「でもお父様、私には、あなたが何うお考へになつてゐるか、は、分りませんもの……」と、公爵令嬢は騒ぐやうに言つた。

「私が？ 私が？ 私が何うしたんだ？ 私は問題外に置いて呉れ。私が結婚するのではない。あなたは何う思ふか、私はそれが知り度いのだ。」

公爵令嬢は、父親がこの事に就て餘り氣が進んでゐないのを知つた、が、同時に、自分の一生運命は、今でなければ決せられる時はないのだといふことも考へた。彼女は、父親の眼付を見ないやうに眼を落した。父親に見られ

てゐては、考へることも出來ず、何時もの通り、たゞ従順に従ふだけだ、といふ事を感じたからであつた。彼女は言つた。

「私のたゞ一つの望みは、お父様のお思召通りにするといふ事ですわ。」と、彼女は言つた。「けれど、若し私の望みを申さなければならぬのですのならば……」

公爵令嬢は、言ひ切る暇がなかつた、公爵は彼女を遮つた。

「それなら大に結構だ！」と、彼は言葉を結んだ。「彼奴は持參金を目的にお前を貰ふのだ。そして序にブリアンヌ嬢も搔つさらふのだ。あの娘は妻になるだらうが、お前は……」

公爵は言葉を切つた。彼は、自分の言葉が娘を感動させたことに氣が付いた。娘は、頭を垂れて今にも泣き出さうとしてゐた。

「これ、これ、私は戯談を言つたのだ、私は戯談を言つたのだ。」と、公爵は言つた。「たゞ一つこれだけは覚えてゐてくれ、女子は十分選擇の權利を持つてゐるといふ、この法則を私は主張すると云ふことをな。だから私はお前に自由を與へる。お前の生涯の幸福はお前の決心で決まると云ふ事だけは覚えてゐてくれ。何も私の事などを云ふ必要はないのだ。」

「でも私には分りませんもの……お父様。」

「何もいふ必要はない！ 彼は言ひ付けられさへすれば、お前とばかりでなく誰とでも結婚するつもりであるのだ。併し、お前には擇ぶべき自由があるのだ……自分の部屋へ歸つて、よく考へて御覽、そして一時間経つた、また私の所へ來て、彼の居る前で、可か否か言つてくれ。お前が祈禱をすることは、私には分つてゐる。祈禱するが

い。だが兎に角考へなければいけない。行つても宜しい——可か否か、可か否か、可か否かをね！」と、公爵は、令嬢が霧に包まれてゐるやうに、よろめき乍ら部屋を出て行つても尙ほ叫んだ。

彼女の運命は決つてゐた。幸福に決つてゐた。けれど、父親がブリアンヌ嬢について言つたことは恐ろしい暗示であつた。假令そんなことはないとしても、矢張り恐ろしかつた。彼女は夫れを考へないではゐられなかつた。彼女は、自分の前の冬園の中を真直ぐに歩いて行つた。が、何も聞えもしなければ、見えもしなかつた。と、唐突に、聞き慣れたブリアンヌ嬢の囁き聲にハツと我れに返つた。眼をあげると、二歩ばかり前に、アナトールを見た。彼はフランスの女を抱いて、何か彼女に囁いてゐた。アナトールは綺麗な顔に恐ろしい表情を見せて、公爵令嬢マリヤの方に振り向いた。が、直ぐにはブリアンヌ嬢の腰を離さなかつた。ブリアンヌ嬢は、まだ公爵令嬢マリヤを見なかつた。

「其處にゐるのは誰だ？ 何用があるのだ？ 一寸待て！」と、かうアナトールの顔は言つてゐるやうであつた。公爵令嬢マリヤは黙つて二人を見つめた。彼女は、之を何んと思つていゝか分らなかつた。到頭ブリアンヌ嬢は叫び聲をあげて駆け出した。アナトールは愉快さうな微笑を浮かべながら、この妙な場合を笑つて呉れとも言ふやうに公爵令嬢マリヤに會釋をし、肩を拵めながら、自分の絲屋の前にある扉の内に入つた。

一時間経つと、チホンが公爵令嬢マリヤを呼びに来て、公爵の所へお出でになるやうにと言ひ、ワシーリイ・セルゲーキツチ公爵も彼處にお出でです、と附け加へた。チホンが来た時には、公爵令嬢は自分の部屋の安樂椅子に腰掛けて、泣いてゐるブリアンヌ嬢を抱いてゐた。公爵令嬢マリヤは、靜かにブリアンヌ嬢の頭を撫でゝゐた。以前のやうに平和に輝やかしくなつたその美しい眼は、優さしい愛と慈みの情を以て綺麗な小さいブリアンヌ嬢の顔を見詰めてゐた。

「Non, Princess, je suis perdue pour toujours dan votre coeur (いゝえお嬢様、私はもうあなたの御同情を永久に失つたのです。）」と、ブリアンヌ嬢は言つた。

「何故なの？ 私、これ迄よりは一層あなたを愛してよ。」と、公爵令嬢マリヤは言つた。「そして、あなたの幸福のために、私の力で出来るだけの事は何でもしてあげますわ。」

「Mais vous me méprisez, vous si pure, vous ne comprend ez jamais cet égarment de la passion ! Ah ce n'est que ma pauvre mère. (でも、あなたは妾をお蔑みなさいますわ、其様に純潔なあなたなんてすもの。あなたには、こんな熱情の<sup>Mah</sup>轟惑はとでも分りませんもの。あゝ、たゞ私の可哀相な母親が……)」

「私何もかも分つてよ。」と、公爵令嬢マリヤは悲しさうに微笑しながら言つた。「安心して被居い、ね。私、お父様の所へ行つて來ますから。」と、マリヤは言つて、出て行つた。

公爵令嬢マリヤが這入つて行つた時、殆んど不可能な程無感覺らしいワシーリイ公爵は脚をぶつ違いに重ね、手に喫煙草函を持ち、自分の感じ深いのを憫み、嘲笑ひでもしてゐるやうに、その顔には感動の微笑を浮かべながら腰掛けてゐた。彼は急いで喫煙草をひと摘み鼻のところへ持つて行つた。

「Ah ! ma bonne, ma bonne ! (おゝ、好い子、好い子！)」と、彼は立ち上つて、マリヤの両手を取りながら言つたが、更に溜息を吐いて附け足した。「悴の運命はあなたの手の中にあるのです。始終娘のやうに愛してゐた、懐しい、可愛いマリイ、決めて下さい。」

彼は身を退いた。その眼には本當の涙が浮んでゐた。

「クフン……クフン……」と、公爵ニコライ・アンドレーキツチは鼻を鳴らした。

「公爵は被保護者に……御子息に代つてお前に結婚を申し込まれたのだ。お前はアナトール・クラアギン公爵の夫人になりたいか、どうだ？ 可か否か言ふがよい。」と、彼は叫んだ。「それから私は、自分の意見を述べる権利を保留して置く。左様、私の意見、たゞ私の意見だけをな。」と、ニコライ・アンドレーキッチ公爵は、ワシリーイ公爵の方に向ひ、彼の歎願するやうな表情に答へて附加へた。「可か否か？」

「お父様、私の願ひは、あなたのお傍を離れないことなんです。私の生活をあなたの生活から離さないことなんです。私は結婚したくないんです。」と、彼女は美しい眼でワシリーイ公爵と父親とを見ながら、きつぱりと言つた。

「馬鹿な！ 飛んでもない！ 馬鹿な！」と、公爵ニコライ・アンドレーキッチは眉を顰めながら叫び、娘の手を取つてぐつと引き寄せた。接吻はしなかつた、が、娘の頬に自分の頬を押し付けて娘に觸り、娘が竦んで叫び聲をあげた程自分が握つてゐる手をしつかり握り締めた。

ワシリーイ公爵は立ち上つた。

「Ma chère, je vous dirai que c'est un moment que je n'oublierai jamais, jamais; mais ma bonne, est-ce que vous donnerez pas un peu d'espérance de toucher ce cœur si bon, si généreux. Dites que peut-être……. L'avoir enir est si grand. Dites: peut-être. (親愛なマリイ、私はこの瞬間を決して忘れないと言ふ事を申して置きます。だが、マリイ、それ程親切な寛大な、あなたの心を、ほんの少しでも動かすことの出来る望みを私達に與へて下さることとは出来ないんですか？ ねえ、萬一したら……: 未来はまだこれから長いのです……: さういふ時が有るかも知れないと有仰つて下さい。）」

「公爵、私の今申し上げましたことは、私の心にある眞實なのです。私は名譽に對してお禮を申し上げます。けれど私は御子息様の妻には決してなりません。」

「公爵、では之れて既うすつかり決まつた。よく来て下さつた、よく来て下さつた。嬢、お前は部屋へ行つていゝ。行つていゝ。」と、老公爵は言つた。「あなたにお目にかゝれて非常に、非常に愉快だつた。」と、老公爵はワシリーイ公爵を抱きながら繰り返した。

「私は別な使命を持てるのだわ。」と、公爵令嬢マリヤは獨り考へた。「私の使命は他人の幸福を見て自分も幸福になることなんだわ、愛と犠牲の幸福を見て、自分も幸福になることなんだわ。之が私にとつて何んなものであつても、あの可哀なアメエリイを幸福にしてやらなければならぬわ。アメエリイは、あんなに熱心にあの人を愛してゐるのだもの。あんなに熱心に後悔してゐるのだもの。あの二人を結婚させる爲めには、私はどんな事でもしてやるわ。若しあの方が金持でないのなら私はアメエリイに財産をやらう。お父様にもお願ひするし、アンドレーイにもお願ひするわ。アメエリイがあの方の奥様になつたら、私、どんなにか幸福だらう。アメエリイはほんとに不幸で、外國人で、獨りぼつちで、頼りない女なんだもの？ それに、あゝして自分を忘れることが出来る位なんだから、ほんとに何んなに深くあの人を愛してゐるか知れないんだわ。私だつて、ひよつとしたら然うなつたかも知れなかつたんだわ……:」と、公爵令嬢マリヤは考へた。

ラストフ家の人々は、ニコルシカ(ニコライの愛稱)の音信を長い間受け取らなかつた。たゞ冬の最中に一通の手紙がラストフ伯爵の手に渡されただけであつた。その封筒の上書で、伯爵は自分の息子の手紙であることを知つた。手紙を受取ると伯爵は喫驚し、慌てながら、氣附かれないやうに爪先で自分の書へ齧馳け込み、びたりと扉を閉ぢて手紙を読み始めた。アンナ・ミハイロウナは、何時も彼女は家内に起る事は何もかも知るのであつた。手紙が来たのを知り、足音を忍ばせて、伯爵の所へ這入つて行つた。伯爵は手に手紙を持つて、泣いたり笑つたりしてゐた。

アンナ・ミハイロウナは、もう自分の仕事が整理されたのに、やはりラストフ家で暮してゐた。

「Mon bon ami(私の良いお友だち)」と、アンナ・ミハイロウナは、不審さうに悲しさうに、何んなことにでも嘴くちを入れやうとするやうに、聲を出した。

伯爵は一層激しく啜り泣いた。

「ニコルシカが……手紙を……負傷した……さうだ……ma chère(あなた)……負傷したんです……可愛い奴が……小さい伯爵夫人……將校に昇進した……有難いことだ……小さい伯爵夫人にどう話したらいいだらう?……」

アンナ・ミハイロウナは、伯爵の傍に腰掛け、自分のハンカチーフで伯爵の眼や涙に濡れた手紙などから涙を拭き取り、それから自分の涙を拭いて、手紙を読み、伯爵を慰めた。そして食事の前と、お茶の前に、自分から伯爵夫人にうす／＼知らせて置いて、お茶が済んでから、うまく行きさうであつたら、悉皆打明けやうと言ふ事を決めた。

食事の間アンナ・ミハイロウナは、戦争の噂をしたり、ニコライのことを言つたりした。よく知つてゐるのに、ニコライから最近に着いた手紙は何時だつたかと二度も訊いた。今日あたりは屹度、ニコライから手紙が来るだらうなどと

言つた。かう言ふ暗示ヒントのおかげで、伯爵夫人が心配し初め、怦々カクンカクンと伯爵を見たり、アンナ・ミハイロウナを見たりする毎に、アンナ・ミハイロウナは、人の氣の附かぬやうに話題を取り留めもない事柄の方へ持つて行つた。家族の中で、生れつき人の聲の調子や、眼付き、表情などに現はれる蔭影を感じる能力を一番餘計に持つてゐたナターシャは、食事の始めから耳を聳て、父親とアンナ・ミハイロウナとの間に何事かあるといふこと、何か兄に關係した事があるといふこと、そしてアンナ・ミハイロウナが其ことを打明けやうと瀕踏みをしてゐることなどを覺つた。ナターシャは、(彼女は母親が、ニコルシカの消息に關したことなら、何にでも神經過敏であることを知つてゐた。)何時もの向ふ見ずにも似ず、食事の時には何にも聞かうとはしなかつた。そして心配のあまり食事の時、何にも食はず、家庭教師の注意も耳に入らずに椅子の上で身體を彼方へねぢ向けたり此方へねぢ向けたりしてゐた。食事が済むと、彼女はアンナ・ミハイロウナの後を追うて裏直なつしたちに駈け出した。が、餘り走つたので喫煙室で、アンナ・ミハイロウナに飛び付いた。

「ねえ、伯爵さん、何事なの?」

「何でもありませんよ。」

「いゝえ、何でもない事はないわ。ねえ、大好きな、美味い桃いちじくのやうな伯爵さん、私、どうしたつて放さなくつてよ。私は伯爵さんが何か知つてゐることを知つてゐてよ。」

アンナ・ミハイロウナは頭を振つた。

「まア、あなたは感じが早いねえ!」と、彼女は言つた。

「ニコルシカ(ニコライの愛稱)から手紙が来たのでせう? 屹度さうだわ!」と、ナターシャはアンナ・ミハイロウナの顔に「さうですよ」と言ふ答へを読みながら叫んだ。



「でも後生だから、氣を付けて下さいよ。お母様がどんなに喫驚なされるか知れませんかね。」  
 「氣を付けるわ、氣を付けるわ。だから聞かして頂戴。聞かして下さらないの？ ちや、私、直ぐに行つて、お母様に申しあげるわ。」

アンナ・ミハイロウナは、誰にも話さないと云ふ條件で、手紙の意味をかい摘んでナターシャに話した。

「私、誓つて、」と、ナターシャは十字を切りながら言つた。「誰にも話さないわ。」それから直ぐソーニヤの所へ驅けて行つた。

「ニコレンカが……負傷してよ……手紙が……」と、彼女は元氣よく嬉しさうに言つた。

「ニコライが！」と、ソーニヤは辛つと言つて、見る間に眞蒼になつた。

ナターシャは兄の負傷したといふ知らせが、ソーニヤに與へた影響を見ると、初めてその音信の悲しい方面を感じた。

彼女は、ソーニヤに跳び付き、ソーニヤを抱き締めて、泣き出した。

「少し負傷はしたのだけれど將校に昇進したのよ。今では快くなつたつて、自分で手紙を書いて寄こしたのよ。」と、

彼女は涙聲で言つた。

「女はみんな泣き虫だなア。」と、ペーチャは部屋の中をどしどしと大股で歩きながら言つた。「僕、ほんとに嬉しいなア。兄さんがそんな偉い手柄をしたなんて、ほんとに嬉しくつて仕様がないや。ヒイ／＼泣き出すなんて！ みんなには何にも分らないんだ。」

ナターシャは涙をこぼしながら莞爾した。

「あなたは手紙を読まなかつた？」と、ソーニヤが尋ねた。

「讀まなかつたけれど、伯母さんが、兄さんはすつかり平癒なつて、もう將校だつて言つたわ。」

「神様の御蔭だわ。」と、ソーニヤは十字を切りながら言つた。「けど、ひよつとしたら、伯母さんはあなたを瞞したのかも知れなくつてよ。お母様の所へ行つて見ませうよ。」

ペーチャは黙つて部屋の中を歩いてゐた。

「若し僕がニコルシカ兄さんだつたら、フランス人をもつと、どつさり殺してやるんだがなア。」と、ペーチャは言つた。「彼奴等はほんとに悪い人間だ！ 僕なら山になる程彼奴等を殺してやるんだけれど。」と、ペーチャは續けた。

「おだまり、ペーチャ、何てお前はお馬鹿さんだろう！……」

「僕は馬鹿ぢやないや、つまらない事に泣く奴こそ馬鹿なんだい。」と、ペーチャは言つた。

「あなた、あの人を覚えてゐて？」と、暫く黙つてゐたナターシャはだしぬけに訊いた。

ソーニヤは莞爾した。「ニコレンカを覚えてゐるか云ふの？」

「いゝえ、ソーニヤさん、あなたは、判然と思ひ出せる程、何もかもすつかり思ひ出せる程、あの人のことを覚えてゐて？」と、ナターシャは情熱的な身振をして言つた。之は明らかに自分の言葉に、非常に眞面目な意味を附け加へようとするのであつた。「私も、ニコレンカ兄さんなら覚えてゐるの、私、覚えてゐるわ。」と、ナターシャは言つた。「けど、パリースの事は覚えてゐないわ、一寸も覚えてゐないわ……」

「何うしてなの？ パリースさんを覚えてゐないの？」と、ソーニヤは喫驚して訊いた。

「覚えてゐないと云ふわけぢやないの。私、あの方がどんな人だつたか覚えてゐるわ。けれど、ニコレンカ兄さん

のやうに覺えてはゐないの。私眼を瞑ると、兄さんなら思ひ出すの、けど、パリスは思ひ出さないことよ。(ナターシャは眼を瞑つて、)かうしても駄目よ、ちつとも思ひ出さないわ。」

「あゝ、ナターシャ！」と、ソーニヤは、自分の言はうとしてゐる事を聞くだけの價值は、ナターシャには無いと考へたやうな風で、そして戯笑などの分らない誰れか外の人に話しかけるやうな風で、この友達を眞面目に熱心に眺めながら言つた。「私が愛したのは、あなたの兄さんが始めてなの。そして、あの方にどんな事が起つても、また私にどんな事が起つても、私、一生涯あの方を愛することを止めはしないわ。」

ナターシャは吃驚して、訝がるやうな眼付で、ソーニヤを見ながら黙つてゐた。彼女は、ソーニヤの言つたことは本當だと思つた、ソーニヤが言つたやうな戀愛はあるものだと思つた。けれどナターシャは、まだ、さうした戀愛を経験しなかつた。で、彼女は、これは有り得るものだと信じてゐたが、理解することは出来なかつた。

「あなた、兄さんに手紙をお遣りになる？」と、ナターシャは訊いた。  
ソーニヤは思ひに沈んだ。ニコライにどう手紙を書いたものだらう、手紙を書かなければならぬだろうか、何う書いたものかと云ふ問題が、ソーニヤを悩ます問題であつた。今、彼がもう將校になり、負傷した勇士になつてゐるのに、彼女の方から自分の事や、自分の爲に負擔した義務のことなどを彼に思ひ出させることは、果して宜いことだらうか？

「私分らないわ。若しあの方がお手紙を下さるやうだつたら私も書くわ。」と、ソーニヤは顔を赧めながら言つた。

「兄さんに手紙を書くのは、あなた、耻かしくはないこと？」

ソーニヤは莞爾した。

「いえ。」

「でも、私、パリスに手紙を書くんだつたら耻かしいわ。だから私は書かないことよ。」

「けど、何故あなたは耻かしいの？」

「あら、それや分らないわ。けど何だかへんなの、何だか耻かしいのよ。」

「何故耻かしいんだか僕は知つてゐるよ。」と、ナターシャの先刻の言葉に腹を立て、ゝゝゝ、おのゝこ言つた。「あの眼鏡の太つちよに惚れてゐたからなんだい。(ペーチャは自分の同名者たる新伯爵ベズウホフを斯う呼んでゐた。)それから今ではあの音楽家に惚れてゐるからだい。(ペーチャはナターシャの音楽教師のイタリイ人のことを言つたのである。)だからナターシャは耻かしいんだ。」

「ペーチャ、お前はほんとにお馬鹿さんよ。」と、ナターシャが言つた。

「お前より馬鹿ぢやないぜ、マアチユシユカ(奥さん)」と、九歳になるペーチャは、さながら年取つた旅團長でゝもあるかのやうに言つた。

伯爵夫人は食事の時、アンナ・ミハイロウナから暗示を受けたので、うす／＼覺悟をしてゐた。自分の部屋へ歸ると、伯爵夫人は安樂椅子に腰掛けながら喫煙草の蓋に嵌めてある息子の小さい肖像から眼を放さなかつた。彼女の眼には涙があふれてゐた。アンナ・ミハイロウナは手紙を持ち、爪先立つて伯爵夫人の部屋に近付いた。そして立ち止つた。「お這入りになつては不可ませんよ。」と、彼女は後から跟いてきた老伯爵に言つた。「後で。」さう云つて彼女は自分の後の扉を締めた。

伯爵は鍵穴に耳を押し着けて、ぢつと聴耳を立てた。

最初は彼は、落付いた話聲を聞いた。が、やがてアンナ・ミハイロウナのくどくどと話してゐる聲だけが聞え、それから叫び聲が聞え、こんどは話聲がびつたり止み、次には二人の嬉しきうな調子の話し聲と一緒に聞え、次に足音が聞え、やがてアンナ・ミハイロウナが扉を明けて老伯爵を入れた。アンナ・ミハイロウナの顔には面倒な切斷手術をやつてその手際を見せつける爲めに、公衆を招く手術者に見るやうな得意の色が表はれてゐた。

「Over the front (もう宜しう御座います。)」と、アンナ・ミハイロウナは元氣のいゝ身振りをして伯爵夫人を指差した。伯爵夫人は片手には肖像の描いてある喫煙草函を持ち、片手には手紙を持つて、交る／＼それを唇に押し付けてゐた。

伯爵を見ると、伯爵夫人は兩腕をさし出し、伯爵の禿頭を抱へ、その禿頭の上から再び手紙と肖像とを見た。そして又もそれを唇に押し當てようとして、そつと禿頭を押し退けた。ヴェーラも、ナターシャも、ソニーヤも、ベーチヤもこの部屋へ這入つてきた。手紙の朗讀が始まつた。手紙には、行軍のことや、ニコルシカが参加した二度の戦争のことや、昇進のことなどが簡単に書いてあつた。それからお父様やお母様の祝福を祈つて、その手に接吻すること、ヴェーラや、ナターシャや、ベーチヤにも接吻するといふやうな事も書いてあつた。彼はまたシェリング氏や、シヨス夫人や、乳母にも宜しくと書き、更に前と同様に愛してゐて、以前と同じく想ひ出してゐる大切なソニーヤを接吻して呉れと書いてゐた。之を聞くとソニーヤは赧くなり、その眼には、涙が浮んだ。そして皆なに見られるのに堪りかねて、大廣間へ駆け込み、駆け廻つたり、ぐる／＼廻つたりて、赧らめた顔へ微笑を漂へながら、袴をまるめて風船のやうに脹らかして床の上に坐つた。伯爵夫人は泣いてゐた。

「お母様、どうして泣いて被居るの!」と、ヴェーラが言つた。「手紙に書いてある事は、泣くどころぢやない、みんな悦ばなければならぬ事ばかりですわ。」

實際それは眞實であつた。けれど伯爵も、伯爵夫人も、ナターシャも、凡て批難するやうにヴェーラを眺めた。この娘は一體誰に似たのだらう?」と、伯爵夫人は思つた。

ニコルシカの手紙は、幾度も／＼讀み返されに。そして、それを聞く價値があると思つた人達は、皆伯爵夫人の所へ行かなければならなかつた。夫人は、その手紙を手から放さなかつたのである。家庭教師達も、乳母も、ミーチエンカも、幾人かの知人も行つた。伯爵夫人は、その度毎に新しい興味をもつて手紙を讀み、その度毎に、手紙の中からニコルシカの新しい美點を見出すのであつた。伯爵夫人にとっては、自分の息子——二十年以前には、自分の胎内で微かに小さい手足を動かしてゐた其息子、その爲めに氣儘な伯爵と喧嘩をした其息子、一番初めには「梨」と言ひならひ、次には「お婆ちゃん」と言ひならつた其息子——その息子が今は、この見知らぬ土地、見慣れぬ風物の中に、勇敢な戦士となり、ただ一人誰れの助けも藉らず、何等の導きもなく、自分の男らしい働きをしてゐるといふことは、如何にも不思議で、異常で、喜ばしかつた。子供達が搖籃から知らず／＼の間に成人になるといふ、昔からの、世間一般の經驗は、伯爵夫人には存在してゐなかつたのである。自分の息子の一歩／＼成長して行つた事が、伯爵夫人には實に異常なことに思はれた。他の幾百萬とも知れぬ人間もこんな風に成長して行つたとは到底考へられないほどであつた。自分の心臓の下の何處かに生きてゐた小さい者が、呱呱の聲をあげ、乳を飲み、物を言ふやうにならうとは、二十年以前には信じられなかつたやうに、今も、その小さい者が、この手紙で判斷されたやうな、そんな強い勇敢な男になり、息子の模範、人々の模範となつてゐやうとは信ずることが出来なかつた。

「何といふ文章だらう。ほんとに愛らしく書いてある!」と、伯爵夫人は手紙のいゝ文句を讀みながら、言つた。「何といふ精神だらう! 自分のことと言つたら一言も言つちやゐない……一言も! 自分は誰よりも勇ましかつ

たのだらうに、ヂエニツフといふ男のことばかり書いてゐる。自分の苦痛くるしみのことなどは一言も書いぢやない。何といふ心だらう！ あの子は、私が思つてゐた通りだわ！ 皆なのことと思つてゐる！ 誰の事も忘れないでゐる。私は何時も、何時もよく言つてゐたが、これが未だこの位たけの身長にもならなかつた時、私は何時もよく言つてゐたが：  
……」

それから一週間餘り家中の者は、ニコルシカにやる手紙を何んと書いたらいゝかと考へたり、下書を書いたり、清書したりした。伯爵夫人の見立てと、伯爵の心遣ひとで、新たに昇進した將校服と、その他の仕度に要する品物や、金も整へられた。世故に老けた女のアンナ・ミハイロウナは、自分と、自分の息子との爲めに、手紙を往復する便宜を軍隊内に得ることに成功した。彼女は近衛の司令官たるコンスタンチン・バウロキツチ大公に手紙を送る機会を持つてゐた。ラストフ家の人々は「外征ロシア近衛師團」と云ふのが、一番確かな宛名であること、若し手紙が近衛の司令官たる大公の手許へつけば、その附近にゐるらしいパウラグラド聯隊へ届かない筈はないことなどを臆断してゐたのであつた。で、手紙と金とを大公の特使の手を経てパリースへ送ることに決めた。パリースは更にそれをニコルシカに渡して呉れるに違ひない。で、荷物は、老伯爵、伯爵夫人、ベーチヤ、ヴェーラ、ナターシヤ、ソーニヤからの手紙と、正服料の六千ルーブルと、伯爵が息子に送るいろ／＼な品物とで造られた。

## 七

十一月の十二日に、オルミユツツの近くに陣營を張つてゐたクツツゾフの軍隊は、翌日ロシア及びアウストリヤ兩皇帝の檢閲を受ける準備をしてゐた。ロシアから着いたばかりの近衛兵は、オルミユツツから十五露里ウエルストの所で野營し、直ぐに翌朝十時に檢閲を受ける爲にオルミユツツ平原へ行つた。

その日、ニコライ・ラストフは、パリースから手紙を受取つた。その手紙には、イスマイロウスキ聯隊がオルミユツツへ十五露里ウエルストの所に宿泊してゐること、彼に會つて手紙と金とを渡したいと云ふことが書いてあつた。軍隊は戦線から歸つてきて、オルミユツツ附近に駐屯してゐるし、折柄陣營では、十分用意の整つてゐる酒保や、アウストリアの猶太人ヂウなどが種々な誘惑品を見せつける時なので、ラストフは尙更早く金が欲しかつた。パウラグラドの驃騎兵達は、絶えず酒宴をやつたり、戰場で受けた賞與の祝賀會を開いたり、近頃オルミユツツに來たカロリーヌ・ラ・ホングロアーズといふ女が、女の給仕人を連れて來て料理屋を開いたので、そこへ遊びに出掛けて行つたりしてゐた。ラストフは丁度騎兵旗士としての任命を祝ひ、またヂエニツフの馬のベッドウインを買つたばかりの所であつた。で、同僚や酒保には借金だらけであつた。パリースから手紙を受取ると、ラストフは、一人の同僚と一緒にオルミユツツに馬を驅つて、そこで食事をやり、葡萄酒を一本空けて、それから幼年時代の友達を見付ける爲めに、たゞ一人近衛の陣營に馬を驅つた。ラストフは未だ制服を換へてゐなかつた。彼は、兵卒用の十字架の附いた見窄らしい見習士官のジャケットを着、擦り切れた皮の當つてゐる見窄らしい乗馬袴ズボンを穿き、柄總つかぶさの附いた士官のサアベルを佩かびてゐた。彼の乗つてゐた馬は、行軍中コザツクから買つたドン産の馬であつた。頭には、潰れた驃騎兵の軍帽を後の方に意氣に曲げて被つてゐた。イスマイロウスキ聯隊の陣營へ馬を驅りながら、どんな風にしたら砲火の下に戦つた勇ましい驃騎兵の風貌を遺憾なく見せて、近衛にゐるパリースやパリースの戦友達を驚かすことが出来るだらうかと考へた。

近衛は、自分達の風采の意氣なことや、軍紀の正しいことなどを語りながら、何時も遠足かなんぞのやうに行軍してゐた。其行軍も僅かなものであつた。負傷兵は輜重車で運搬され、行軍中アウストリアの司令官は、將校達に素晴らしい御馳走をした。諸聯隊は軍樂を奏しながら、街へ這入つたり、出たりした。そして大公の命令に従ひ、行軍ちう常に兵卒の歩調を整然と揃へ、將校達は各自その位地について歩いた。(それは近衛が誇つてゐる點であつた。)パリスは、行軍中は何時も、この時既に中隊長になつてゐたベルグと、一緒に歩いたり、泊つたりした。行軍中に中隊を引受けてゐたベルグは、正確なのと、謹嚴なのとで、司令官の信用を得て了ひ、自分の財政を有利に確立した。パリスも行軍中に、自分に役に立ちさうな多くの人々と知己になり、ビエールから貰つてきた紹介狀に依つてアンドレー・バルコンスキイ公爵とも知己になつた。この公爵を通して、彼は總司令官の幕下に或る位置を得たいと云ふ希望を持つてゐたのであつた。小ざつぱりと、氣の利いた服装をしたベルグとパリスとは、前日の行軍の後で、一休みしてから、自分達に充てがはれた小綺麗な宿舎の圓卓子の前に座つて、將棋をやつてゐた。ベルグは膝の間に煙の立つてゐるパイプを持つてゐた。パリスは、ベルグの手を待つてゐる間に、持前の謹嚴な態度で、華奢な、白い指で、將棋の駒をピラミット形に積み重ねてゐた。彼は何時も自分の遣つてゐる事のみを考へるやうに、明かに勝負のことを考へてゐるらしく、ちつと相手の顔を見守つてゐた。

「さアあなたは之を何う遁げますかね？」と、彼は言つた。

「まアやつて見ませう。」と、ベルグは將棋に手を觸れながら答へた、が、再び手を引込ませた。

その時扉口が明いた。

「やつと見付けた！」と、ラストフが叫んだ。「ベルグもゐるね。Ah, peisunfan, alley conshez dormir! (やああ、

坊ちやま、おやちゆみなさい!）」と、彼は、昔自分とパリスとが笑つた乳母の言葉を繰り返して叫んだ。

「やあ君かね! 随分君は變つたなあ!」パリスは立ち上つてラストフを迎へた。が、起ち上る時、將棋盤を抑えて、落ちた駒を元の所に置くことを忘れなかつた。彼は友達を抱かうとしたが、ニコライは身を退いた。彼は、友だちに會つた時、青年に特有な感じで、何か特別なことをして見たかつた。青年は陳腐な遣り方を怖れてゐる。青年は他人を模倣せずに、新しい獨特な方法で自分の感じを表はしたいと思つてゐる。そして多くの老人がするやうに、虚偽な感情の表はし方をするのを嫌つてゐる。それでニコライも、誰でもするやうな接吻は決してせずに、何うかしてパリスを掴めるか、衝き飛ばすかして見たかつたのであつた。ところが、パリスは、落着いて親しげにラストフを抱き、三度彼を接吻した。

二人は殆んど半年も會はなかつた、若い人達が人生の行路にその第一步を踏み出す年配であつたので、二人はお互ひに相手の中に、非常な變化を見出し、二人が生活の第一步を踏み込んだ違つた社會の全く新しい反映を見出した。二人ともお終ひに會つた時から非常に變つてゐた。そして二人とも自分に起つた變化を出来るだけ早く相手に見せたがつてゐた。

「あゝ、呪はれた床拭き諸君! まるで遊んでばかり居たものゝやうな、小ざつぱりして晴々した顔付をしてゐるぢやないか。僕等のやうな戦地にゐた罪人とは違ふね。」ラストフは、パリスが今迄聞き馴れなかつた上低音の聲を響かせながら、軍人らしい威猛高な調子で言つて、自分の土塗れになつた騎馬袴を指さした。

宿のドイツ婦人は、ラストフの高い聲を聞きつけたので、扉口からヒョイと頭を出した。

「別嬪ぢやないか、え？」と、彼は目ませをしなが言つた。

「何故君はそんなに怒鳴るんだ？ みんな驚駭して了ふぜ」と、パリースが言った。「だが今日君に會はうとは思ひがけなかつた。」と、彼は附け加へた。「何しろたつた昨日、僕の友達で、クツウソフの副官のバルコンスキイに頼んで、君の所へ手紙を送つたばかりなんだからねえ。こんなに早くあの男が君に届けてくれやうとは思はなかつた。……時に、何うだい？ もう砲火の下に立つたかい？」と、パリースは尋ねた。

それには答へずに、ラストフは、軍服の飾り紐に下げてゐる兵卒用のゲオルギイ十字勳章を振つてみせ、それから自分の縋帶した片腕を指さして、ニコ／＼しながらベルグを見た。

「この通りだ。」と、彼は言った。

「それは何うしたのだ、成程、々々！」と、パリースは微笑しながら言った。「だが、僕等も素晴らしい行軍をやつたよ。君も知つてる通り、殿下は始終我々の聯隊と御一緒だったので、我々は非常に便利で都合が好かつた。ポーランドでは、盛大な歓迎會や、晩餐會や、舞踏會などがあつた！——とても僕の口では君に言へない位だつた。それから皇太子殿下は我々將校に非常な優遇を賜つたよ。」

二人の友達はお互に語りあつた。一方は驃騎兵の酒宴や、戰場生活を語り、一方は皇族達の配下に於ける勤務の愉快と便利とを語つた。

「お、近衛はいゝね。」と、ラストフは言った。「だが、どうだね一ツ酒を取り寄せないか。」

「君が是非欲しいのなら。」と、彼は言った。

そして彼は寢臺の方へ行き、小ざつぱりとした枕の下から財布を取り出して、酒を持つて来るやうにと言ひ付けた。

「あゝ、それから君に渡すべき手紙と金がある。」と、彼は附け加へた。

ラストフは、手紙を受け取り、金は安樂椅子の上に投げ出したまゝ、卓に兩腕をつきながら讀み出した。二三行讀むと、彼はむつとしてベルグを見た。彼の視線に出會すとラストフは手紙で顔を隠した。

「だが大分金を送つて来たやうですね。」と、ベルグは、安樂椅子の上にとつしりと沈んでゐる重さうな袋を見ながら言つた。「伯爵、我々は俸給だけで何うにかかうにかして行つてゐるんですよ。少し内所であなたに話したいことがある……。」

「ねえ、あなた、ベルグ。」と、ラストフは言った。「若し、あなたが家から手紙を貰つたり、いろ／＼の事を訊きたいと思ふ家の者にも會つたりした場合、僕が其處に居合せてみたら、僕はあなたの邪魔にならないやうに早速座を外づしますね。ねえあなた、何うか何處かへ行つてくれませんか、何處かへ……何處へでも！」と、彼は叫んだ、が明らかに自分の言葉の粗末なのを和げやうと努めながら、早速ベルグの肩を掴み、愛想よく、その顔を覗き込んで附け加へた。「ねえ、あなた、あなたは僕を知つてゐる、怒りやしませんまいね、僕は、昔の友達として開けつばなしに言つてゐるのです。」

「あゝ、もう澤山だ、伯爵、僕にはよく分つてゐます。」と、ベルグは、起ち上りながら、喉聲で獨語のやうに言つた。「宿の者達のとこへいらつしやい、宿の奴等があなたを招んでみましたよ。」と、パリースが附け加へた。

ベルグは、汚點一ツない小さつぱりとした上衣を着て、鏡の前で、アレキサンドル・バアウロキツチ皇帝を眞似て自分の髪を上へ梳き上げ、ラストフの表情に依つて、自分の上衣が眼に止まつたことを確めながら、快よい微笑を浮べて部屋から出て行つた。

「あゝ、それにしても、俺は何といふ畜生だらう！」と、ラストフは手紙を読みながら言った。

「えゝ、何に？」

「あゝ、それにしても、俺は何といふ豚だったらう、ちつとも手紙を遣らずに、みんなに此様な心配を掛けるなんて。あゝ、俺は何といふ豚だらう！」と、彼はサツと顔を赧めながら繰り返した。「さうく、君はガヴリーラに酒を取りやつて呉れたね？ あゝ結構だ。一つ傾けやうぢやないか！」と、彼は言った。

家族からの手紙の中には、バグラチオン公爵に宛てた紹介状も這入つてゐた。その紹介状は伯爵老夫人がアンナ・ミハイロウナの勧めにより、知人を経て手に入れたもので、この紹介状を宛名の人の所へ持つて行つて、之れを利用するやうにと、息子に送つて寄こしたのである。

「なんだ下らない！ 恐ろしく俺には役に立つ！」と、ラストフはその手紙を卓の下へ投げ込みながら言った。

「何だつて君はそれを棄てるんだ？」と、バリースが訊いた。

「何か紹介状みたいなものなんだ。こんな手紙は僕には不要だ！」

「何故不要なんだ？」と、バリースはその手紙を拾ひ上げ、宛名を読みながら言った。「君にとっては非常に役に立つ手紙ぢやないか。」

「僕は何にも、欲しくはない。それから誰の副官にもなりたくはない。」

「どうしてだ？」と、バリースが訊いた。

「従僕の仕事だもの。」

「僕の見るところによると、君は相變らずの空想家だね。」と、バリースは頭を振りながら言った。

「だが、君は相變らず外交官だ。併し、そんな事はどうだつて好い……ところで、君の景氣は？」と、ラストフは訊いた。

「この通り、御覽の通りさ。今迄は何も彼ももうまく行つたが、實を言ふと副官としての位置が得られて、戦線に留つてゐなくても宜いやうになれば、非常に結構だと思つてゐるんだ。」

「何故？」

「何故つて、一旦軍隊勤務の經歷を作つた以上は、出来るだけ華やかな經歷を作つてみるのが至當だからね。」

「あゝ、それやさうだ。」と、ラストフは明かに何か他の事を考へながら言った。

彼は何か或る問題の解決を熱心に求めてゐるらしい容子で、友達の間をぢつと不審さうに見詰めた。

老人のガヴリーラが酒を持つてきた。

「アルフォンス・カアルリツチを呼びにやつても好いだらう？ 彼の男なら君のお對手になれるが、僕は駄目だからね。」

「呼びにやつて呉れ、呼びにやつて呉れ、だが、それはチュートン人かい？」と、ラストフは輕蔑の微笑みを浮かべながら言った。

「彼奴は、極く、善良な、正直な、愉快な奴だ。」と、バリースが言った。

ラストフは、もう一度バリースの眼をチツと眺めて溜息を吐いた。ベルグが歸つてきた。酒場の爲に、談話は三人の將校の間に機勢<sup>モト</sup>してきた。近衛の二人は、行軍の事と、ロシアや、ポーランドや、外國などで、自分達がどんなに歡待されたかといふ事とをラストフに話した。彼等は自分等の司令官なる大公の言語行爲に就いて語つたり、大公の

親切な事に就いての様々な逸話や、怒りつばい性質などに關して語つたりした。ベルグは、例の通り、話題が自分の一身上に關係したことでない時には黙つてゐた。けれど、大公の逸話や、短氣なことの話になると、彼はガリシヤで、丁度殿下が多く、聯隊を檢閲して、隊の不規律な行動の爲めにムカッ腹を立てた時大公と言葉を交へたといふことを、如何にも面白く話した。彼は顔に愉快さうに微笑を浮べながら、非常に怒つた大公が彼の傍へ馬を乗り寄せて、「悪黨奴！」と叫び、「悪黨奴——」之は、皇太子が怒つた時、好んで用ゐる言葉であつた。中隊長を呼べと言つたことなどを話した。

「けれども、伯爵、僕は自分に間違のないことを知つてゐたから、少しも驚きはしませんでした。伯爵、自慢ではないが、僕は聯隊の操典は暗記してゐるし、現行命令も矢張り、（天にまします我等の父よ。）位ゐ、よく知つてゐるんですからね。だから、伯爵、僕の聯隊に手落があらう筈はないんです。で、僕の良心は泰然自若としてゐました。僕は前へ出た。（ベルグは立ち上り、舉手して、進み出るやうな顔付をした。實際、これ以上に慎深い、得意な顔付をすることは六ヶ敷かつた。）ところが、大公は僕を罵つた。何んと言ふ酷い言葉だつたでせう。散々罵つたのです。生きてゐられないやうに、死んで了はなけりやならないやうに罵つたのです。『悪黨奴』とか、『悪魔』とか、『シベリヤへ行け』などと言ひました。ベルグは心から微笑を浮べて言た。『だが、僕は自分に間違のないことを知つてゐたから、黙つてゐた。伯爵、さうぢやありませんか。すると』何故貴様は黙つて居るのか？』と、大公が怒鳴るんでず。僕は矢張り黙つてゐた。あなたは何う思ひます？ 伯爵。次の日の命令には、何んとも言つて來ないんだ。狼狽しなかつたお蔭なんです。全くです。伯爵。」と、ベルグは煙草を吸ひ込んで、烟の輪を吹き出しながら言つた。

「成程、それや偉かつたですね。」と、ラストフは微笑しながら言つた。

併しラストフがベルグを戯弄はうとする氣があるのを見て取つたので、バリースは巧みに話を變へた。バリースはラストフに、何うして、何處で負傷したのか話して呉れと言つた。それを話すのは、ラストフにとつて愉快なことであつた。で、彼は話し出したが、話して行くうちに益々活氣づいた。彼は戦争に参加した人々が、戦争談をするやうに、詳しく言へば、その人々が斯うあつて欲しいと思つてゐるやうに、また他人から度々そんな話を聞いたやうに、なる可く面白く聞へるやうに、シエーングラベンに於ける戦の模様を話したが、さうした事實は、實際は跡方も無い事なのであつた。ラストフは正直な青年であつた。彼は、故意と虚言を言ふ筈はなかつた。彼は何事も、正確に話すつもりで話し始めたのであるが、何時の間にか、無意識に虚言の中へ這入り込まざるを得なかつたのである。若しもラストフが、彼自身のやうに、これまでも度々突撃の話を聞いて、突撃とはこんなものだといふ一定の觀念を形作り、それと同一の話を待ち設けてゐる之れ等の聴手に、ほんとうの有様を話して聞かしたら、その聴手は、彼の言ふ事を信じないか、悪くすると、騎兵の突撃の話をする人々が、大抵出會すことにラストフが出會せなかつたのは、ラストフ自身の罪であるかと考へるかも知れなかつた。彼は、みんなが全速力で馬を駆けさせてゐるのに、自分は馬から墜ちて、腕を挫き、一生懸命にフランス兵から林の中へ逃げ込んだといふことを、何の飾りもなく彼等に話すことは出来なかつた。それに、何も彼も有りのまゝを話すためには、あつた事柄だけを話すやうに自分を抑へつけなければならなかつた。眞實を語るといふことは非常に難かしい事で、若い者には殆んど眞實を語る事が出来ないものである。ラストフの聴手は、ラストフが全身砲火に包まれたことや、自分のことも打ち忘れて、嵐のやうに敵の方陣に突進した事や、敵を左右に薙ぎ倒しながら、その中に切り入つた事や、劍が肉に突き刺さつたことや、知覺を失つて倒れたといふやうなことを話を豫期してゐたのであつた。で、彼はそんなことばかり彼等に物語つた。



その話の最中、丁度ラストフが、突喊の時に、何んな不思議な狂氣まぢがいじみた感じを経験するか、夫れは君たちには想像することが出来ないだらう。」と言つてゐる時、兼ねてバリースが待ち受けてゐた、公爵アンドレー・バルコンスキイがその部屋へ這入つてきた。アンドレー公爵は、若い者を保護したり、自分の勢力に籠られたりすることが好きてあつた。そして、これまで彼に取り入つてゐたバリースに對しては、非常な好意を持つてゐたので、この若者の希望を叶へさせてやらうと思つてゐた。クツウゾフからの書面を持つて皇太子の所へ使者にきた彼は、バリースがたゞ一人で居て呉れ、ばいゝがと思ひながら、バリースの所へ這入つて來たのであつた。部屋へ這入つて、戦争の模様を物語つてゐる驃騎兵驃騎兵（アンドレー公爵は、さうした人間を酷く嫌つてゐた。）を見た時、彼はバリースには愛相あひまじよく微笑したが、ラストフに對しては顔を顰め、眼瞬まばたきをした。そして彼は軽く點頭かぢづをして疲れきつたやうに類然たじたりと安樂椅子に腰を下した。彼は斯んないやな仲間と落ち合つたのが不快であつたのだ。ラストフは、それと悟ると、かつと顔を赤くし、た、がアンドレー公爵は別に氣にも止めなかつた。公爵にとつては、ラストフは赤の他人であつたからであつた。併しバリースを一寸見ると、バリースもこの驃騎兵を恥ぢてゐるらしいのが分つた。アンドレー公爵の不興氣な皮肉な態度にも拘はらず、また本部附の副官全部、即ち今這入つてきた客が確かに屬してゐるらしい階級に對して戦闘隊の見地から、一般的な侮辱の念を持つてゐたに拘はらず、ラストフは恥しきを感じて赤くなり黙り込んで了つた。バリースは本部には、どんな珍らしい噂があるとか、差支へない限り、我が軍の計畫に就いて何か聞かせて貰へまいかとか云ふ様なことを尋ねた。

「まあ大抵は進軍だらう。」と、バルコンスキイは、明かに、局外者の前ではそれ以上言ひたくないといふやうな風に答へた。

ベルグはその機會に乗じて、特別に丁寧な調子で、聞いた通り戦闘隊の中隊長に對する賜給が、今後二倍になるだらうかと尋ねた。アンドレー公爵は、この問に對し、微笑を浮べながら、そんな重大な國家の問題を判斷することは出来ないと言へた。ベルグも嬉しさうに笑つた。

「それから君の件に就いては、」と、アンドレー公爵はまたバリースの方へ振り向いた。「後で話さう。（彼はラストフをぢろりと見た。）檢閲が終つたら僕の所へ來給へ、出來るだけの事はやつてみませう。」

アンドレー公爵は、部屋を見廻してからラストフの方へ向いた。ラストフは子供らしい、抑へ切れないテレ方から怒りに變つてゐた。が、アンドレー公爵はそれに氣付かないやうな風をして言つた。

「あなたはシェニンググアペンの戦争のことを話してゐたやうですね。あなたもあの戦闘に参加しましたか？」

「參加しました。」と、ラストフは、副官を侮辱しやうとも思つたやうに、憎々しさうな語調で言つた。

バルコンスキイは、この驃騎兵の心の状態ありさまに氣が付いた。その心の状態は、彼には滑稽に思はれた。で、彼は侮辱やうに軽く微笑した。

「あゝ！ あの戦に就いては、此頃はいろ／＼な物語がありますね。」

「さうです、いろ／＼な物語があります！」と、ラストフは、突然狂氣じみてきた眼で、バリースを見たり、バルコンスキイを見たりしながら、聲高に言つた。「さうです、澤山 物語があります。が、我々の物語は、敵の砲火の下をくゞつてきた者の物語で、我々の物語には重みがある。何もしないのに賞與を貰つてゐる參謀部の若輩の物語ぢやな

501

「僕もその若輩の一人だと言ふのですか？」と、アンドレー公爵は、落付いて、殊に快こゝろよい微笑を浮かべながら言つ

た。  
この時、ラストフの胸の中では、一種異様な憎悪の情と、同時にこの男の落付に對する尊敬の念とが結びつけられた。

「僕はあなたの事を言ふのぢやありません。」と、ラストフは言つた。「僕はあなたを知つてはゐません。實は知りたいたとも思はないのです。僕はたゞ參謀官全體のことを言つてゐるんです。」

「いや、僕があなたに言ふのは、かうなのです。」と、アンドレー公爵は、落付いた威嚴のある語調でラストフを遮つた。「あなたは、僕を侮辱しやうとしてゐる。若しあなたが十分な自尊心を持つてゐない方なら、そんなことをするのは容易いことだといふ事は、僕もあなたと同感です。併しこんな喧嘩には時も處も不適當な事は、あなたも同感だらうと思ふ。近いうちには、我々は皆なもつと大きい、もつと眞面目な決闘をしなければなりませんからね。おまけに、僕の人相が不幸にもあなたの氣に喰はなかつたと云ふことは、あなたの昔からの友達だと言つてゐるドルベツコイの罪ぢやありませんからね。のみならず」と、彼は立ち上りながら言つた。「あなたは僕の姓も御存知だ。僕のある所も知つてゐる。だが忘れないで貰ひたいことは。」と、彼は附加へた。「僕が自分もあなたも、少しも侮辱されたものとは思つて居ないと言ふことです。で、年長者としての僕の忠告は、この事件はこの場限りにしやうといふ事なんです。ではドルベツコイ君、金曜日の檢閲後あなたを待つてゐます、左様なら。」と、アンドレー公爵は叫び、二人に點頭をして出て行つた。

ラストフは、アンドレー公爵が出て行つて了つた時、やつと、彼に答へなければならなかつたことを思ひ付いた。そして、それを言ひ忘れた爲に、彼は益々腹立たしくなつた。ラストフは、直ぐ馬を連れて來るやうに命じ、素氣な

くパリスに別れを告げて歸つて行つた。明日總司令部に馬を驅つて行つて、あの意氣地のない副官を呼び出したものか、それともこの事件はこのまゝにして置いたものだらうか、みち／＼ラストフを悩ましたのは、この問題であつた。彼は、あの小さな弱々しい、高慢な奴が、自分の短銃ピストルの前で慄へあがるのを見たら、どんなに面白いだらうと憎々しさに考へたり、或は自分の知つてゐる凡ての人の中で、あの厭な、副官ほど、自分の友達にしたら嬉しいだらうと思はれるものは一人もないと思つて、不思議な感に打たれたりした。

## 八

ラストフがパリスに會つた翌日、オーストリア及びロシアの軍隊、即ち新たにロシアから到着した援軍と、クツウゾフの指揮の下に戦つた軍隊とを一緒にした聯合軍の檢閲が行はれた。皇太子を連れたロシア皇帝と、太公を連れたオーストリア皇帝の二人は、合計八萬に達する此聯合軍の檢閲をした。

朝早くから、一様に綺麗な、こざつぱりした服裝の兵士共が、動き始めて、城塞の前の原に整列した。幾千もの脚や銃劍が、ひら／＼する軍旗にれつて動きまはり、將校の號令を聞いて止まつたり、曲つたり、隊形を整へたりしては、異つた軍服を着てゐる他のほか同じやうな歩兵の集團の周圍をまはつてゐた。刺繍ぬいとりで飾られた服に身を包んだ軍樂隊を先頭に立て、青や赤や緑のレースのついた軍服を穿かこなした騎兵隊が、眞黒な馬、栗毛の馬、栗毛の馬に跨つて、一齊に蹄の音を揃へ、馬の飾りをジャラ／＼鳴らしながらやつて來た。歩兵と騎兵との間には、砲兵が、砲車

の上にふるへてゐる磨き立てのキラ／＼光つた砲の長い列を作つて、重苦しい眞鍮の響きを立て、火繩竿の一種特別な臭ひをさせながら、匍ふやうにノロ／＼と進んできたが、やがて指定の位置に整列した。觀兵式の禮服を身にまとひ、襟飾をつけ、勳章をさげて滿艦飾を施し、疲れた胴や肥つた脛を各自極度まで締めつけ、硬いカラーをきつく締めて頸首を赤くした將官達や、香油をてか／＼塗つて、めかし立てた將校達は云ふまでもなく、顔を洗ひ、剃り立て、光るだけ磨き光らした武器を持つてゐる兵卒共も、毛が縞子のやうに光るほど手入れがとゞいて、汗ばんだ鬚が一筋も亂れてゐない馬匹共も——みんな一様に、これは笑談どてではない、何か眞面目な嚴肅な事が始まつてゐるのだといふ事を感じた。將官といふ將官、兵卒といふ兵卒は、悉く、自分たちは此人間の大海中の僅か一粒の砂に過ぎないと感じて、我と我身の無價値を意識してゐたが、それと同時に又、自分たちが此大軍を形成する一分子なのだと思つて自分達の力といふものをも意識してゐるのであつた。

朝早くから非常な努力と奔走とをやつたお蔭で、十時頃には萬事所要通り秩序が整つた。兵卒の列が幾つも廣々とした原野に出來上つた。全軍が三列に分けられた。前列が騎兵、その後列が砲兵、尙ほ遙か後列が歩兵であつた。

列と列とのあひだは、まるで往來のやうであつた。全軍は三つの部分に、かつきり分けられてゐた。クツウゾフ軍——その右翼の前列にはバヴラグラード驃騎兵がゐた——と、ロシアから到着したばかりの戰鬪兵、近衛兵の混合聯隊と、それからアウストリアの軍隊と。だが、これ等全軍は一つの號令の下に、同じ秩序を保つて、一列に整列したのであつた。

木の葉をわたる風のやうに、「來た／＼！」といふ昂奮した囁きが傳はつた。愕えたやうないろ／＼な聲が響いた。最後の用意をする氣ははしい兵卒共のザワ／＼いふ音が、波のやうに全軍を走つた。

一群の人影が、前面のオルミユツツの方から現はれた、それと同時に、今まで風がなかつたのに、急に一戦ぎの仄かな微風が、ちら／＼と軍隊の上を走せ通り、槍についてゐる旗印や、だらりと垂れてゐた旗などを揺めかして、その旗竿にばた／＼當らした。それが丁度軍隊そのものが、この微かな動搖によつて、兩皇帝が近づいてきた事に對する喜びを表はしてゐるやうに見えた。「氣を付け！」と、云ふひと聲が聞えた。と、群衆が曉を告げるやうに、この聲々は彼方此方で繰返された。そして全軍は森然とした。

死んだやうな静寂の裡に聞える響きは唯一つ蹄の音ばかりであつた。それは兩皇帝の護衛兵であつた。兩皇帝は側面の方へ馬を乗りつけた。と、騎兵第一聯隊の喇叭が行進曲を奏し出した。が、その樂の音は喇叭隊から來るのではなく、まるで軍隊そのものが、兩皇帝が近づいて來たのを嬉んで、自然にかうした音樂を發するかのやうに思はれた。樂の音のあひだに、アレキサンドル皇帝の快活な、若々しい聲がハッキリ聞えた。皇帝が挨拶の言葉を述べると、第一聯隊は耳を聳せんばかりな、語尾を長く引つばつた、嬉ばしげな「萬歳」を叫んだ。さうして人々はみんな自分達の作つてゐる集團の大きさと力とに、恐ろしさを感じた程であつた。

皇帝が一番最初に近づいたクツウゾフ軍の前列に立つてゐたラストフは、その隊の總ての者に共通な感情——即ち自己忘却を、自分達の力に對する傲慢な意識と、この嚴かな儀式の中心人物たる皇帝に對する熱誠な尊崇の感情とに包まれた。

ラストフはその皇帝から、たつた一言聲がかゝれば、この壯大な集團は——そして、その集團に結びつけられてゐる一微分子たる自分も——火にも水にも恐れず跳び込むだらう、或は罪を犯すのも辭さないだらう、死と面をつき合はせもするだらう、又は偉大な強勇をも奮ひ起すだらう、と思つた。だから、その言葉の體現者が近づいて來るのを

見ては、胸がどきどきして、身震ひせずにはゐられなかつた。

「萬歳！ 萬歳！ 萬歳！」と、四方八方で轟いた。次の聯隊、その次の聯隊と順次に行進曲と萬歳とで、露皇帝を歓迎した。……行進曲と、萬歳！ 萬歳！ と言ふ聲とは次第に強くなり力づいて行き、溶け合つて、耳を聳するばかりの一つの叫喚となつた。

皇帝が、すぐ間近く来るまでは、黙つて不動の姿勢を守つてゐた。凡ての聯隊は命のない骸のやうに見えた。が、一度皇帝が其聯隊の前まで来ると、各聯隊は、急に蘇り、わアツと叫聲を揚げて、皇帝の過ぎてきた全線の吼音と相和した。かうした耳を聳する騒々しい叫聲に送られ、化石したやうに身動きもせずの方陣を作つて立つてゐる多くの集團の間を、數百名の護衛騎兵が、無頓著に、併し乍ら整然と、自由に通つて行つた。その先頭に二人の人——兩皇帝がゐた。遠慮してゐた、而かも熱烈な全軍の視線は、何時までも此一行の上に集まつてゐた。

近衛騎兵の軍服を纏ひ、三角帽の平たい方を前にしてかぶつた、立派な、若いアレキサンドル皇帝は、愉快な顔と、朗らかな響のある物靜かな聲とで、この視線の大部分を惹きつけた。

ラストフは、喇叭手の近くに立つてゐた。そして鋭い眼で、まだ遠くにゐるうちから皇帝を見別け、だん／＼近づいて来るのを見守つてゐた。皇帝が二十歩ばかりの處まで来た時、ニコライ・ラストフは、皇帝の立派な、若い、幸福さうな顔を細かにハッキリと見て、彼はこれまで一度も知らなかつたやうな物擾さしさと喜ばしさとを経験した。皇帝の持つてゐる何もかも——目鼻立ち、舉動、何もかもが、一つ一つ魅力に充ちてゐるやうに思はれた。

バヴラグラード聯隊の前で立止りながら、皇帝は、アウストリア皇帝を顧みてフランス語で何か言つて、につこりした。

この笑顔を見ると、ラストフは自分も思はず微笑みかけた。そして、この皇帝に對して更に一層強い愛の迸つて来るのを感じた。彼は、何うかして皇帝にこの愛を示したく思つた。が、そんな事の到底不可能であるのは分つてゐた。で、彼は泣き出し度くなつた。

皇帝は、聯隊長を呼んで、二言三言何やら言つた。

「あゝ！ 若し陛下が僕に言葉をおかけになつたら、僕は一體どんなことになるだらう！」と、ラストフは考へた。

「餘りの嬉しさに死んでしまふかも知れない！」

皇帝は、士官達にも言葉をかけた。

「諸君（一言一句ラストフには神の言葉のやうに聞えた）私は心から諸君に感謝する。」

若しラストフが、今この場で直ぐ皇帝の爲めに死ぬ事が出来たら、彼は何んなに幸福であつたらう。

「諸君にはセント・ゲオルギイ章を與へる。何うか夫れに恥ぢない働きをして貰い度い。」

「陛下の爲めに死ぬことが出来れば、たゞ死ぬことが出来さへすれば！」と、ラストフは考へた。

皇帝は、更らに二言三言何か言つたが、ラストフには聞き取れなかつた。兵士達は胸を張りきらして萬歳を歡呼した。

ラストフも、陛下に自分の熱誠を充分表はすことが出来さへすれば、絶叫したゝめに身體を害ふやうなことは寧ろ望むところだと思ひながら、鞍の上に身體を屈めて聲を限りに叫んだ。

皇帝は、躊躇してゐるかのやうな風で、驃騎兵の前に止つたまゝ五六秒の間立つてゐた。

「何うして皇帝が躊躇なんかなさるのだらう？」と、ラストフは不思議に思つた。が、聽て直ぐ、その躊躇さへも、

皇帝の、他の凡ての行爲と同様に神々しく、魅力のあるものに思はれた。

皇帝の躊躇は、ほんの一瞬間に過ぎなかつた。先の尖つた細つそりとした流行の靴を穿いた皇帝の足が、イギリス種の栗毛の乗馬の腹を軽く衝いた。白い手袋をつけた皇帝の手は、手綱をぎゅつと引き絞リ、そして列を亂してゴチヤ／＼してゐる侍従武官の人浪を後に隨へ、向ふへと動いて行つた。他の聯隊の前でも止りながら、だん／＼遠くへ進んで行つたが、到頭ラストフの眼には、皇帝の帽子の白い羽根ばかりが、皇帝を取り捲いてゐる護衛兵達の上に見えるだけになつて了つた。

御附の人々の中にラストフは、のらくらした、だらけた姿勢で乗つて行くバルコンスキイを見た。ラストフは、昨日彼と口論したことを思ひ出した。決闘を申込んだものか、それとも申し込まない方が好からうかと思ひ惑つたことを思ひ出した。「勿論、そんな事をしては好くない」と、ラストフは今反省した。「今のやうな、こんな瞬間にそんな事を思つたり喋つたりすると云ふ事は何の價値もない事だ。こんなに陛下に對する愛敬と熱誠と献身とを感じてゐる場合、我々の輕蔑や口論が何にならう？ 俺は今何ものをも愛するのだ、だから今は何ものをも許してやる！」と、ラストフは考へた。

陛下が、殆んど總ての聯隊を見廻つて了ふと、各隊は觀兵式行進で皇帝の傍を一行縱隊になつて通過し初めた。ついで近頃チェニソフから買つた乗馬のペドウインに乗つてゐたラストフは、後衛將校であつた。即ち一番最後に、唯一人で、皇帝の直ぐ眼の前を通つてゆくべき位置にゐたのである。

丁度皇帝の少し前まで行くと、馬の名手であるラストフは、ペドウインの横つ腹に拍車を二度當て、馬が昂奮する時にいつも躍り上る、あの狂亂したやうな駈足をやらせることに成功した。泡を吹き立てる鼻を胸に押しつけるや

うにして、尻尾を波打たせながら、まるで空中を飛んでゐるやうな風にペドウインは、さながら自分もまた、皇帝の眼が自分に留つてゐる事を、意識してゐるかのやうに、脚を見事に高く跳らせ、素晴らしい姿で飛んで行つた。

ラストフ自身も、足を後に引据ゑ、體を眞直ぐにし、馬と一體になつたやうに感じながら、困惑したやうな、併し幸福さうな顔を、チェニソフの言葉を借りれば、「惡魔そつくり」な顔をして、皇帝の側を走らせた。

「Bravo！ えらいぞ！ バヴラグラードの將校！」と、皇帝が言つた。

「あゝ、この刹那に陛下が、僕に火の中へ飛び込めとお命じになるのだつたら、僕は何んなに幸福だらう。」と、ラストフは考へた。

檢閲が終ると、新援軍とクツウゾフ軍との兩方の將校達が彼方に一塊り、此方に一塊りと集まり初めた。戦功の報償のことや、アウストリア軍のことや、その制服のことや、その職線のことや、ボナバルトの話や、殊にエツセン軍が我々の方に到着しやうとしてゐるし、プロシアも我々の味方にならうとしてゐる今日の状態ありさまから見ると、ボナバルトの上には將に悲運が落ちかゝらうとしてゐると云ふ話や、そんな事を盛んに話し初めた。

併し、これ等の將校團の何處でも、何より多く、話の種となつたのは、アレキサンドル皇帝のことであつた。皇帝の言つた言葉は一語一語繰り返され、皇帝のした身振りは一つ一つ眞似られた。そして熱誠をもつて敷衍して話された。

みんなの胸には、たゞ一つの願ひがあつた、それは皇帝の親しき指揮の下に、一刻も早く敵軍に面を合はせたいといふのである。皇帝自らの司令の下にあれば、何者にも勝たぬ氣遣はない、ラストフも、又多くの將校達も檢閲の後で、さう思つた。

檢閲の後彼等はみんな、二つの大勝利の後で感じ得たらうよりも、一層勝利を確だと感じた。

## 九

檢閲の翌日、パリス・ドルベツコイは、上等の正服に身を飾り、同僚のベルグの祝福の言葉に送られ、バルコンスキイの贈入りで今よりも、もつと好い地位、殊に誰れか勢力のある人の副官の地位（彼には、その地位が甚しく誘惑的に思はれた）を得たいと思つて、バルコンスキイに會ふためにオルミユツツへと馬を驅つて行つた。「ラストフなんか、親父から一時に一萬留も送つて来るのだから、他人の助けを受けたり、人の従者になつたりは決してしないで言つておられる、結構なことだ。處が、自分の頭腦の外には何も持つてゐない俺ときては、自分の前途を自分で切り開かなければならない。機會を逸しないで、飽くまでそいつを利用して行かなければならないんだ。」

パリスは、その日オルミユツツでアンドレー公爵を見出さなかつた。併しオルミユツツの光景は——大本營もあれば、外交團もあり、又兩皇帝が御附武官、朝臣及び近侍者を隨へて滞在して居られる街の光景は、こんな上流社會の人間になりたいといふラストフの欲望を、この上もなく強めるのであつた。

パリスには、此街に知人と云つては一人もなかつた。自分が華美な近衛の軍服を着てゐるにも拘らず、奇麗な羽根をつけたリ、綬紐をつけたリ、勳章をさげたり、馬車に乗つたりして街を彼方此方へと往來してゐる多くの朝臣達や、多くの軍人達は悉く自分のやうな、こんな適らない近衛の一士官よりずつと位階が高くつて、自分の存在を單に

認め度くないと云ふのではなく、確に認めないやうに思はれた。自分がバルコンスキイを訪ねて行つた總司令官タツウゾフの邸宅では、副官達一同は云ふまでもなく、從卒達までが、此所では君のやうな將校はウヨ／＼する程ぶらついてゐるので、我々は見るとウソザリしてゐる、と云ふことを覺らせやうとするやうに彼を眺めた。それにも拘らず、といふよりは寧ろそれが原因になつて、翌日の十五日も、彼は晝飯が済むと早速またオルミユツツへ出かけて、タツウゾフの邸宅に行き、バルコンスキイに取次ぎを求めた。アンドレー公爵は、家にゐた。パリスは、以前は舞踏に使はれたことのあるらしい大きな客間へ案内された。其處には今五つの寢臺と、色々な道具——卓子が一脚、幾つかの椅子、翼琴が一つ置かれてあつた。ベルシヤ式の上被衣を着た一人の副官が屏の近くの卓子に倚つて、手紙を書いてゐた。今一人の肥つた、赭ら顔の副官ネズギーツキイは、兩手を頭にかひ、寢臺の上に横になつて、側に腰を下してゐる將校と笑つてゐた。第三の副官は、翼琴に向つてウインナ、ワルツを弾いてゐた。四人目は、翼琴の上に横たはつて小聲でその曲を歌つてゐた、バルコンスキイは、その部屋にはゐなかつた。之れ等の紳士は誰れ一人、パリスを見て、立ちあがつて會釋しやうとしなかつた。手紙を書いてゐた男は、パリスに聲をかけたので、煩さいと言つた風に振り向ひて、バルコンスキイは、今日は當番副官ですから、あの男に御面會なら、左の方の扉を開けて、應接室へ行けば會へますよ、と言つた。パリスは禮を述べて應接室に行つて見た。そこには十人ばかりの將官と將校とがゐた。

パリスが這入つて行つた時にはアンドレー公爵は、いかにも輕蔑したやうな風に瞬をしながら、「これが私のお役目でなかつたら、私は一分間だつて、あなたなんかと話しては居ませんよ、」と言つた氣持を、アリ／＼その特有な上品な、うんざりしてゐるやうな容子に言はせながら、胸を勳章で飾りたてた一人のロシアの老將軍の言葉に耳を傾

けてゐた。將軍は、殆んど踵で立つてゐるやうに眞直ぐに突つ立ち、その紫色の顔に、一兵卒に見るやうな卑しい表情を浮かべながら、アンドレーに何やら述べてゐた。

「結構です、どうぞ一寸お待ちくださいさるやうに。」アンドレーは、何時もわざと輕蔑して物を言はうとする時に使ふ、フランス語のアクセントをつけたロシア語で、將軍に言つてゐた、が、パリスに氣がつくと、もう將軍（もう少し話を聞いてくれと頼むやうにしながら、彼の後に追ひ縋つてゐた）には少しも關はずに、パリスの方へ身を振り向けながら、晴れやかな微笑みを浮かべて首肯して見せた。

パリスは、兼ねてから見抜いてゐた事實をこの時初めて判然と了解した。つまり軍隊では、操典に書いてある服従や規律、それは聯隊では誰でも知つてゐるし、自分も知つてゐるが、その服従や規律以外に、更に一層根本的な服従の形式がある、この形式があればこそ、アンドレー公爵——大尉の地位にある——が旗手のドルベツコイ（パリス）と話した方が餘つ程面白いと思つて、自分勝手に話に行つてゐる間、紫色の顔の、おどろした將軍は、恭しく待つてゐなければならぬのだ、といふ事を判然了解した。パリスは、今後は書かれた操典に從はないで、この書いてない操典に從つて行かうといふ決心を、前より一層強くした。で、今はかういふ事を感じた、自分は推薦狀を貰つてアンドレー公爵の處にやつて来たばかりで、この老將軍、他の場合ならば、例へば戦線に立つた場合ならば、單に近衛兵の旗手に過ぎない自分などは全く慮げられても仕方のないやうな、この老將軍よりも、今は自分の方が高い位置になつたと同じなのだ、と。アンドレー公爵は、パリスの處へやつてきてその手を握つた。

「昨日は来てくれたさうだが、會へないでお氣の毒でした。終日ドイツ軍の方に行つてゐたもんだからね。ワイエロオテルと一緒に兵の配置を調べに行つたんだ、ドイツ人といふ奴は正確にしゃうとし出すと、實にキリがないんだか

らね！」

パリスは、アンドレー公爵の言つた事を、お互ひには知れ切つたこととして、了解したかのやうに微笑した。が、彼がワイエロオテルの姓を聞いたのも、亦さういふ意味に用ひられた（配置）といふ言葉さへ、聞いたのは、これが初めてなのであつた。

「それやさうと、ねえ君、君は矢張り副官の地位が欲しいのかね？ あれから此方君の事を考へて居たんだがね。」

「さうです、と、パリスは何うした理由か、思はず顔を眞赤にしながら答へた。「總司令官にお願ひしゃうと思つてゐるのです。總司令官の處にはクラアギン公爵から私の事を頼んだ手紙が届いてゐる筈です。私が總司令官にお願ひしてみたいといふのは唯だ、と、辯解でもするやうに附加へた。「近衛は實戦に加はらないのぢやないかと思ふからです。」

「宜しい、宜しい、後ですつかり話す事にしやう、と、アンドレー公爵は言つた、「此お方の用をちよつと報告に行かしてくれ給へ、然うすれば後は君とゆつくり話が出来るから。」

アンドレー公爵が、赤黒い顔の將軍の用で報告に行つてゐる間、書かれざる法典の卓越した長所に關して明らかにパリスと見解を異にしてゐる將軍は、自分の話中途で妨げたこの無禮な若い中尉を恐ろしく睨みつけてゐた。それが爲めパリスは、薄氣味悪くなつた。で、ぐるりと横を向いて、アンドレー公爵が總司令官の部屋から戻つて來るのを待遣しがつてゐた。

「ねえ、君、先刻も言つた通り、僕は君の事を考へてゐたんだがね、二人が樂器のある大きな部屋に這入つて行つた時、アンドレー公爵はかう言つた。「君が總司令官の所へ行つたつて何にも役にはたさないよ。それや先方では君にう

まい事を言ふだらう、又食事にも招待するだらう。(あの『書かれざる法典に従へば悪いことにはならないぞ』とパリスは思つた。)だが、それだけで、それ以上物にはならないんだ。若し、それで物になるのだつたら吾々副官や幕僚將校が、忽ち一大隊も出来上つて了ふからね。併し、こゝに一つ名案がある、と言ふのは、僕の友達で、高級副官をやつてゐるドルゴルフ公爵といふ豪物がある——君は知るまいが、實際今ではクツウゾフや、その幕僚や我々如きものゝ勢力は微々たるものだからね。現在では萬事皇帝の周圍に集中されてゐるんだ——だから一緒にドルゴルフの處へ行つて見やう。僕は、あの男に會はなければならぬ用があるし、それに君の事はもう彼にちやんと話してあるんだ。だから、これから行つて、彼が君の爲めに自分の幕僚の地位を與へることが出来るか、或は又、もつと太陽に近い地位を何か探して呉れる事が出来さうか何うか、一つ聞いて見ることにしやうぢやないか。

アンドレー公爵は何時も、若い士官を導いて、社會的出世をさせてやれるやうな機會のある時には、熱心に盡力するのであつた。自分は氣位が高くて、決して助力は受けなかつたが、他人を助けると言ふ口實の下に、出世の源になるやうな團體へ入り込んで行くのであつた。そして實際また左様言ふ團體は、彼を惹きつけるのもあつた。で、極めて手軽にパリスの世話を引き受けて、ドルゴルフ公爵の處へ連れて行つた。

二人が兩皇帝及びその隨員の住つてゐるオルミュッツの宮殿に着いたのは、もう日が暮れて可なりしてからであつた。

丁度この日、宮殿には策戰會議があつて、軍人會議の全議員及び露皇帝が出席した。會議の結果は、クツウゾフやシュワルツエンベルグ公爵のやうな老將軍の勸告とは反對に、直ちに進軍して、ボナバルトと決戦する事に決せられたのであつた。パリスを連れたアンドレー公爵が、ドルゴルフ公爵を探して宮殿に入つて行つた時は、丁度こ

の議會が終つたばかりの所であつた。大本營の人達は誰れも彼れも、この策戰會議で少壯派が得た勝利に、まだ夢中になつてゐた。延期を主張し、又は、何うなつて行くか、もう少し待つて見やう、又は進軍しないが好いと勸告した延期派の人達の聲は、滿場一致を以て歴し消された、そして彼等の主張は、進軍する方が利益であると言ふ、疑ふ餘地のない證據によつて論駁された、それを聞くと、この會議で論議されたその將來の戦争と、疑ひのない勝利とは、最早や將來のことではなくして、過去のことであるやうに思はれた。あらゆる利益は我軍の上にあつた。疑ひもなくナポレオンの軍より優勢である味方の莫大な兵力は、今一地點に集中されてゐた。各隊は、露皇帝の檢閲に感激して、熱心に戦闘を待つてゐた。味方の軍が行動しやうとする『戰略地域』は、軍の統帥となつてゐるアウストリアのワイエロテル將軍には最も些細な點まで分つてゐた。(好運な事には、今度フランス軍と戦はうとするその地域は、前年アウストリア軍が演習に使つた處であつた)近傍や周圍の地形は明細に知れて居り、地圖も精密に描いてあつた。それに、ボナバルト方の勢の衰へた事は明瞭で、彼は少しも手出しをしなかつた。

直ちに進軍せよ、と言ふ方の最も熱心な主張者の一人であつたドルゴルフは、疲れ切つてグツタリしてはゐたが、自分達の得た勝利に昂奮し、得意になつて今議會から來たばかりの所であつた。アンドレー公爵は自分が世話してゐる將校を紹介した。ドルゴルフ公爵は、丁寧懇ろに握手したが、何も言葉は掛けなかつた。そして、この時頭に一杯になつてゐた考へを、口に出して言はずはゐられないらしい風で、アンドレー公爵にフランス語で話しかけた。

「やあ、君、今日の會議は我々の素晴らしい勝利だつたよ！ この上は、この結果起る戦闘が、丁度今日のやうに我々の勝利になることを神に祈るのみだ。だが、君自狀すれば」と、彼は斷々に熱心な調子で言つた。「アウストリア軍、殊にワイエロテルに比べると此方は缺點だらけさ。この地方に關する知識の明確なこと、その秘密なこと、それから



有ゆる起りさうな事柄、有ゆる物の状況、有ゆるものの極めて些細な點に對する先見の明は實に秀抜なものだ！いや、君、今の我々の境遇ほど都合の好いものは、わざ／＼探したつて、とても見付かるもんでない。オーストリアの正確とロシアの勇氣との結合だ！これ以上のものが望んだつて得られるものか。」

「それぢや愈々進撃と決したんですね？」と、バルコンスキイは訊いた。

「處でねえ、君、僕にはボナバルトが實際氣が顛倒してゐるとしか思はれんよ。今日奴から皇帝に宛て、手紙が來たんだ。」ドルゴルコフは、意味ありげに微笑した。

「何うした事なんです？ 何と言つて來たんです？」と、バルコンスキイは尋ねた。

「何を言つて來られるものか、待つて呉れとか何とか言つて來たのさ——つまり時を延ばさうとするんだ。だが、もう奴は此方の手中のものさ。それや確かな事だ！併し、一番面白いのは、と、急に人の好きさうな笑聲を立てながら、「かういふ事なんだよ。その返事を出すのに何と宛名を書いたらいいものか、誰にも思ひ付かなかつたんだ！（總督）ぢやなし、勿論（皇帝）ぢやなし、僕の考へぢやボナバルト將軍が宜いだらう、と思つたんだ。」

「併し、彼を皇帝として認めないといふことよ、ボナバルト將軍と呼ぶことよの間には、著しい相違があるぢやありませんか。」と、バルコンスキイは言つた。

「其處なんだ。」ドルゴルコフは笑ひながら急いで遮つた。「君はビリピンを知つてゐるね、奴はなか／＼氣の利いた男だよ、奴は『人類の敵なる掠奪者へ』と言ふ宛名にしると言つたんだ。」

ドルゴルコフは、面白さうにハ、ハ、と笑つた。

「それだけですか？」と、バルコンスキイは言つた。

「だが、兎に角ビリピンは宛名の爲に眞面目な稱號を工夫したのだ。あの男は氣が利いてる上に頓智のある男だ！」  
「その稱號は何う言ふんですね？」

「Lan chef du Gouvernement français (フランス政府の首領よ) さ。」ドルゴルコフ公爵は眞面目な顔をして、満足さうに答へた。「どうだい、巧いもんぢやないか？」

「頗る巧いですね、併し奴は非常に厭がるでせうね。」と、バルコンスキイは言つた。

「あゝ、そりや素敵に厭がるだらう！ 僕の兄は奴を知つてゐるんだ。巴里で奴と——今の皇帝と——度々會食した事もあるさうだがね、兄の話によると、あの位明敏な狡猾な外交家は見た事がないといふ事だ。何しろフランス人の機敏とイタリイ人の手練とを兼ねてゐるんだからね。奴とマアルコフ伯爵との逸話を君は知つてゐるかい？ 奴を何う取り扱つて好いか知つてゐたのはマアルコフ伯爵一人だつたんだ。君は知つてゐるだらう、あのハンカチーフの話を、ありや好い話だ！」

そして話好きなドルゴルコフはバリスの方へ向いたり、アンドレー公爵の方へ向いたりしながら、その話をした。ボナバルトが、ロシア大使のマアルコフを試さうと思つて、應とマアルコフの前に自分のハンカチーフを落して吃度拾つて自分に渡すだらうと相手の顔を見ながら突立つて待つてゐた、ところが、それを見ると、マアルコフは素早く自分のハンカチーフをその傍へ落した、そしてボナバルトのハンカチーフはその儘にして置いて、自分のハンカチーフだけを拾ひあげたといふのである。

「實に面白い話だね、と、バルコンスキイは言つた。併し公爵、實は此處にゐるこの若い友達の事でお願ひに來たんです。ねえ……」

けれどアンドレー公爵がまだ言葉を終らぬ中に、一人の副官が這入つてきて、ドルゴルフに、皇帝がお召しだと告げた。

「あゝ、實に煩<sup>うる</sup>さいな」と、ドルゴルフは急いで立ち上つて、アンドレー公爵とパリースとの手を握りながら言つた。「僕の力の及ぶ限りは君のためにも、亦この愛する若い方のためにも喜んで盡力しますよ。」そして彼は、もう一度人の好きよ<sup>う</sup>な誠意の籠つた、物事に頓着しない表情をしてパリースと握手した。「ちや、また来て呉れ給へ！」

パリースは、この瞬間に高い権力を感じた。そして其高い権力に近接してゐる事を考へて昂奮した。自分の聯隊にゐる時は、自分は大きな集團の中の極めて小さな、卑しい、くだらない一分子に過ぎないと思はれるのであるが、此處では、自分はその多くの集團の廣大な運動を統御する源泉力に接觸してゐるのだと云ふ事を意識したのである。二人はドルゴルフの後について廊下へ出た。すると、(ドルゴルフが這入つて行つた皇帝の部屋の扉口から出てきた)文官の服を着けた、削口さうな顔付の下頃の鋭く突出してゐる、が、それが容貌を害ふやうな事はなく、一種特異な敏捷な策略の深さうな表情を見せてゐる小男に出會つた。この小男は親しい友達でもあるやうにドルゴルフに會釋した、そして冷やかな眼付でアンドレー公爵をちつと見詰めたが、挨拶をするか、道を除けるかするだらうと豫期してゐるやうな容子でアンドレーの方へ眞直に歩いてきた。アンドレー公爵は挨拶もしなければ、道も除けなかつた。その顔には憎しみの情が現はれてゐた。すると、小男は傍方<sup>そば</sup>を向いて、廊下の端を歩いて行き過ぎた。

「誰です、あれは？」と、パリースは訊いた。「あれは有名な人物の一人なんですが、僕には最も不愉快な奴なんだ。外務大臣のアダム・ツアルトリツスキイさ。」「あゝ云ふのが、」と、二人が宮殿の外に出た時、バルコンスキイは抑へようとしても抑へ切れぬ溜息をしながら言つた。「あゝ云ふのが國民の運命を決めてゐるのだ。」

翌日、軍隊は進軍を開始した。アウステルリッツの戦闘の時まで、パリースはバルコンスキイにも、ドルゴルフにも再び會ふ事は出来なかつた。そして暫くの間、イズマイロフ聯隊に留つてゐた。

## 十

十六日の曉方、ニコライ・ラストフの勤めてゐる、そしてバグラチオン公爵の枝隊の一部を形造つてゐるヂエニツフ騎兵中隊は、夜營地から前進した。戦闘に臨むのだといふ噂であつた。他の縱隊の後についてウエルストも進んだ頃、とある大通りで急に留つた。ラストフは、コザツク兵と、驃騎兵の第一第二兩中隊と、砲兵とを従へた歩兵數個大隊とが、後から追ひ越してきて先へ進んで行くのを見た。それから又バグラチオンとドルゴルフ兩將軍が、副官を従へて馬を驅つて行くのを見た。そして此前戦闘が始まる時に感じたやうな恐怖も、以前には此恐怖に打勝つた内心の争闘も、今度の戦闘で眞の驃騎兵式を發揮して、殊勳を立てようとした空想も——一つとして何の役にも立たなかつた。彼の騎兵中隊は、豫備軍として後方に留められたのである。ニコライ・ラストフは退屈な、悲しい一日を送つた。朝の九時頃、前方にあたつて砲聲や萬歳といふ叫び聲やを聞いた。負傷兵(餘り多くはなかつた)の送り返へされるのも見た。終ひにはフランス騎兵の一枝隊全部が、コザツク兵の一隊に圍まれて來るのも見た。明かに戦闘が終つたのだ。そして又明かに、それは小戦闘<sup>こせりあひ</sup>だつたのだ、が我軍の勝利には違ひなかつた。後方に歸つて行く兵卒や將校は、ウイシャウ街を占領し、フランス騎兵一個中隊の全部を捕虜とした赫々たる勝利を語つた。その日は、前夜の嚴しい

寒さの後で、<sup>さえく</sup>牙々と輝いてゐた、そして、秋の日の爽やかな輝きはこの勝利の報告とよく調和してゐた。その勝利の報告は、戦闘に参加した者の話で知れたばかりでなく、ラストフの側を彼方へ行き、此方へ行きする兵卒や、將校や將軍や副官達の喜ばしげな表情にも表はれてゐた。が、ニコライは戦闘の前にくる恐怖に苦しんだのも何の役にも立たず、そして、この幸福な日を無爲に費したと思ふと、心の悲痛を一層烈しく感じた。

「ラストフ、此處へ來たまへ、憂さ晴しに一杯やらうぢやないか。」遺傍に座つて、饜と何やら食物とを前にしてゐたヂエニツフが叫んだ。

將校たちはヂエニツフの酒箱のまはりに集つて、飲んだり喋つたりしてゐた。

「や、又一人捕へて來たぞ。」捕虜になつて二人のコザツク兵に引立てられ、とぼくとやつて來た一人のフランス龍騎兵を指しながら、將校の一人が言つた。

コザツク兵の一人は、捕虜から奪つた背の高い、見事なフランス種の馬の手綱を引いてゐた。

「その馬を賣らんか？」と、ヂエニツフはコザツク兵に叫んだ、

「思召しなら、閣下。」

將校たちは立上つて、コザツク兵と捕虜とを取り巻いた。フランスの龍騎兵は若い小作りな、ドイツ語の語調でフランス語を喋るアルサス人であつた。昂奮してゐて息苦しさうであつた。顔が眞赤になつてゐた。彼はフランス語を聞くと、將校達の顔を、あれこれと見廻はしながら、口早やに喋り初めた。全體自分は捕虜になるやうな事はない筈だつた、捕虜になつたのは自分の過ちではない、伍長の罪だ、自分はロシア兵があるから駄目だと言つたのに伍長が馬の毛布を取りに自分をやつたから悪いのだと言つた。そして一語毎に「*mais qu'on ne fasse pas de mal à mon*

*petit cheval!* (でも私の可愛い馬だ、はひどい目に會はさないで下さい、)と、附け加へて、自分の馬を撫で、ゐた。自分が何んな所にゐるのか、彼にはよく分つてゐないらしかつた。で、今自分が捕虜になつた事を辯護したり、自分上官の前にもゐるやうな氣になつて、兵卒としての勤務に忠實で熱心であると言ふことを證明しやうとした。この男は、我軍の中に見られないやうなフランス軍の爽やかな零團氣を、我が後衛軍にもたらしたのであつた。コザツク兵は、金貨二枚で馬を賣つた。ラストフは、家から金を受け取つて以來將校中でも一番金持だつたので、その馬を買つた。

「*Ma s qu'on ne fasse pas de mal à mon petit cheval!* (でも私の可愛い馬をひどい目に會はさないで下さい、)と、アルサス人は、馬が驃騎兵に渡された時無邪氣にラストフに言つた。

ラストフは、微笑を浮べ、驃騎兵をなぐさめて、金を與へた。

「行け、行け！」と、コザツク兵は進ませるために捕虜の腕に觸りながら言つた。

「陛下だ、陛下だ！」と、いふ聲が突然驃騎兵たちの間に聞えた。

皆な走つたり狼狽たりし始めた。ラストフは、自分等の後の方の往來に、帽子に白い羽根をつけた數名の騎馬兵が來るのを見た。ほんの一瞬間のうちに皆の者は各自その就くべき位置について、待ち受けた。

どんな風にして自分の席に行つて馬に乗つたのか、ラストフは何の記憶も何の意識も持つてゐなかつた。自分が戦闘に参加しなかつたといふ無念さや、見慣れた顔に圍まれてゐる毎日の心持などは、忽ち何處かへ行つて了つた。自己に對する總ての考へも忽ち消えて了つた。皇帝が近づいて來た爲に起された幸福な感情にラストフは全然吞まれてしまつたのである。皇帝がお出になつたと云ふその事だけで、まる一日仇に過したのが償はれたやうに感じた、彼

は戀する者が、待ち遠い逢曳の時を待つてゐるやうに、幸福であつた。隊列の中から見廻す勇氣もなく、又見廻はし  
もせずに、自分の興奮した感覺で皇帝の近づいて来るのを感じた。彼は近づいて来る騎馬兵の蹄の音から、それを感  
じたばかりでなく、皇帝が近づいて来るに従つて、周圍が次第に輝かしく一層喜ばしく、意味深く、そして一層陽氣  
になつて来るので、それを感じたのであつた。この太陽は——ラストフにさう思はれた——穩かな、神々しい光りを  
邊りに注ぎながら、だん／＼近づいてきた。と、ラストフはもう自分がその光輝に包まれてゐるやうに思つた。皇帝  
の愛撫するやうな、落着いた、神々しい、而も素直なその聲をさへ聞いた。ラストフの感じの所爲か、死んだやうな  
静寂がきた。そして、その静寂の中には皇帝の聲が響いてゐた。

「Les Hussards de Pavlograd?」バヴラグラード驃騎兵は?」皇帝は、不審さうに言つた。

「豫備隊でございます、陛下。」と、他の誰かの聲が答へた。が、其の聲は Les Hussards de Pavlograd? (バウラグ  
ラード驃騎兵は?)と、言つた非人間的な聲の後なので、いかにも人間の聲らしく聞えた。

皇帝は、ラストフと平行する處まで来ると、そこへ立止つた。アレキサンドルの顔は、三日前の檢閲の時より美し  
かつた。十四の少年の遊び好きを思はせるやうな、快活と若々しさとに輝いてゐた。それでも尙、神々しい皇帝の顔  
であつた。圓らずも中隊を見まはした時、皇帝陛下の眼が、ラストフの眼と出會つた。そして二秒ばかりの間そこに  
止まつてゐた。皇帝はラストフの心の中に起つてゐるものを知つたものか(ラストフには皇帝が何から何まで理解し  
てゐるやうに思はれた)二秒間程青い眼でラストフの顔を眺めてゐた。(柔かな、穩かな光輝がその眼から輝いた。)と、  
いきなり皇帝は、眉を上げ左の足で素速やく馬を蹴つて、前方へ駆け出した。

若い皇帝は、戰場に出やうと言ふ希望を抑へる事が出来なかつた。で、朝臣達が諫めるのもかまはず、十二時頃、

自分のついてゐた第三縱隊を離れて、前衛へと馬を走らせて行つた。皇帝がまだ驃騎兵の處に着かないうちに、五六  
人の副官は、彼を迎へて戦争の勝利を報告した。

フランスの騎兵中隊を捕虜にしたと言ふことだけで、この戰闘はフランス軍に對する素晴らしい勝利であるやうに  
思はれた。それで皇帝も、亦軍隊全體も、殊に砲煙がまだ戰場から散り去らないうちから、フランス軍が敗北し、心  
ならずも退却してゐることを信じてゐた。皇帝が馬を走らせて行つてから四五分たつて、バヴラグラード驃騎兵の一  
枝隊は前進の命令を受けた。ウイシャウと言ふ小さなドイツの町で、もう一度ラストフは、皇帝を見た。皇帝の到着  
する前、可なり烈しい砲戦のあつた町の市場には、收容する暇がなかつたので、幾人かの戦死者や負傷者が横たはつ  
てゐた。皇帝は、朝臣や侍従武官に取巻かれて、檢閲の時に乗つてゐたのとは異つたイギリス種の栗毛の馬に跨つて  
ゐた。威嚴のある容子をして一方へ身體を傾け、眼に金の携帶眼鏡コレネットを當てながら、血みどろになり、頭も露はに俯伏  
せになつて横はつてゐる一人の兵卒を眺めてゐた。ラストフは、その負傷兵が皇帝の直ぐ間近に横たはつてゐること  
を思ふとぞつとした、それ程その負傷兵は穢きたならしく、物凄く、胸の悪くなるやうなものであつた。ラストフは、屈  
み加減にした皇帝の肩が、まるで寒氣に打たれたかのやうにブル／＼震へたのや、皇帝の左の足が馬の横腹へ痠撃的  
に拍車を當てたのや、訓練された馬が平氣で邊りを見まはして動かずにある光景などを見た。一人の侍従武官が馬か  
ら降りて、兩腕で負傷兵を抱き上げ、傍へ運ばれてきた擔架の上に乗せはじめた。負傷兵は呻いた。

「優しく、優しく、もつと優しくは出来ないのか?」死にかゝつてゐる兵卒よりも一層苦しい思ひをして皇帝は言つ  
た。そして、向ふへ乗り去つた。

ラストフは、皇帝の眼に涙が満ちてゐるのを見た。馬を走らせながら皇帝が、フランス語でチャルトリツスキイに

かう言つたのを聞いた。

「戦争は何と言ふ恐しいものだらう！ 何と言ふ恐ろしいものだらう！」

前衛の諸隊は、敵の戦線の見えるウイシャウの前面に置かれてゐた。敵軍は、ほんの少し砲火を交へただけで、終日退却を続けるのであつた。皇帝の感謝が前衛に発表された。戦功報償は約され、二度分のウオッカが兵卒共に分配された。前夜よりは更に愉快さうに、露營の焚火がバチ／＼と音を立てた。兵卒共の歌も鳴り響いた。ヂエニツフは、その晩少佐昇進の祝宴をした、ラストフはたらふく飲んだ揚句、酒宴の終りに際して、皇帝のために祝盃を舉げやうと提議した。けれども、「公式の宴會の、所謂皇帝陛下の爲めではなく」と、ラストフは言つた。「仁慈にして懐しき、偉大なる皇帝陛下の御健康のために祝盃を舉げるのだ。我々は皇帝陛下の御健康の爲めと、フランス軍に對する勝利の爲めに飲まうではありませんか！」

「我々は前にも戦つた、而もシェーニングラアベンの戦闘の時には一歩たりともフランス軍に譲らなかつた。と、ラストフは言つた。「況んや今皇帝陛下は我々の先頭に立つて居られる、敵軍など何であらう。我々はみんな死なう、みんな陛下のために喜んで死なう。何うです、諸君？ いや恐らく僕の言葉は呂律がまはらないかも知れない。僕は随分飲んだ、併し、僕の感ずるやうに諸君も亦感じてゐるのだ。アレキサンドル第一世の御健康のために！ 萬歳！」

「萬歳！」將校達の興奮した聲が鳴り響いた。

老大尉のキルステンも興奮して二十歳代のラストフに劣らない程、眞心を籠めて絶叫した。

將校たちが祝盃を干し、コップを碎いてしまふと、キルステンは幾つかの他のコップに酒を注ぎ、シャツと乗馬ズボンばかりになり、コップを手にして、兵卒達の燎火の處へ出かけて行つた。そして片手を振り上げながら、凛とした態度で焚火の光を浴びて立ち止つた。胡麻鹽の口癖は長くのびて居り、開けはだけたシャツの間からは、白い胸が見えてゐた。

「若者たち、我皇帝陛下の御健康のために、敵軍に對する我々の勝利のために、萬歳！」と、頑強な老軍人らしい濁み聲で叫んだ。

驃騎兵たちは、その周圍に群つて、親しさらに大聲を揚げて、それに應じた。

夜遅くなつて、みんなが別々／＼になつた時、ヂエニツフは自分の一番好きなラストフの肩を短い手で叩いた。

「戦場では戀の相手がないもんだから、陛下に戀した譯なんだね」と、彼は言つた。

「ヂエニツフ、そんな冗談を言つてはいけません。」と、ラストフは叫んだ。「それは高尚な、美しい感情なんです。だから……」

「解つてゐる、解つてゐるよ、君、僕も同じ感情を抱いてゐる、賛成だ……」

「いや、あなたは解らない！」かう言つて、ラストフは立上り、命を疵はずに（そんな事を彼は空想して見ることに敢てし得なかつた）死ぬと云ふことは、唯陛下の眼の前で死ぬこと、何んかに幸福だらう、と空想しながら、焚火の間を逍遙つきに出かけた。眞に彼は、皇帝とロシアの武器の光榮と、來るべき勝利の希望とに戀してゐた。そして、アウステルリッツの戦が始まるまでの記念すべき幾日かの間に、かういふ感じを抱いたのは單にラストフ一人には留まらなかつた。ロシア軍の十人が十人も、たとひ夫れほど有頂天でなかつたにしろ、その瞬間には、皇帝を愛し、ロシアの武器の榮譽を愛してゐたのであつた。

## 十一

翌日、皇帝はウイシャウに滞在した。侍醫のウイリエルは幾度も陛下から召された。大本營や、その近くの隊の間には、皇帝御不例といふ報知が云ひ傳へられた。近侍の者達が言ふところによれば、皇帝は何も食はず、その夜は殆んど眠られなかつたとのことであつた。この微恙の原因は、死傷者を見て皇帝の感じ易い心が、強い印象を受けたからであつた。

十七日の曉方、一人のフランスの將校が我軍の前哨からウイシャウ村に案内された。彼は、休戦旗を押し立て、ロシア皇帝に謁見を求めたために来たのであつた。この將校は、サヴァリーであつた。皇帝は丁度眠つた所だつたので、サヴァリーは待つてゐなければならなかつた。正午頃、サヴァリーは、皇帝に謁見を許され、そして一時間後、ドルゴルコフと一緒にフランス軍の前哨へ乗り去つた。

風評によれば、サヴァリーの使命は、アレキサンドルとナポレオンとの會見を申込むにあつた。皇帝自身直接に會見する事は拒絶された、それが全軍の誇りにも亦喜びにもなつた。が、併し皇帝の代りに、ウイシオウの戦鬪の勝者たる公爵ドルゴルコフ將軍が、若し、さうした談判が豫期に反して、眞に平和克復の希望に基づいてゐるものであるなら、ナポレオンとの談判に與からうと云ふので、サヴァリーと共に派遣されたのであつた。

日暮方、ドルゴルコフは歸つて來ると、直ちに皇帝の處へ行つて、長い間皇帝と二人きりであつた。

十一月の十八日と十九日とに、我軍は更に二回の進軍をした。敵の前哨は、唯一寸砲火を交へただけで直ぐ退却した。軍の高級部には烈しい、忙しうな昂奮した活動が、十九日の正午から翌日即ちアウステルリッツの記憶すべき戦が行はれた十一月二十日の朝までつゞいた。

十九日の正午までは、活動や、活氣のある會議や、奔走や、副官の派遣やはみな大本營に限られてゐた、が、正午を過ぎると、その活動はクツウゾフの本營及び各隊の司令部に及んだ。日暮方になると、此活動は更に副官等によつて、有ゆる方面の部隊に傳へられた。そして、十九日の夜には、聯合軍八萬の集團が、その野營地から發足して、がや／＼騒ぎながら九露里もある長い布のやうに蜿々と動いて行つた。

朝のうちに大本營で初まつて、それから先の有ゆる活動に動力を與へた中心的活動は、丁度大きな塔時計の眞中にある齒車の最初の動きのやうなものであつた。そろ／＼と一つの齒車が動き初めると、第二、第三の齒車が廻轉をやり出す、そして、次第に早やく挺も、車も、滑車も、振りもまはり出す、仕掛けてある樂の音が鳴り初める、人形が飛出す、指針も調子よく動いて、その活動の結果を示すのである。

時計の機械作用のやうに、軍事の機械作用でも、一度與へられた運動は究極の結果まで止めることが出来ない。そして、その運動がまだ達しない部分は、運動が傳へられるまで靜止してゐるのである。車輪は、齒を噛み合せながら軸で軋り、滑車は急速な運轉の爲めにヂイ／＼と鳴つてゐるのに、隣の車輪は、百年の間も凝つとしてゐやうとでもするやうに、平氣の平佐で動かさぬ。が、時が來ると――挺が感ずる、そして車輪は運動に従ひ、軋りながら廻る、そして其活動の結果と目的とを知らずに共通の活動に加はるのである。

丁度時計に於て、無数のいろ／＼な車輪や滑車の複雑な運動の結果が、唯單に時を示す指針の遅い、規則正しい運

動に過ぎないやうに、ロシア及びフランスの十六萬の人間の複雑した運動の結果は——それ等の人間のすべての熱情、希望、悔恨、屈辱、苦痛、誇、恐怖、歡喜の衝動などの結果は——唯所謂三皇帝の戰たるアウステルリッツ戰鬪の損失に過ぎなかつた。即ち人類の歴史と云ふ數字板の上の、世界的歴史の時針の遅い一移動に過ぎなかつた。

アンドレー公爵は、その日當番だつたので、總司令官の列を離れなかつた。夕方の六時頃、クツウヅフは大本營を訪ねて、皇帝に一寸會つた後で、内大臣のトルストイ伯爵に會ひに行つた。

バルコンスキイ(アンドレー)は、この暇を見て、戦ひの詳細を聞きにドルゴルコフの處へ行つて見た。アンドレー公爵は、クツウヅフが何事か心を亂されて機嫌を損じてゐる事や、大本營の人々がクツウヅフに對し悪感を抱いてゐる事や、又大本營にゐる總ての人々は、他の者の知らずゐる何事かを知つてゐるやうな調子で自分に對する事などを感じた。彼が、ドルゴルコフと話をしたと思つたのは、夫れがためであつた。

「やあ君、今晚は」と、ピリピンと一緒に茶の席に坐つてゐたドルゴルコフは言つた。「お祭は明日だせ。君の所の爺さんは何うだね？ 機嫌は悪いかね？」

「不機嫌とも言へまいが、併し意見を聞いて貰ひたく思つてゐるだらうと僕は想ひます。」

「だが、戰鬪會議の席上で、意見は述べたんだ。譯の分つたことを言へば聞いて貰へやうさ。併しボナバルトが何よりも決戦を恐れてゐる今日、愚圖々々と待つてゐるが宜いなんて言ふに至つては——問題にはならないね。」

「あゝ、さうだ、あなたは奴に會つて來たんですね。」と、アンドレー公爵は言つた。「そこで、あなたはボナバルトを何う思はれます？ 奴があなたに與へた印象は何んなでした？」

「あゝ、僕は會つた、そして奴が此世の中で何よりも決戦を恐れてゐるといふ事を確信させられてしまつた。」と、自

分がナボーレオンとの會見から引き出した一般的の此推理に、多大の價値を置いてゐるらしいドルゴルコフはかう繰返した。「若し奴が決戦を恐れてゐないとしたら、何の理由あつて、會見を求めたんだ、何故談判を開かうとしたんだ、そして殊に、退却するといふ事は、戰爭をする上の奴の全體の方法に反してゐるにも拘らず、何故退却をするのだ？ 奴は恐れてゐるのだ。確かに決戦を恐れてゐるのだ。たうとう奴の運の盡きが來たのだ。僕の言葉を覺えて置き給へ。」

「併し奴が何んな様子をしたか、何んな態度を取つたか話して下さい。」と、アンドレー公爵は尙も訊いた。

「奴は灰色の上着をきた男で、頻りに(陛下)と呼んで貰ひたがつてゐたが、僕が何の稱號でも呼ばないもんだから、失望してゐた。まアかう云つた種類の男だ、それだけの事さ。」ドルゴルコフは、笑顔でピリピンに振向きながら答へた。

「クツウヅフ老將軍に對して僕等は深く尊敬はするが」と、ドルゴルコフは言葉を續けた。「奴が慥かに我々の手中に在る今のやうな場合に、それを愚圖々々してゐて、奴に逃げる機會を與へたり、我々を騙す機會を與へて見給へ、それこそ僕等は馬鹿の寄り集りだ。いや、僕等はスウオロフと彼の規則——攻撃される位置に決して身を置くな、常に此方から攻撃せよ——といふあの規則を忘れてはならない。ねえ君、青年の精力は、戰場では、屢々老耄者輩の經驗より、更に以上安全な道標ぢやないか。」

「併し何んな陣地で、あなたは奴を攻撃しようといふのです？ 僕は今日前哨線へ出て見たが、奴の主力が何處に集中されてゐるのか、てんで見當が付きませんでした。」と、アンドレー公爵は言つた。

彼は、自分が作つた攻撃の計畫を、ドルゴルコフに説明したくてならなかつたのである。

「いや、そんな事はどつちにしたつて構つた事ぢやないんだ。」と、立上つて、テーブルの上に地圖を擴げながら、ドルゴコフは口早やに言つた。「有らゆる場合は見え透いてゐるのだ、若し奴がブルンに集中してゐるのなら……」そしてドルゴコフ公爵は、ワイエロオテルの側面攻撃の計畫を口早やに漠然と物語つた。

アンドレー公爵は、反對説を述べて、自分の計畫を説明し出した。それはワイエロオテルの計畫に劣らぬ名案であつたが、たゞ一つの缺點は、ワイエロオテルの計畫が既に承認せられたと云ふことであつた。アンドレー公爵が一方の計畫の不利と、自分の計畫の有利とを説明し出すと、ドルゴコフ公爵は、直ぐ彼の言を聞くことを止めてしまつてもう地圖を見ずに、アンドレー公爵の顔を、茫然と眺めてゐた。

「今晚クツウゾフの處で戰略會議があるだらうから、君はその場でスツカリ説明すれば宜い。」と、ドルゴコフが言つた。

「さうませう。」と、地圖から離れながら、アンドレー公爵は言つた。

「所で、君たちは何を心配してゐるんだい、兩君？」ピリピンはその時まで暗れやかな微笑を浮べて二人の話を聞いてゐたが、今は冗談を言ふつもりになつたらしく、かう言つた。「明日勝たうが敗けやうが、ロシア軍の榮譽は安全なものだ。君等のクツウゾフを除いては、技隊にロシア人の司令官は一人もゐないぢやないか。司令官と云へば、ウイムフエン將軍や、ランジエロン伯爵や、リヒテンスタイン公爵や、ホーヘンローへ公爵や、プリシブルシブルシなど皆ポーランド名の者ばかりだ。」

「Hush, mauvaise langue! (黙れ、口悪家!)」と、ドルゴコフが言つた。「宜い加減な事を言ひ給ふな。今では最うロシア人の司令官が二人もゐるよ。ミロラドキツチとドウツロフさ。それに神経さへ弱くなければアラクチェーフ

伯爵も第三に加へられる筈だつたんだ。」

「ミハイル・イラリオーノキツチ・クツウゾフはもう退出かへつたろうね。」アンドレー公爵が言つた。「君等の幸福と成功を祈るよ、御兩君。」かう言ひ添へて、ドルゴコフとピリピンとに握手してから、歸つて行つた。

家に歸つてからアンドレー公爵は、自分の側に黙然として坐つてゐるクツウゾフに、明日の戦ひについて何う考へてゐるか、訊いて見ずにはゐられなかつた。

クツウゾフは、自分の副官を厳しく眺め、一寸間を置いてから答へた。

「今度の戦争は敗北だと私は思ふ。私はトルストイ伯爵にさう言つて、皇帝にその旨をお傳へして呉れと頼んだ。處で、トルストイ伯から何んな返事が來たと君は思ふ。」「Eh, mon cher général, je me mêle de riz et de coillottes, mêlez-vous des affaires de la guerre.」(「あゝ、親愛なる將軍よ、余は米とカツレツの問題にのみ忙しく候、閣下は戦争の問題に従事されんことを!」この通り……これが私が貰つた返事なのだ!」

## 十二

夜の十時に、ワイエロオテルは、自分の計畫を携へて、戰略會議の開かれる事になつてゐるクツウゾフの營所に馬を乗りつけた。各隊の司令官達は凡て總司令官の營所に呼び集められた。出席を斷つて寄こしたバグラチオン公爵を除いて外の者は定刻までに集つた。



豫想されてゐる戦争の準備萬端に全責任を負うて元氣よくそわ／＼してゐるワイエロオテルは、幾々ながら戦略會議の議長と指揮者との役目を演じてゐる機嫌の悪い懶げな、クツウゾフに對して判然した對照を見せてゐた。ワイエロオテルは最う止める事の出来なくなつた運動の先頭に、自分が立つてゐるのを感じてゐたに相違ない。丁度彼は馬具をつけた馬が、荷車をひいて坂を駈け下りるやうなものであつた。自分が荷車をひいてゐるのか、荷車に推されてゐるのか、彼には解らなかつた、けれど自分が何の爲に斯んな行動をしてゐるのかを判断する道もなく、全速力で駈けて行くのであつた。ワイエロオテルは、その晩二度も自分で敵の戦線を見廻り、又二度もロシア及アウストリア兩皇帝の前に出て報告したり、説明したりして、それから自分の事務室に歸つて來ると又そこでドイツ軍の配置を聞き取り、そして今ぐつたり疲れ果て、クツウゾフの處に來たのであつた。

彼は非常に忙しかつた、で、總司令官に對する尊敬の態度まで忘れた程であつた。彼は、總司令官の言葉を遮つたり、相手の顔も見ず、自分に出された質問に返答もせず、早口に不明瞭なことを言つたり、悪口を吐いたり、哀れな、ぐつたりした、混亂したその癖自信のある傲慢な様子をしてたりした。

クツウゾフは、アウステルリッツ附近の、或る小貴族の城に滞在してゐた。みんな總司令官の書齋に當てられてゐた客間に集つた、クツウゾフ自身と、ワイエロオテルと、それから戦略會議の議員達と。みんな茶を飲んでゐた。會議を開かうとして唯バグラチオン公爵の來るのを待つてゐた。七時過になるとバグラチオンの傳令士官が來て、公爵は出席し兼ねるといふ報告をした。アンドレー公爵は、これを總司令官に知らせに這入つて來たが、幸にクツウゾフから會議に列しても宜いといふ許しを前から受けてゐたので、そのまま部屋に留まつた。

「バグラチオン公爵が見えなければ、會議を始めて宜しいでせう。」と、ワイエロオテルは忙しく自分の席から立上

つて、ブルン附近の大きな地圖が擡げられてある卓に近づいた。

クツウゾフは、軍服のボタンを外し、縛めの繩を解いたと云つたやうに肥つた頸をカラーの上にはみ出さして、まゝ／＼とした年老いた兩手を、兩方同じやうにきちんと肘掛に凭せながら、低い椅子に腰かけてゐた。彼は殆んど眠つてゐた。ワイエロオテルの聲を聞くと、強ひてその片眼を開けた。

「宜しい、宜しい、どうぞ。もう時刻も遅いから。」と、彼は點頭いて首を垂れると又もや目を閉ぢた。

會議の議員たちが、初めクツウゾフは偽眠をしてゐるのだと思つてゐたにしても、それからの朗讀の間彼の鳴らしてゐた軒の音は、この時總司令官が、軍の配置若しくは、その他何によらず一切のことに對して輕蔑を示さうと思つてゐることなどより、寧ろもつと重大な事に關はつてゐることを證した、彼の關はつてゐるのは、制し難い人間の要求——睡眠を満足させることであつた。クツウゾフは、本當に眠つてゐた。ワイエロオテルは一分間でも無駄には過せない非常に忙しい人らしい様子で、クツウゾフをチラリと見た。そして彼が眠つてゐることを確かめると、書類を取上げ、高い、單調な音調で、やがて開かるべき軍の配置が、一つの題のもとに書かゝれてあるのを讀み初めた、彼は、その題をも讀んだ。

「一八〇五年十一月三十日、コベルニッツ及びソルニッツの後方なる敵陣地攻撃に對する兵の配置」  
配置は非常に複雑で、面倒なものであつた。原文の配置書は次のやうなものである——

“Da der Feind mit seinem linken Flügel an die mit Wald bedeckten Beger lehnt, und sich mit seinen rechten Flügel längs Kobelnitz und Sokolnitz dort befindlichen Teiche zieht, wir im Gegenheil mit unserm linken Flügel seinen rechten sehr debotieren, so ist es vortheilhaft letzteren Flügel des Feindes zu attackir-

en, besonders wenn wir die Dörfer Sokolnitz und Kobernitz im Besitze haben wodurch wir d m Feind zugleich in die Flanke fallen und ihn auf der Fläche zwischen Schlapnitz und dem Thürassa walde verfolgen können indem wir die Defileen von Schlapnitz und Bellowitz ausweichen, welche die feindliche Front decken. Zu diesem Fendzwecke ist nöthig: Die erste Kolonne marschirt die zweite Kolonne marschirt die dritte Kolonne marschirt U. S. W." (敵の左翼は樹木繁茂せる丘陵に倚り、右翼はコベルニッツ及びソコルニッツ方面より其附近に横はれる沼澤の背後を進みつゝあり、然るに、これに反し我軍の左翼は敵の右翼を越えて遠く延長し居れば、先づ此右翼に向つて攻撃を開始するを利益なりとす、殊に我軍若しソコルニッツ及びコベルニッツ兩村を占有し居る場合には、それによつて直ちに敵の後衛を襲撃し、シユラバニッツとツエラツサ森林との中間なる平原にこれを追撃し、以て敵の前面を掩護せるシユバルニッツ及びペロウイツツの峽道を避くるを得べし。この究極の目的を達せんがためには左の必要あり……第一隊進軍……第二隊進軍……第三隊進軍云々)と、ワイエロオテルは讀んだ。將官達は、面倒な配置書を嫌々ながら聞いてゐるらしかつた。頭髮の白ちやけた身長の高いブクスヘフデン將軍は、脊中を壁に凭せて立つてゐた。そして燃えてゐる蠟燭に眼を据ゑたまゝ、聞いてもゐなければ、自分が聞いているのだと思はれるのも厭だと云ふやうに見えた。ワイエロオテルの眞正面の處に、口髯を捻り上げ、肩を怒らした、赤ら顔のミロラドキツチが兩手を膝に置き、肘を外へ突つ張つて、軍人らしい姿勢で、ワイエロオテルにギラ／＼輝いた、大きく開いた眼を据ゑながら坐つてゐた。彼は、ワイエロオテルの顔を見つめながら頑固に黙つてゐたが、アウストリアの參謀長が言葉を切つた時辛つと彼から眼を反した。その時ミロラドキツチは、他の將軍たちを意味ありげに見まはしたが、その意味ありげな眼付によつて、彼が配置書に賛成なのか不賛成なのか、満足なのか、不満足なのか見抜く事は

出来なかつた。ランジエロン伯爵はワイエロオテルに一番近く坐つてゐた。南フランス式な彼の顔は、朗讀の間絶えず微笑を浮べてゐた。彼は肖像の刻つてある金の嗅真函を、其角でぐる／＼まはしてゐる、細そりした自分の指をながめてゐた。長い文句の一中頃まで讀まれた時、彼は嗅真函を廻す事を止めて、頭を擡げ、薄い唇の隅に不快な敬意を浮べながら、ワイエロオテルの言葉を遮り何か言ひ出さうとした。けれどアウストリアの將軍は朗讀を中止せず、腹立たしげに顔を擡めて、後で、君は自分の御意見を述べ給へ、今は地圖を見ながら聞いてゐて貰ひ度い、とでも言ふやうに兩腕を振つた。ランジエロンは不満さうに眼を上に向け、さながら説明を求めるやうにミロラドキツチを眺めた。が、ミロラドキツチの、何の意味もない癖に何だか意味ありげな眼付に出會ふと、氣落したやうに眼を落し、再び嗅真函をまはし出した。

「地理の講義か」と、彼は獨語つやうに言つた。が、その聲はみんなに聞えるやうに高かつた。プルゼビイシエウスキイは、恭しい、が、適當な敬意を現はして、如何にも深く注意してゐるらしい態度で、ワイエロオテルに向いてゐる方の耳に手を當てゝゐた。脊の低いドフツローフは、熱心な、謙遜な様子をして、ワイエロオテルと向ひ合つて坐り、一地方を畫いた地圖の上に屈みながら、軍の配置や不案内な土地を忠實に研究してゐた。時々ワイエロオテルに自分が聞き洩らした言葉や、六ヶ敷い村の名などを繰返して呉れと頼んだ。ワイエロオテルがその希望を實行すると、ドフツローフはそれを書き止めた。

一時間以上もつゞいた朗讀が終ると、ランジエロンはまた嗅真函をまはすのを止めて、ワイエロオテルを見るでもなく、又特に誰を見てもなく、敵軍は始終移動してゐるから、敵軍の位地は確かに分らないものとしなければならぬのに、その敵の位地をよく分つてゐるものと假定して立てた此様な計畫を實行するのは、非常に困難だと言ひ出

した。ランジエロンの反対説は、根拠のあるものではあつたが、併し彼の反対の目的は、まるで小學生徒を相手にでもしたやうに高慢ちきに自分の計畫を朗讀したワイエロオテルに向つて、君は白痴者共を相手にしてゐるのではない、軍事上のことでは、君に何かを教へてやる事の出来る人間を對手にしてゐるのだよ、といふ事を感じさせるにあつた事は明かであつた。ワイエロオテルの單調な聲の響が止むと、クツウゾフは、粉挽車の眠らせるやうな音が一寸でも切れると眼を覺ます粉挽男のやうに目を開いて、ランジエロンの喋つてゐる言葉に一寸耳を傾けてゐたが、「あゝ、まだ君達はそんな下らん事を言つてるのか！」とでも言ふやうに急いで又もや眼を閉り、前よりも一層低く頭を垂れた。ランジエロンは、策戦の作成者としてワイエロオテルの、軍事上の自惚れを、出来得る限り意地悪く攻撃しようとするが、ボナバルトは攻撃されるのを待たずに、容易に攻撃軍に變じて、我軍配置の此全計畫を全然無効に歸せしめるだらう、と説いた。ワイエロオテルは、あらゆる反対説に前以て準備してゐたらしく、誰が何と言はうと少しも關はず、自信のある、輕蔑的な微笑みを見せて總ての反対説を迎へた。

「若しボナバルトが我軍を攻撃し得るなら、今日それを實行するでせう。」と、彼は言つた。

「では、あなたはボナバルトを無力だと想ふのですか？」と、ランジエロンが言つた。

「彼は四萬の兵さへ持つてゐるか何うか疑はしい位です。」と、ワイエロオテルは、自分の治療法を呈出しようとする看護婦に對した醫者のやうな微笑を浮べて答へた。

「して見ると、彼は態々我々の攻撃に會つて癱滅するのを待つてゐる譯ですね？」と、ランジエロンは、自分の側にゐるミロラドキツチの方へ、再び應援を求めるやうに振り向きながら、狡猾さうな、皮肉な微笑を浮べて言つた。

けれど、ミロラドキツチは明かにその瞬間、將軍等の間に論ぜられてゐる問題よりは、何か他の世間のことを考へ

てゐたらしかつた。

「Ma foi, (神かけて)」と、彼は言つた。「明日は戦場で、そんな事はスツカリ解りませうよ。」

ワイエロオテルは、再び微笑した。その微笑は、ロシアの將軍方からゐるんなら反對を受け、自分が充分に確信してゐるばかりでなく、兩皇帝陛下も亦確信して居られる事柄を説明しやうとは、自分に取つて滑稽な、不思議な事であると言つたやうな微笑であつた。

「敵は火を消してゐます。そして間斷なく騒ぎがその陣營に聞えてゐます。」と、彼は言つた。「之れは何を意味するのでせう？ 我々が一番怖れてゐる退却をしてゐるのか、或は陣地を變へて居るのか、何らかです。」(彼はにやりとした)「併しながら、若し敵がクツウラスに陣地を取れば、却つて我軍の勞力を減らしてくれるだけの事です。我軍の配備は毫も變りません。」

「どう云ふ譯なのです？……」と、長い間自分の疑問を述べる機會を待つてゐたアンドレー公爵は言つた。

クツウゾフは眼を覺し、重苦しきやうな咳拂ひをして、將軍達を見まはした。

「諸君、明日の配置は、いや今日の配置は(その時はやがてもう一時を打たうとしてゐた)もう變更する事は出来ません。」と、クツウゾフは言つた。「今諸君が聞かれた通りです。我々は皆我々の義務を盡さうではありませんか。それから戦闘前に最も重大な事は……(一寸合間を置いて)よく眠つて置くことです。」

クツウゾフは散會の合圖をした。將官達は叩頭して出て行つた。もう眞夜中過ぎてあつた。アンドレー公爵も出て行つた。

アンドレー公爵が、自分の意見を述べたいと思つてゐて、終に述べる事が出来なかつた策戦會議は、疑念と不安との印象をアンドレー公爵の心に残した。ドルゴルコフとワイエロオテルとが正しかつたのか、それともクツウゾフやランジエロンや、攻撃の策戦に賛成しなかつたその他の將官達が正しかつたのか、アンドレー公爵には解らなかつた。けれど直接皇帝に自分の意見を述べる事はクツウゾフには出来なかつたのだらうか？ 何とか他の方法はなかつたものだらうか？ 個人と侍臣との考ばかりで、數萬の人間と『私』の命とを危くすることが出来るだらうか？」と、彼は考へた。「さうだ、俺は明日殺されるかも知れない。」と、彼は思つた。

死といふことを考へると共に、遠いや近いのや記憶の凡ての連鎖が、俄かに彼の想像のなかに浮き上つた。彼は父と妻との最後の告別を思ひ出した。妻に初めて戀を感じた時分のことを思ひ出した。妻の妊娠のことも思ひ出した。と、彼には妻と自分とが哀れに思はれた。神經的に和らいだ興奮状態で、自分とネスギーツキイとが滞在してゐる田舎家を出て、その家の前を歩き始めた。

霧の籠めた夜であつた。月光が霧を透して神秘的に輝いてゐた。「さうだ、明日だ！ 明日だ！」と、アンドレー公爵は考へた。「明日は、何もかも私にはお終ひになるかも知れない。かうした記憶は最うなくなるだらう、かうした記憶は皆な俺に取つて最早や何の意味もなくなるのだらう。多分明日だ。確かに明日だ。何だか虫が知らせる。最後に初めて自分の出来るだけの力を示すべき機會が來たのだ。」すると彼は戦争と、その損害と、戦闘が一點に集中する事と、それから總ての司令官達の狼狽とを想像し、最後に、あの幸福な瞬間と、自分が長い間待つてゐたあのツウロンとを想像した。彼は斷然、明瞭に自分の意見をクツウゾフとワイエロオテルと兩皇帝とに陳述する。みんな彼の考への確かなのに驚嘆する。が、誰もその考へを實行しやうと企てる者がない。そこで彼は、一聯隊か一師團を率ゐ、誰れも自分

の計略に口を挟まないと云ふ條件を作り、自分の師團を指揮して最も重要な地點へ行き、一人で勝利を占める。だが、死と苦痛は？」と、他の聲が言つた。けれど、アンドレー公爵は、その聲には答へないで、自分の勝利といふ考へを續けて行つた。次の戦争の計略も彼一人で作られる。名義上では、クツウゾフの一參謀副官に過ぎないが、何事も彼一人です。次の戦争は彼一人の力で勝利になる。クツウゾフが轉任になつて彼がその代りに任命される……。「それもいゝ。が、それから？」と、又も他の聲が言つた。「それから、若し今迄にお前が十通も負傷しなければ、戦死するか、購されるかしたのだ。それもいゝ。が、それから何うするのだ？ それもいゝ。が、それから？」とアンドレーは自分で自分に答へた。「それから何うなるかと云ふことは俺にも分らない、知り度いとも思はないし、又分らう筈もない。だが、若し俺れがそれを欲し、榮譽を欲し、有名な人間になり度いと思ひ、みんなに愛されたいと思つたにしても、俺がそれを欲すると云ふことも、それが俺の求める唯一のものだと云ふことも、俺がその爲めにのみ生きてゐると云ふことも悪いことぢやない。さうだ、その爲めにのみだ！ 俺は決して誰にも此事を言ふまい。併し、あゝ！ 若し、俺が何物にも増して榮譽と、人間の愛とを愛するのなら、俺は何うすれば宜いのだらう？ 死、負傷、自分の家族を失ふこと、何れも私に取つて恐ろしくない。大勢の人達——父、妹、妻、俺の最も大事な人達は俺にとつて何んなに尊く、何んなに愛らしくても——又、其の反對に死、負傷、自分の家族を失ふことは、何んなに怖ろしく何んなに不自然に思はれても、榮譽や、人々から受ける敬意などの一刹那の爲にも、私の知らない人々や、知りさうもない人々から受ける愛の爲めにも、あすこにゐる人達の愛の爲めにも、私は親愛な貴いものを一人残らず捨て、もかまはない。」と、クツウゾフの庭の話聲に耳を傾けながら、アンドレーは考へた。彼は、クツウゾフの庭で荷造りをしてゐる將校の従僕達の聲を聞くことが出來た。「テイト、やい、テイト！」と、言ふ聲が聞えた。之れは、アン

ドレー公爵の知つてゐるテイートといふクツウヅフの老料理人を怒鳴りつけてゐるのらしかつた。

「何んでえ、」と、老人は答へた。

「テイート・スツウバイ・モローテート（テイート、穀物打ちに行け！）」と、悪口家が言つた。

「ふうッ、畜生奴！、やい。」と、言ふ聲が響いた、が、それは従卒や従僕等の笑ひ聲で蔽はれて了つた。

「併し矢張り、俺が愛し且つ貴ぶものは、たゞ彼等すべての者に卓越することだ。俺が貴ぶものは、この霧の中で、俺の上に蔽ひ被さつてゐる此神秘的な力と光榮とだ！」

### 十三

ラストフは、その夜、歩哨任務の爲め半個中隊と共に、バグラチオン技隊の最先頭の前哨線へ遣られた。彼の部下の驃騎兵達は、二人宛前哨のあたりに散<sup>ち</sup>らされてゐた。ラストフ自身は、非常な力で彼を壓へつけやうとする睡氣と戦ひながら、前哨線附近を乗りまはしてゐた。後方には、霧の中に茫然と燃えてゐる焚火が際限もなく擴く見えてゐた。彼の前には、霧の深い暗闇があつた。ラストフは、この霧の深い遠方を見詰めてゐても、何一つ見えなかつた。たゞ何かゞ或は灰色になつたり、或は黒ずんだりするだけであつた。又或は敵がゐなければならぬ邊りに火のやうなものがチラリと閃いたりした。或は、それは唯自分の眼にだけ輝くのだらうといふ氣がした。で、彼は眼を瞑つた、と、皇帝や、チエニソフや、モスクワのいろ／＼の記憶などが想像に浮んだ。急いで再び眼を開けると、自分の直ぐ前に

は、自分の乗つてゐる馬の頭や耳などが見えた。驃騎兵の方へ六歩ばかり馬を進めると、時々彼等の黒い姿も見えた。けれど遠くの方には矢張り例の霧の深い暗闇が見えた。「いや、ひよつとすると、」と、ラストフは考へた。皇帝が俺に出會つて、他の將校になさるやうに、何か俺に任務を仰せ付けになるかも知れない。（あすこにあるのは何だか見て来い）と、かう有仰るだらう。皇帝が偶然或る將校をお見知りになつて、御自分にお近づけになつたと言ふ話は随分澤山ある。若し俺をお近づけになつたら何うだらう！ あゝ！ 俺は何んなに陛下を護るだらう、どんなに眞實ばかりをお話するだらう、陛下を欺く奴等を何んなに叱り飛ばすだらう！」そしてラストフは、皇帝に對する愛と忠誠とを生々と思ひ浮べようとして、喜んで殺すばかりではなく、皇帝の面前でその頬を撲りつけてやるべき或る敵や奸佞なドイツ人などを想像した。と、突然遠くに聞える叫び聲がラストフを覺した。彼は、ぶる／＼と身慄をして、眼を開いた。

「俺は何處にゐるのだらう？ さうだ、前哨線にゐるのだ。突撃命令と合言葉と——馬車の棒と、オルミユツツばかりだ。俺たちの中隊が明日豫備軍に入れられるのは何と云ふ悲しい事だらう……」と、彼は考へた。「一つ前線へ行くやうに頼んで見よう。それが皇帝に會ふ唯一の機會であるかも知れない。もう間もなく交代の時間だ。もう一度まはつて来よう、そして歸つて来たら、將軍の處へ行つて頼んでやらう。」彼は鞍の上で姿勢を直し、グイと手綱を引いて、もう一度部下の驃騎兵達を見まはりに出かけた。少し、あたりが明るくなつたやうな氣がした。左側の方に明るく照らされてゐるだら／＼阪と、それに面して、壁のやうに聳え立つてゐるやうに思はれる眞黒な小丘とが見えた。その小丘の上に、ラストフには何うしても解らない白い一點が見えた。月に照らされてゐる森の中の小さい野原だらうか、それとも残雪だらうか、白い家なのだらうか？ ラストフには、その白い點の上に何か動いてゐるやうに思は

れた。雪に違ひない——あの點は。點だ——*Une tache* (點だ)と、ラストフは考へた。「けれど、あれはタアシユ  
ぢやない……」

「ナターシヤだ、妹だ、黒い眼だ。ナ……ターシヤだ。(俺が皇帝に會つたと彼女に言つたら、驚くだらうな!)」  
ターシヤを……ナターシヤを連れて来い……」  
「右にお寄りなさい、貴下、其處には敵がありません。」と、一人の  
驃騎兵が言つた。ラストフは、眠りながらその側を通つてゐたのだつた。ラストフは、もう馬の鬣の處まで突つ伏し  
てゐた頭を上げて、驃騎兵の側に立ち止つた。が、若やかな、子供らしい眠氣を拂ひ去ることは出来なかつた。だが  
待てよ、俺は何を考へてゐたんだ? 忘れちやならんぞ。どんな風に皇帝にお話をしやうか知ら? いや、そんな事  
ぢやない——それは明日だ。さうだ—— ナターシヤを攻撃する、俺達を愚鈍にする——誰を? 驃騎兵をだ。あ  
の驃騎兵と口髭……トウエルスキイ道をその口髭のある驃騎兵が馬に乗つて行つた、まだ俺は彼奴のことも考へて  
ゐたんだ、丁度グリーエフの家の眞向ふだつたつけ……グリーエフ爺さん……あゝ、立派な小さいヂエニソフ!  
だが、そんな事はみんな下らない事だ。今、重大なのは、皇帝が此處に居られるといふ事なんだ。皇帝は、あんなに  
ちつと俺を見詰めて、何か有仰りたさうだつたが、有仰る事が出来なかつた……いや、出来なかつたのは俺の方だ  
つた。だが、そんな事は下らないことだ。重大なのは、俺が今まで考へてゐた重要な事を忘れないやうにすることだ。  
さうだ。ナ……ターシカを、俺達を——愚鈍にする。さうだ、さうだ。それがいゝ——そして彼は、又もや馬の首の  
所へ頭を垂れ下げた。と、突然、自分が狙撃されてるやうな氣がした。「何だ? 何だ? どうしたのだ?……彼奴  
等をやつつける! どうしたのだ?」と、ラストフは眼を覺まして言ひ始めた。眼を開いた瞬間、ラストフは自分の  
前方の、敵のゐる前方にあつて、數千の聲々の長く引張つた叫びを聞いた。ラストフの馬も、ラストフの側にゐる

驃騎兵の馬も、その叫びに耳を聳立てた。叫びの起つて来る邊りに一つの火花がバツと燃えりと直ぐ消えた。と、又  
一つ燃えて消えた。やがて小丘の上にあるフランス軍の全線に火が燃え出し、叫び聲は益々高くなつてきた。ラスト  
フは、フランス語の響を聞いたが、之れを聞き分けることは出来なかつた。聲は益々激しく鳴り響いた。が、唯ア、  
、、! ル、、! といふのだけを聞くことが出来た。  
「何だらう? お前は何だと思ふ?」と、ラストフは自分の側に立つてゐる驃騎兵に言つた。「敵の叫び聲に相違ない  
だらうね?」

驃騎兵は、何とも答へなかつた。

「どうした、お前には、聞えんのか?」と、ラストフは暫く答を待つた後で又訊いた。

「誰だか分りません。貴下、」と、驃騎兵は厭々答へた。

「場處から考へて見ると、慥かに敵に違ひない。」ラストフは又繰り返した。

「敵かも知れませんが、が又、さうでないかも知れません。」と、驃騎兵が言つた。「夜のことですから。こら、騒ぐなよ」  
と、彼は自分の下で動く馬に向つて言つた。

ラストフの馬も亦何となく落付いてゐなかつた、叫び聲に耳聳て、火を見詰めながら、凍てついた地面を足で打つ  
てゐた。叫び聲は、次第に高くなり、數千の軍隊でなければ出ることが出来ないやうな大きな呻り聲になつた。火は  
益々烈しく燃え出してフランス軍の戦線に一ぱいに擴がつた。ラストフは、もう眠くなかつた。敵軍の壯  
快な、勝ち誇つたやうな叫喚は、彼の眼を覺ませたのであつた。Vive l'empereur! l'empereur! (皇帝萬歳! 皇  
帝!) ラストフは今、かうハツキリ聞くことが出来た。

「餘り遠くないぞ、川の向ふ邊りに違ひない。」と、ラストフは自分の傍に立つてゐる驃騎兵に言った。驃騎兵は、何とも答へずに唯溜息を吐いて、腹立たしげに咳拂ひをした。彼は、歩哨線に沿うて早足で駈けて来る騎士の足音を聞いた、と、突然、一人の驃騎兵軍曹の姿が夜の霧の中から現はれた。その姿は宛然大きな象のやうであつた。

「あなた、將軍方が來られました！」と、ラストフの處に馬を乗つりけながら、軍曹は言った。

ラストフは、火と叫聲との方を見続けながら、軍曹と一緒に、歩哨線に沿うてくる騎馬の幾人かを迎へに行つた。一人は白い馬に乗つてゐた。バグラチオン公爵が、ドルゴルコフ公爵と副官とを連れて、敵軍の中に起つた不思議な火と叫び聲とを見に來たのであつた。ラストフは、バグラチオンの所へ行つて、彼に報告し、それから副官等の間にまじり、將軍達の言ふ事を聞いてゐた。

「私は確かに保證します。」と、ドルゴルコフ公爵がバグラチオン公爵に言つてゐた。「一個の策略に過ぎません。敵は既に退却してしまつたのです。そして我々を欺かんがために、後衛に命じて火を點じさせ、あんな騒ぎをしてゐるのです。」

「私は疑はしく思ふ。」と、バグラチオンは言つた。「夕方から私は、あの丘の上に敵がゐるのを見た。若し退却したとすると、あそこからも退かにやたらん答だ。士官君。」と、バグラチオン公爵はラストフの方へ振向いた。「敵の歩哨は未だあそこに居るのかね？」

「晩方は居りましたが、只今は解りません、閣下。驃騎兵をつれて偵察して参りませうか？」と、ラストフは言つた。バグラチオンは、立ち止つてゐた。そして答へはしないで、ラストフの顔を霧の中へ見分けやうとした。

「さう、見て來て呉れんか。」と、彼は一寸口を噤んでから、言つた。

「畏まりました。」

ラストフは、馬に拍車を當て、軍曹のフェドチenkoと二名の驃騎兵とを呼び、自分の後から來るやうにと命じ、未だ叫び聲のつゞいてゐる方向をさして、小丘の麓へ馬を走らせて行つた。自分より先には誰れも行つてゐない、その神秘的な、危険な、霧の立て籠めてゐる遠方へ、たつた三人の驃騎兵を引き連れて馬を走らせて行くことは、ラストフに取つて悲しいことでもあり、又愉快なことでもあつた。川の向ふには行かぬやうにとバグラチオンが丘から叫んだ。が、ラストフは、バグラチオンの言葉が聞えなかつたやうな風をして、絶えず灌木叢を木立と間違へたり、水の溜つてゐる溝を人の集團と間違へたり、そして又絶えずその間違ひを鮮見したりしながら、馬を止めずに、だん／＼遠方へと走つて行つた。坂の麓まで駈けて行くと、もう味方の火も見失つたが、併しフランス軍の叫び聲は一層高く一層はつきりと聞えた。谷の中に入ると彼は、前方に何か河のやうなものを見たが、そこまで近づいて見ると、それは一條の道路であつたことが解つた。その道へ出ると、それに添うて行く方がいゝか、それとも亦それを横切り眞暗な野原をぬけ山の方に行つたがいゝかと躊躇ひながら、馬を止めた。霧の中に明るく見えてゐる道に添うて行くのは、人の姿を早く見分けることが出来るので幾らか安全であつた。「俺の後について來い。」と、彼は言つて、道を突切り山の上に駈け登り、フランスの歩哨が晩方から立つてゐた地點へ行かうとした。

「貴下、彼處に敵が居ります！」と、後から一人の驃騎兵が言つた。

と、ラストフが、急に霧の中に黒ずみ出した何ものかをまだ見定めないうちに、チラツと火が閃めき、ボンといふ銃聲が聞えた。彈丸は何事かを訴へるやうに、霧の中を高くシユツと唸つて、聞えない處へ飛んで行つた。他に銃聲

は聞えなかつたが、聯隊には火が閃めいた。ラストフは馬頭をめぐらして、駈足で後へ引返した。更に四發の銃聲が、異なる合間を置いて鳴り渡り、銃丸は種々な調子で何處か霧の中で鳴った。ラストフは、銃聲を聞いて自分と同じやうに活氣立つた馬を制して、並足で歸つた。「さア、も少し来い。さア、も少し来い！」と一種快活な聲が彼の心の中へ言つた。併し、それきり銃聲は聞えなかつた。ラストフは、バグラチオンの近くに來ると、又馬を駈けさせ、帽子の廂のところへ手を擧げながら、その制へ乗りつけた。

ドルゴルコフは依然として、フランス軍は退却し、我々を欺くために火をたいたのだと云ふ自分の意見を固守してゐた。

「あれが何の證據になりませう？」と、ラストフが乗りつけた時ドルゴルコフは言つてゐた。「敵は退却して、歩哨だけを殘して置いたのです。」

「まだ敵が悉皆退却したのでないことは明かですよ、公爵」と、バグラチオンは言つた。「兎に角明日の朝まで待つて見なければならぬ。明日になればスツカリ解るから。」

「閣下、敵の歩哨はやはり晩に居つたあの丘の上に居ります。」と、ラストフは帽子へ手を擧げ、屈み加減になつて報告した。彼は偵察、殊に銃丸の唸聲に呼び起された快よい微笑を仰へることが出来なかつた。

「宜しい、宜しい。」と、バグラチオンは言つた。「御苦勞だつた、士官君。」

「閣下」と、ラストフは言つた。「お願ひしたい事があるのですが。」

「何かね？」

「明日私の中隊は後衛を命ぜられて居りますが、私を第一中隊のまはして預けますまいか？」

「君の名は？」

「伯爵ラストフ。」

「あゝ、宜しい！ 私について居るが好い。」

「イリヤ・アンドレーキツチの息子さんかね？」と、ドルゴルコフが言つた。が、ラストフは夫れには答へなかつた。

「それでは當てにして居りますから、閣下。」

「私が命令を出さう。」

「明日は多分俺を皇帝の所へ何かの使者にやつてくれるだろう。」と、ラストフは思つた。「有難い！」

敵軍の叫び聲と火とは、ナポレオンの勅諭が各隊で朗讀されてゐる間、皇帝自身が露營地を乗りまはしてゐた爲めに起つたのであつた。皇帝を見ると兵卒達は、藁束に火をつけて、「Vive l'Empereur! 皇帝萬歳！」と、叫びながら、後から走つて行くのであつた。ナポレオンの詔勅は次のやうなものであつた――

「兵士等よ！ 今やロシア軍はアウストリア軍、即ちウルム軍の復讐をなさんために、汝等と會戦せんとしてゐる。彼等は、汝等がホルラブルンに於て撃破し、以來更に此地點まで追撃し來たれる軍勢である。我軍が占め居る陣地は有力なものである、而して、敵は右翼より予を包圍せんとして進む間に、その側面を予に曝すであらう！ 兵士等よ！ 予は自ら汝等の諸大隊を率ゆる。若し汝等が平素の勇敢を以て、敵の諸隊に敗北と混亂とを與へるな



らば、予は遠く砲火の外にあるであらう。併しながら、若し一瞬たりとも勝利疑はしく見えるならば、(我が國民の名譽の基礎なるフランス歩兵の名聲隆々たる今日に於ては、特に、勝利に就いての不安のあるべき筈はないけれども) 汝等は敵の最も猛烈なる攻撃に身を曝す汝等の皇帝を見るであらう。

負傷者の運搬を口實として隊伍を亂す勿れ！ 各自みな、我が國民に對して甚だしき憎惡を抱けるこれ等イングリンドの庸兵を征服せざるべからざる事を充分に覺悟しなくてはならぬ。この勝利は我等の戦役の終局を語るものである。而して我等は冬籠りの陣地に歸へることを得べく、彼所かしこに於て、今フランスにて編制されつゝある新銳軍の來援に接するのである。斯くて後、予が締結する平和は、我が國民に取りても、汝等及び予に取りても、恥しからぬもとなるであらう。 ナポレオン

#### 十四

朝の五時には未だ暗かつた。中央軍と豫備軍とバグラチオンの右翼軍との諸隊はまだ靜止してゐた。併し左翼の歩兵と、騎兵と、砲兵とは、フランス軍の右翼を攻撃し、ライエローテルの策戦計畫に従つて、敵をボヘミアの山へ撃退する爲め、眞先に高地を下りなければならなかつたので、もう起きて騒いでた。餘計なものを何も彼も投げ込んでゐる燎火の煙が、眼を刺戟し、寒くもあるし、亦暗くもあつた。將校たちは、大急ぎで茶を飲んだり、朝飯を食つたりした。兵卒達はビスケットかぢを嚼つたり、體を暖めながらとん／＼足踏みしたりした、そして火の周圍に集り、假小會

の殘骸や、椅子や、テーブルや、車輪や、桶や、其他自分たちが持つて行くことの出来ないいろいろのものを薪の代りに焔の中に投げ込んだ。アウストリア軍の將校達は、ロシア軍の間を歩きまはつて、前進の先觸れをやつてゐた。一人のアウストリアの將校が司令將校の宿舎の近くに現れると直ぐに聯隊はざはめき始めた。兵卒達は、火の傍から駆け出し、長靴の脛にパイプを隠したり、行囊を積み込んだり、小銃を調べたりして整列した。將校たちは、ボタンを掛け、軍刀や革囊を着けて、隊列を見廻つた。兵站部員や從僕達は、馬を荷馬車につけ、荷造りして、それを荷馬車に縛りつけた。副官や聯隊、大隊の司令將校達は、馬に跨り、十字を切つて、後に残る輜重隊に向つて、最後の命令、勸告、委任などを與へた、と、幾千とも知れぬ單調な足音が響き出した。各縱隊は何處へ行きつゝあるのかも知らなければ、又周圍の群衆や、煙や、次第に深くなつて行く霧のために、自分たちの立去りつゝある場所も、これから進んで行くべき方向も見ることが出来ずに動いて行つた。

行進中の兵士が、自分の聯隊に取り圍まれたり、閉ぢ込められたり、引き摺られたりしてゐるのは、丁度水夫が自分の乗つてゐる船のために、さうされてゐるのと同様である。兵士は、幾ら行つても、幾ら異様な、不思議なそして危険な處に這入つても、——丁度水夫が、いつも自分の船の甲板や帆檣や綱具などに取り圍まれてゐるやうに、——何處へ行つても、如何なる時でも、自分の周圍には同じ戦友、同じ隊列、同じイワン・ミートリツチ軍曹、同じ中隊長のジューウチカ、同じ司令部を見るだけである。兵卒は、減多に、自分の船が何所を航してゐるか知らうと思はない。が、戦ひの日となると、どう云ふ譯か、又何處から來るか云ふことは解らないが、重大な嚴肅な何物か、近づくと共に鳴り響く一種かど嚴かな音調が、軍隊の精神界に聞えて來て兵卒達に異常な好奇心を起させる。戦ひの日には、兵士達は、自分達の聯隊の利害關係の慣例から逃れやうと精一ばい努力し、自分の周圍に行はれてゐる事に聽耳を立てたり、ち

つと見入つたり、食るやうに訊ねたりする。

もう夜が明けてゐるのに自分の前十歩先は見えない程、霧が深かつた。灌木の叢が、大木のやうに見えたり、平地が崖や斜面のやうに見えたりした。何時どんな處で、どの側で十歩先にゐる見えない敵と出會するか知れなかつた。が、長い間各隊は、其の霧の中を山に上つたり下りたり、庭園や垣根を過つたりしながら、見たことのない新しい場處を進んで行つた、が、何處まで行つても敵兵には出會はなかつた。いや、それどころか、兵士達は、自分の前面にも、背後にも其周囲にも、ロシア軍の各隊が同じ方面へ進んで行くのに気がついた。どの兵卒も、自分が進んで行く處、その見知らぬ場所へ、なほ數知れぬ味方が進んでゐるのを知つて、愉快な心持になつた。

「おい君、クルスク隊に追ひ越されたぞ。」と、各列で言つてゐた。

「どうだい、君、我軍の集つたところは素晴らしいぢやないか！ 昨夜俺は火の燃えてるのを見たが、何處まで見ても

際涯がないんだ。まるでモスクワそつくりよ！」

各隊の司令將校達は隊の傍に馬を寄せたり、兵卒達に口を利いたりしなかつたが、司令將校達は策戰會議の時と同じやうに不機嫌で、採用された策戰に對して不満を感じてゐたので、たゞ命令を實行してゐるだけで、兵卒達を鼓舞しやうとはしなかつた。それでも兵卒達は、何時も實戰に向つて進む時、殊に攻勢を取る時のやうに、勢よく行進した。が、かうして濃霧の中を一時間ばかり進んでゐるうちに、軍の大部分は止まらなければならなかつた、そして行はれつゝある失錯と妄想との不愉快な意識が各隊の間に擴がつた。どんな風にして、その意識が擴がつたのか、それを説明する事は非常に困難である。けれど、それが非常に精確に傳はり、水が谷を沿ふて流れてゆくやうに、知らず識らずのうちに、而かも堰き止めることが出来ないやうに溢れ行きつゝあることは疑ひなかつた。これが若しロシア

軍單獨で、聯合軍でなかつたのなら、失錯と云ふこの意識が全般的な確信になるまでには、恐らく長い間かゝつたであらう、が、今聯合軍の場合では、その失錯の原因を、妄想的なドイツ人の所爲にするのが殊に痛快でもあり、自然でもあつたので、誰れも皆、腸詰製造者(ドイツ人を指す)の作つた危険な混亂が起りつゝあるのだと信じたのであつた。

「何だつて止つてゐるんだい？ 道が塞がれたのか？ それとも到頭フランスの奴に打突かつたのかい？」

「いや、聞えないぜ、打突かつたんなら銃聲が聞える筈だ。」

「馬鹿に急いで出發させたが、出發すると——何の理由もなく野原の真中に立たせやがるなんて——ドイツ人の畜生滅茶な眞似をしゃあがる。頼りな畜生奴等！」

「奴等を先頭に遣つてやりてえた。確かに、奴等は後衛で甘いことをしてやがるんだ。俺達は此通り何にも食はずに突立たされてゐると來てやがる。」

「何に、早く行き度いと云ふのか？ 騎兵が道をふさいでるんださうだ。」と、一人の將校が言つた。

「あゝ、あの畜生のドイツ人奴等は、自分の土地を知らんのだ。」と、もう一人の將校が言つた。

「お前たちは何師團だ？」と、一人の副官が馬を走らせて來て怒鳴つた。

「第十八師團であります。」

「それなら、何うしてこんな處に居るのだ？ 疾くにもう先頭に行つて居る筈だ。こんな事してゐると、向ふへ着くのが夜になつて了ふぞ。」

「馬鹿者のする處置はこんなものだ、自分で自分のしてゐる事を知らずに居る。」と、將校は言つて乗り去つた。

やがて一人の將軍がやつてきて、外國語で腹立たし氣に何やら怒鳴つた。

「Ta-ta-ta-ta (タァ……ファ……ラァ……ファ) か、何をベラ〜言ふんだかちつとも解らねえ。」と、一人の兵卒が、引返して行く將軍を罵りながら言った。「奴等を片つ端から射つてやりてえや。悪黨奴等。」

「十時までに向ふへ着かなきやいけねえつて云ふ命令だつたぜ、それなのに未だ半分も来てやしねえ。手配りが此の通りだもの！」と、方々で繰り返へされた。

かうして、軍隊が出發した時持つてゐた勢ひ立つた感情は、混亂した手配りと、ドイツ人と對する憤懣と憎惡とに變り初めた。

混亂の起りは、かういふ事實に基いてゐた、アウストリアの騎兵が左翼を行進中、司令部では、軍の中央部が右翼から離れ過ぎてゐることに氣が附いたので、騎兵全部は右翼に移れと云ふ命令を受けた。數千の騎兵は歩兵の前面を横ぎつた。歩兵は、待つてゐなければならなかつた。

隊の先頭で、アウストリアの司令官とロシアの將軍との間に衝突が起つた。ロシアの將軍は騎兵隊を止めろといふ要求を怒鳴つた。アウストリアの司令官は、自分の責任ではなくて、總司令官の責任だといふことを説明した、各隊はその間立止つてゐて、だらけ切り、意氣消沈して来た、一時間停滯した後、各隊は漸く動いて、山を下り始めた。山の上に擴がつてゐた霧は、軍隊の下つて行く低地には一層濃く立籠めてゐた。と、前方の霧の中で銃聲が一發聞えた。續いてまた一發、最初は何の連絡もなく *tratta fat* (トラツタ、タツ) と、不揃ひな間をおいて聞えたが、やがて次第に揃つてきて、頻繁になり初めた。そしてホルドバツハ川の小衝突が始つた。

この低地の川の上で敵に出會はうとは思ひも寄らず、霧のなかで不意に打つかつたので、司令官達から激勵の言葉を聞くのではなく、全軍皆、もう遅れたと云ふ意識を抱きながら、而も濃霧の中なので自分等の前にも四邊にも何にも

見えずに、ロシア兵達はのろ〜と元氣なく敵と砲火を交へ、司令官や副官達からは、機に適つた號令をも受けずに前進したり、また止つたりした、司令官や副官達は、自分達の部下の軍隊を見付けることが出来ずに、不案内の土地の霧の中を彷徨つてゐた。低地に下りて行つた第一、第二、第三縱隊の戦争は、こんな風に始まつたのであつた。クツウゾフの一緒にゐた第四縱隊は、未だブラツツェンの高地に留つてゐた。

戦闘の始つてゐる低地の上には、まだ濃霧がこめてゐた、其上の方は晴れかゝつてゐたが、それでも何ほ先頭で何が起つてゐるかは少しも分らなかつた。味方が假定してゐたやうに、敵の全力は自分たちの十ウエルストも先方にゐるのか、それとも直ぐ其處の霧の中にあるのか、九時までは誰も知らなかつた。

朝の九時になつた。霧は斷れ目のない海のやうに低地の上に擴がつてゐたが、シュラバニツツの村の傍の、ナポレオンが元帥達に取り巻かれて立つてゐる高地は、もうスツカリ晴れてゐた。ナポレオンの頭上には晴やかな青空があつた。そして大きな圓い太陽は、大きな、空洞な、紫色の浮子のやうに、乳白色の霧の海の面に搖めいてゐた。フランスの全軍のみならず、幕僚を従へたナポレオン自身も、味方が占領して陣地を敷くつもりで攻撃を開始しやうとした川の對岸、竟リソコルニツツの村とシュラバニツツの村との向側にゐたのではなく、もつと味方に近い川の手前に居つたのであつた。で、ナポレオンは、肉眼で我軍の騎兵と歩兵とを見別けることが出来た。ナポレオンは、イタリー出征の時に着た例の青い外套をつけ、灰色の小さなアラビア馬に跨つて、元帥たちの少し前の所に立つてゐた。彼は霧の海の中から突き出てゐるやうな、そして遙かにロシアの軍隊が沿ふて来る幾つかの丘を跨つて眺めながら、谷間の銃聲に耳傾けてゐた。その當時未だ瘡せてゐた彼の顔は、筋一すぢ動かさなかつた。炯々するその眼はヂツと一點に据ゑられてゐた。彼の豫想が適中しつたのであつたのである。ロシア軍の一部は谷間の池を湖水の方へと

下り、他の一部は、ナポレオンが攻撃しやうと企て、陣地の鍵だと思つてゐたブラッツェンの高地を見捨てつつあつた。ナポレオンは霧の中から、ブラッツェン村の傍にある二つの丘の間の谷間に、銃剣を輝かやしながらロシアの縦隊が、みな同じ方向に、谷の方へと進んで行き、次ぎ次ぎに霧の海の中に隠れて行くのを見た。前夜受け取つた報告や、夜の間に前哨線で聞いた車輪と靴の音や、ロシア軍の不秩序な行動や、種々な假定などに依つて、ナポレオンは、同盟軍が自分を遙か遠くにゐるものと思ひ込んでゐること、ブラッツェンの傍を進んでゐる軍隊が、ロシア軍の中央軍をなしてゐること、而もその中央軍は、もう自分を攻撃しても到底成功は覺束ない程兵力が削がれてゐること、なども明瞭と見抜いてしまつた。けれど彼はそれでも戦闘を始めたなかつた。

その日はナポレオンに取つて祝祭日——戴冠式の記念日であつた。彼は曉方幾時か眠つたので、身體具合もよく、快活と爽快とを感じながら、何事をやつても出来れば、何事にも成功しきうな幸福な心持で、馬に跨つて戰場に出たのであつた。彼は、霧の中から突き出てゐる高地を眺めながら、身動きもせず立つてゐた。その冷かな顔には、戀をしてゐる幸福な若者の顔に見られるやうな、自信のある、満足な幸福を表はす異常な影が宿つてゐた。元帥たちは、彼の後に立つてゐたが、彼の注意を亂さうとはしなかつた。ナポレオンはブラッツェンの高地を眺めたり、霧の中から浮び上つてゆく太陽を眺めたりしてゐた。

太陽が霧の中からスツカリ出て了つて、野原と霧とに眩しい光を投げると、ナポレオンは(戦闘を開始するのに、この時を待つてゐたかのやうに)その美しい白い片手から手袋をとり、その手で元帥たちに合圖をして、戦闘開始の命令を下した。元帥たちは、副官を従へて八方へ馬を走らせて行つた。幾分間か經つとフランス軍の主力は、ブラッツェンの高地へと素速やく進んだ。そこはロシア軍が左の方、谷間へと進むに従つて、ます／＼明け渡されて行くの

であつた。

## 十五

八時にクツツゾフは、ミロラドキツチの第四縦隊の先頭に立つて、ブラッツェンの方へ馬を駈つた。ミロラドキツチの第四縦隊は、ブルジブイシエーウスキイ縦隊と、ランゼロン縦隊とが、もう平地に降りて了つたので、その後の場所を占めなければならなかつたのであつた。彼は、先頭の聯隊の人達と挨拶を交して、進軍の命令を下し、その命令に依つて、自分自からその縦隊を指揮するつもりである事を示した。ブラッツェンの村へ着くと、彼は止つた。アンドレー公爵は、總司令官の隨員をなしてゐる非常に多數な人々の間に交つて、總司令官の後方に立つてゐた。アンドレー公爵は、長い間待つてゐた瞬間の來た時に人が感ずるやうな、昂奮と、焦燥と、同時に歴し鎖めたやうな沈靜とを感じてゐた。今日こそ、自分のツウロンの日だ、然らざればアルコラの橋の日(一七九六年十一月十四日——十結果になるかは知らなかつたが、この日の來ることは固く信じてゐたのである。地形と、味方の位置とに就いては、彼は味方の人々なら誰でも知り得る程度までは知つてゐた。今ではもう到底實行の出來さうもない自分自身の立てた策戦計劃は、忘れて了つてゐた。で、今はワイエロオテルの策戦に精神を打込んで、これから起るかも知れない色々な偶發事件を考慮し、自分の早早い智略と決斷とを要するやうな新しい策略を工夫してゐた。

左の方の低地の霧の中に砲聲が聞えた。が、兩軍の姿は見えなかつた。アンドレーには、戦闘が其所に集中され、葛藤が生じるだらうと思はれた。「そこに俺は」と、彼は考へた、「一個旅團か、或は一個師團を率ゐて遣られるだらう。俺の前にくるものは何も彼も粉碎してやる。」

アンドレー公爵は、通つて行く多くの大隊旗を平然と眺めてゐることは出来なかつた。一つの旗をヂツと眺めながら、彼は考へ續けた。「あの旗では無いだらうか、自分が軍隊の眞先に行く時に持つ旗は。」

夜の霧は、朝になると、高地に霜だけを残してゐた。その霜は段々露に變りつゝあつた。谷間にはまだ霧が、乳色の白い海のやうに擴がつてゐた。味方の軍隊が降りて行つた左手の谷間には何にも見えなかつた。が、其處から銃聲が聞えてゐた。高地の上には晴れ渡つた青黒い空があつた。右手の方には、大きな球のやうな太陽が懸つてゐた。前面遙かに、霧の海の向ふ岸には、樹木の繁つた丘が聳えてゐた。そこには敵軍がある筈であつた。そして何物かを認めることが出来た。右手の方の霧のある所へは、近衛兵が蹄の音や車輪の響をさせたり、時折り銃剣を煌々させたりしながら這入つて行つた。左手の村の後方には、騎兵の一團が、矢張り近衛兵のやうにして前進してゐたが、遠々霧の海に隠れて了つた。前面と後方とは歩兵が進軍してゐた。總司令官は村の端れに立つて、諸隊に自分の前を通らせゐた。クツウゾフは、その朝は疲れきつて、そして苛立つてゐるやうであつた。彼の傍を進軍してゐた歩兵は、何の號令も下らないのに歩みを止めた。明かに先頭で何ものか道を通つた爲めであるらしい。

「しやうがないから、大隊縦列になつて、村を迂廻するやうに命じなさい。」クツウゾフは乗りつけて來た一人の將軍に向つて、腹立たしげに言つた。

「閣下、敵に向つて行くのに、村の狭い道を兵に縦列行進させることの出来ないのが何うして、解らないのです。」

「閣下、私は村の彼方へ行つてから隊形を作るつもりで居つたのです。」と、將軍は答へた。

クツウゾフは、苦々しげに笑つた。

「敵の面前で陣形を展開させたら、君の形勢はさぞ見事なことになるでせう——誠に見事なことだね。」

「敵は未だずつと遠方に居るので、閣下。軍の配置に依りますと……」

「配置！」と、クツウゾフは苦々しく叫んだ。「だが、誰れがあんたに其様な事を言ひましたか……どうか、命令通りやつて貰ひたい。」

「はゞ。」

「おい君。」と、ネスギーツキイがアンドレー公爵に囁いた。「お爺さんひどく御機嫌が悪いねえ。」

白い軍服を着て、帽子に青い羽根をつけたアウストリアの將校が一人、クツウゾフの處へ馬を走らせて來て、皇帝の使だと言つて、「第四縦隊は出發したか？」と、尋ねた。

クツウゾフは、彼には答へずに顔を背向けた。と、その眼は偶然近くに立つてゐたアンドレー公爵の上に落ちた。バルコンスキイを見ると、クツウゾフは、今起つた事は自分の副官の過失ではないといふことを認めたかのやうに、その眼の、怒を含んだ苦々しい表情を和らげた。彼は、アウストリアの副官には答へないで、バルコンスキイに話しかけた。

「君、行つてね、第三師團が村を越したか何うか見て來て呉れないか。そして進軍を止めて、俺の命令を待つて居るやうにと言つて呉れたまへ。」

アンドレー公爵が出かけたかと思ふと、クツウゾフは又呼び止めた。

「それから狙撃兵が配置されたか何うかも訊いてくれ。」と、クツウゾフは附け加へた。「彼奴等は何をしてるのか、何をしてるのか！」彼は矢張りアウストリアの將校には答へずに、かう獨語つた。

アンドレー公爵は依頼を果す爲めに馬を走らせて行つた。

前進してゐる總ての大隊を追ひ越して、彼は第三師團を止めた。そして事實味方の縦隊の先頭に狙撃隊の置かれてゐない事を確かめた。先頭の聯隊の聯隊長は、狙撃隊を配置せよと云ふ、司令官からの命令を聞いて非常に驚いた。聯隊長は、自分の前方にはまだ味方の兵のゐること、十露里<sup>ウエルスト</sup>以内に敵のゐる筈はないと云ふことを確信して立つてゐた。實際、彼の前面には先の方へ傾斜してゐて霧に蔽はれてゐる曠野の外、何にも見えなかつた。手ばかりを捕ふやうにと總司令官の名前で命令して、アンドレー公爵は後方へ馬を走らせた。クツウゾフは矢張り以前の場所に立つてゐた。そして其てつぶりした身體を頽然<sup>ぐた</sup>りと鞍の上に乗せ、眼をつぶつて、懶げに欠伸をしてゐた。軍隊は未だ動き出さずにゐた、が、氣を付けの姿勢で立つてゐた。

「宜しい、宜しい。」と、彼はアンドレー公爵に言つてから、一人の將軍の方へ振り向いた。この人は左翼の縦隊は全部下つてしまつたから、もう出發せねばなりませんと、時計を手にしながら言つてゐた。

「未だ大丈夫です、君。」と、クツウゾフは欠伸まじりに言つた。「未だ大丈夫です！」と、彼は繰返した。

その時、クツウゾフの後方遙かに、各聯隊の歡呼の聲が聞えた。その聲は進軍しつゝあるロシア軍の縦隊の、長い全線に沿ふて非常に速く近づいて來るのであつた。この歡呼を浴びせかけられてゐる人は、急いで馬を驅つて來るのらしかつた。クツウゾフは自分の後に並んでゐる聯隊の兵卒達が叫び出した時、少し片側に馬を寄せ、聲みながら振り返つた。プラツツェンからの道に沿ふて、さまざまの色を着けた一中隊ばかりの騎馬將校が驅けてきた。その

中の二人は外の者の眞先に並んで馬を驅けさせてゐた。一人は白い羽根の附いた軍服を着け、イギリス種の栗毛の馬に跨つてゐた。もう一人は白の軍服を着け、黒い馬に乗つてゐた。これは兩皇帝と、その隨員とであつた。隊附の老練家を氣取つて、クツウゾフは、立つてゐる軍隊に「氣を付け」と、命令し、そして敬禮をしながら皇帝の側に馬を近づけた。彼の姿も身振りも急に變つてゐた。彼は文句なしに服従する者の態度を装ふた。確かにアレキサンドル皇帝に不快な感じを與へたやうに思はれる態とらしい尊敬の態度で、皇帝に近づいて敬禮をした。

その不快な印象は、暗れ渡つた空に浮ぶ霧の名残りのやうに、皇帝の若々しい幸福さうな顔をサツと掠めて消えた。アレキサンドルは、その日は病後なので、バルコンスキイが初めて外國で彼を見たオルミユツの檢閲の時よりは幾らか瘠せてゐた。が、その美しくい灰色の眼には、何時もの通り、尊嚴と柔和とが魅するやうに融け合つてゐた。薄い唇にも矢張り、いろ／＼な表情の出來さうな様子があり、そして氣高い、潔白な青年の表情があつた。

オルミユツの檢閲の時は、もつと嚴然としてゐたが、此處では寧ろ快活で、一層元氣があつた。急速力で三露里の間馬を驅つて來たので、彼は少し上氣してゐたが、馬を止めると、ほつと安慰の溜息を吐き、隨員の中の、自分のやうに若くて、活氣のある人々を見まはした。皇帝の後には、チャルトリーズスキイや、ノウオシルツォーフや、ワルコンスキイ公爵や、ストログノフや、その他の人々がゐた。みんな立派な服装をした快活な若手で、軽く汗ばんだ、素晴らしい、よく手入れの届いた、勢の好い馬に乗つてゐた。薔薇色をした、面長な若いフランス皇帝は、美しく暗褐色の馬に反り過ぎる程眞直に乗り、心配さうに、げれど落ち着いてあたりを見廻した。彼は、自服の侍從武官の一人を呼び寄せて、何やら尋ねた。「何時に出發したのだらう」と、アンドレー公爵は、自分の謁見の事を思ひ出したので、抑へる事の出來ない微笑を浮べて、その古い知己の顔を眺めながら、思つた。兩皇帝の隨員の中には、ハイ

カラな青平貴族の一團がゐた、それは、ロシア人とオーストリア人とで、何れも近衛聯隊及び普通聯隊から選ばれた人々であつた。その人たちの間を、刺繍のある馬衣を着せられた幾匹かの、ロシア皇帝の美しい豫備乗馬が主馬寮しゅばりやうのものに曳かれてゐた。

明け放した窓から蔭気な部屋の中へ、突然野の爽やかな、匂のいゝ空氣が流れ込むやうに、これ等の華やかな騎馬の若者達からクツウゾフの滅入つたやうな幕僚達のなかへ、匂のいゝ若々しさと、元氣と、成功に對する確信とが流れ込んだ。

「何故始めないのが、ミハイル・イラリオーノキツチ？」と、アンキサンドル皇帝は急ぎ込んでクツウゾフに言ひ、同時にフランス皇帝の方を感慫に眺めた。

「私は待つてゐるのでございます、陛下。」と、クツウゾフは恭々しく頭を下げながら、答へた。

皇帝は微かに眉を寄せ、聞き取れなかつたといふやうな様子を見せながら、片耳に手を當てた。

「待つてゐるのでございます、陛下。」と、クツウゾフは繰り返した。(アンドレー公爵は、クツウゾフが待つてゐるのでございます、と言つた時、彼の上唇が不自然に顫へたのに氣がついた)「未だ全軍が揃ひませんのです、陛下。」

この答は皇帝に聞えたけれど、氣に入らぬらしかつた。彼は幾らか猫背になつた肩を挫おめ、側に立つてゐたノウォシルツォーフをチラリと見た。その眼付はクツウゾフを訴へるかのやうであつた。

「ミハイル・イラリオーノキツチ、聯隊がみな揃はなければ觀兵式を始めない、あのツァリーツイン聯兵場にゐるのではないではないか。」かう言つて皇帝は、同意を受けないまでも、せめて自分の言つてゐる事を聞いて貰ひたいと云ふやうな様子をして再びフランス皇帝をチラリと見た。フランス皇帝は、矢張り周圍を見廻してゐて、聞いてはゐ

なかつた。

「ですから未だ始めないのでございます、陛下。」クツウゾフは、自分の言葉が聞えぬやうな風をされるのを警戒でもするやうに、響きのある大聲で言つた。再び彼の顔では何ものかが顫えた。「陛下、我々は觀兵式を行つてゐるのでもツァリーツイン練兵場にゐるのでもありませんからこそ、まだ始めないので御坐います。」と、ハツキリよく分るやうに言つた。

皇帝の隨員達は、みな同時に眼と眼を見合はせた。どの顔にも、不平と非難とが表はれてゐた。「いくら彼が元老であるにしても、あんな言葉使をすべきではない」と、大勢の顔が言つてゐた。

皇帝は、ヂツと注意深くクツウゾフの眼を見詰めながら、クツウゾフが未だ何か言ひはしないかと待つてゐた。が、クツウゾフは亦クツウゾフで、恭しく頭を垂れながら待つてゐるやうであつた。沈黙が一分間程つゞいた。

「併し、陛下の御命令でございますなら、」と、クツウゾフは頭をあげ、不問ぶもんな文句なしに盲従する將軍の語調に變へて言つた。

クツウゾフは手綱をひき、向うの方へ行つて、隊の司令將校ミロラドキツチを招き、進軍の命令を與へた。

軍は、再び行進し初めた。ノウゴロッド聯隊の二個大隊と、アプシエロン聯隊の一個大隊とが皇帝の前を通つた。

アプシエロンの大隊が、そこを通つて行く時、外套を着ないで、軍服に勳章を飾り、大きな羽根のついてゐる何時も戦場につけてゐた帽子を斜めに冠つた、赤ら顔のミロラドキツチは、眞つ先に立つて驅けてゐた、そして勇ましく敬禮しながら、皇帝の前で馬を止めた。

「將軍、成功を祈るぞ。」と、皇帝は彼に言つた。

「Ma foi sire ! nous ferons ce que qui sera dans notre possibilité. (誓つて、陛下、私共の力に出来ませだけの事は致します。)」と、彼は快活に答へた。が、その下手なフランス語の語調のために、皇帝の隨員連中に妙からず皮肉な微笑を起させた。

ミロラドキツチは、急に馬をぐるりと廻して、皇帝の後に止つた。皇帝の面前だといふので感激したアブシエロ兵等は、勇ましい元氣のいゝ歩調を取りながら、兩皇帝と、その隨員達の前を通つて行つた。

「諸君！」と、ミロラドキツチは聲高い、自信の籠つた、快活な聲で叫んだ。彼は砲聲や、戦闘の豫期や、兩皇帝の前を元氣よく通過してゐる勇敢なアブシエロン兵——スウォロフと一緒に戦つた戦友達の態度などに感激させられて皇帝の前にゐることさへ忘れてゐた。

「諸君！諸君はこんな村を初めて占領するのではないのだぞ！」と、彼は叫んだ。

「全力を盡します。」と、兵卒達は一緒に叫んだ。この思ひ掛けない叫び聲の爲めに皇帝の馬はたじ／＼とした。ロシアでの觀兵式の時や、此處のアウトレルリツツの戦場などで、幾度か皇帝を乗せた此馬は皇帝の左足で無暗に蹴られるのを堪へながら、この乗手を乗せて、砲火の音も、自分の隣にゐるフランス皇帝の黒馬も、又自分が乗せてゐる人がその日言つたり、考へたり、感じたりしたことも、何を意味してゐるか云ふことは知らずに、丁度マルソーの野に出た時と同じやうに、砲聲に耳を聳立てゝゐた。

皇帝は勇ましいアブシエロン兵を指しながら、笑顔で朝臣の一人を顧みて、何やら言つた。

## 十六

クツウゾフは、副官達を伴ひ、銃騎兵の後から並足で蹤いて行つた。

隊の後尾について半哩ほど進んでから彼は、道が二股に分れる處にある一軒の空家(多分以前は料理屋であつたらしい)の前に止つた。道は兩方とも下り坂で、軍隊は兩方の道を進みつゝあつた。

霧は散りかけてゐた。判然とは分らないが、二露里も距てゐると思はれる真正面の高地に、もう敵の軍隊が見えてゐた。左手の低地には、射撃の音がます／＼ハッキリ聞え出した。クツウゾフは、アウトリアの將官と、會話をしながら立ち止つた、その少し後に立つてゐたアンドレー公爵は、二人を見つめてゐたが、望遠鏡を借りやうと思つて、一人の副官の方へ振り向いた。

「や、あれは！」と、その副官は、遠くの軍隊を見ないで、直ぐ前の丘を見下しながら言つた。「あれはフランス軍です！」

二人の將軍と副官とは、望遠鏡を奪取り合ふやうにして交る／＼覗き初めた。忽ち皆なの顔色は變つて、恐怖の色を表はした。フランス軍は、二露里も彼方にゐるのだと想像してゐたのに、不意に味方の前に現はれたのである。

「あれは敵かねえ？……いや……さうだよ、見給へ、敵だ……慥かにさうだ……一體どうしたのだらう？」かう言ふ大勢の聲が聞えた。



アンドレー公爵は、フランスの密集隊が、丁度クツウゾフの立つてゐる處から五百歩とは離れてゐないアブシェ  
ロン聯隊を目覚めて、右手の低地を進んで来るのを肉眼で見た。

「さあ、いよいよ危急な瞬間が近づいて来た！ 俺の仕事が来たのだ。」と、アンドレー公爵は考へた。そして馬を鞭  
打つて、クツウゾフの傍へ乗りつけた。

「閣下、アブシェロン聯隊を止めなければなりませんまい。」と、彼は叫んだ。が、その瞬間あらゆるものは煙に包まれ、  
近くには砲聲が聞え出した。アンドレー公爵から二歩隔つた處で、心から恐怖に襲はれた聲が「おうい、諸君、もう  
駄目だぞ！」と、叫んだ。この聲は號令のやうであつた。この聲を聞くと皆な雪崩を打つて、逃げ出した。

刻々に大きくなりつゝあつた群集は、つい五分間前、二皇帝の傍を通り過ぎたあの場所へと、混亂して駆け戻つた。  
この群集を押し止める事は困難であつたばかりでなく、彼等と共に自分も退却しないやうにすることさへ不可能であ  
つた。バルコンスキイは唯群集に取り残されまいと務めてゐるだけで、自分の前に起てゐることを知ることも出来ず  
途方に暮れて周囲を見廻はしてゐた。全然その人とは思へぬほど激昂して眞赤な顔をしたネスギーツキイは、クツウ  
ゾフに向つて、閣下は直ぐ退却なさらないければ捕虜にされるにきまつてゐますと怒鳴つてゐた。クツウゾフは以前の  
場所に立つたまゝ、何んとも答へずにハンカチーフを取り出した、彼の頬からは血が流れてゐた。アンドレー公爵は人  
押し分けて辛つとクツウゾフの傍へ行つた。

「御負傷なすつたのですか？」と、アンドレー公爵は下顎の震へるのを辛つと制へながら訊いた。

「傷は此處ではない、ほれ、彼處だ！」クツウゾフは傷づつた頬にハンカチーフを押し付けながら、逃げ出して行  
く兵士達を指して言つた。

「奴等を止める！」と、彼は叫んだ。それと同時に、到底止める事は出来ないといふことがよく解つたものか、馬に  
鞭打つて、右手の方へと駆けて行つた。

と、更に溢れ出した逃走者の群は彼を巻き込んで、後に引き戻してしまつた。

逃げて行く兵士達がどのくらい密集してゐたかは一度その群集の眞中に入ると、抜け出す事が困難であつたことで  
も分る。或者は「行け！ 何を愚圖々々してゐるんだ？」と、叫んでゐた。或者は振り返つて、空中に發砲した。又或  
者はクツウゾフが乗つてゐる馬を叩いてゐた。非常な努力をして群衆の流れから左側に切り抜けたクツウゾフは、半數  
以上減つた幕僚達と一緒に、近くに聞える砲聲の方へと馬を驅つた。アンドレー公爵は、クツウゾフから離れまいと  
して、逃走者の群集からぬけ出ると、丘の中腹の煙の中で發砲してゐるロシアの砲兵の一個中隊と、其方に向つて突  
進してゐるフランス兵を見た。その少し上には、ロシアの歩兵が、砲兵中隊を掩護するために前進しなければ、  
又逃げて行く連中と同じ方向に退却もしないで突つ立つてゐた。一人の騎馬の將軍が、その歩兵隊から離れて、クツ  
ウゾフの方へ駆けて来た。クツウゾフの幕僚の中で残つてゐるのはたつた四人に過ぎなかつた。みんな眞青な顔をし  
て、黙つてお互ひに顔を見合つてゐた。

「彼奴等を止める！」と、クツウゾフは、逃げて行く者達を指しながら、聯隊長に向つて、喘ぎ／＼言つた。が、そ  
の瞬間、さながらその言葉に對する雷でいもあるかのやうに、小銃の彈丸が小鳥の群のやうに、シュツ／＼と云ふ音  
をたてながら、聯隊とクツウゾフの幕僚たちとの頭上へ飛んで来た。

フランス軍は砲兵中隊を攻撃してゐた。が、クツウゾフを見付けると、彼を狙撃し出した。この一齊射撃を受ける  
と同時に、聯隊長は自分の片脚を損んだ。數名の兵士がバタ／＼と倒れた。旗を捧げて立つてゐた二等中尉も、その

旗を手から落した。旗はよろ／＼として、側にゐた兵卒共の銃に支へられ、そして倒れた。兵卒達は指揮なしに發射し出した。

「あゝッ！」と、クツクツは絶望の表情を浮かべながら唸つて、周囲を見まはした。

「バルコンスキイ」と、彼は囁いた。が、其聲は自分の老年の肺甲斐なきを意識した爲めに震えてゐた。「バルコンスキイ」と彼は撃破された大隊と敵軍とを指しながら囁いた。「この有様は何たる事だ？」

併し、此言葉の終らぬうちに、アンドレー公爵は耻辱と無念との涙が喉元に込みあげて来るのを感じながら、馬から飛び下りて、旗の方へ駆けて行つた。

「おい、みんな進め」と、彼は子供のやうな金切聲で叫んだ。

「到頭、時が来たんだ！」と、アンドレー公爵は、旗竿をひつ掴み、まさしく彼を狙つて發射されてゐる銃丸の唸り聲を愉快さうに聞きながら考へた。四五人の兵卒が倒れた。

「Hurrah! ウラア！」と、アンドレー公爵は叫んだ。そして重い旗を両手で、やつと捧げながら、自分の後から大隊全部が走つて来るに違いないと確信して突進した。

事實、彼が一人で走つたのは僅か四五歩に過ぎなかつた。一人の兵卒が走り出すとまた一人走つた、そして全大隊が「Hurrah! ウラア！」の叫聲を揚げながら、前進して、アンドレー公爵の後を追ふた。大隊の一下士官はアンドレー公爵に駆け寄つて、重いために公爵の手中に搖ら／＼してゐる軍旗を取つた。が、下士官は直ぐ殺された。アンドレー公爵は又もや軍旗を取り、それを打ち振りながら、大隊を卒んで突進した。前面に彼は味方の砲兵を見た。その中の或者は戦つてゐた、或者は砲を棄て、彼の方へ驅けてゐた。それから彼はフランスの歩兵をも見た。彼等は我砲

兵の馬を捉へて、砲を向け直してゐた。アンドレー公爵と大隊とは最うその砲から二十歩の内にあつた。彼は絶えず頭の上をヒュー／＼飛んで行く銃丸の音を聞いた。自分の右でも左でも、絶えず兵卒達が呻いてはばたり／＼倒れたが、彼はその兵卒達を見なかつた。彼の眼は、自分の前の——砲兵中隊の——光景だけを見詰めてゐた。彼は今、頭の横つちよにひしやげた帽子を被つてゐる赤髮の一砲兵が、フランス兵の引奪らうとする布箒を、奪はれまいとして引張り返してゐる姿をはつきりと見る事が出来た。アンドレー公爵は、自分等が何をしてゐるか分らないらしい、この二人の顔の狂亂し、同時に激昂した表情を明らかにすることが出来た。

「奴等は何をしてゐるんだらう？」と、二人を見詰めたがらアンドレー公爵は考へた。

「あの赤髮の砲兵は、武器を失して了つてゐるのに何故逃げないのだらう？ フランス兵は何故彼を突殺さないのだらう？ あの砲兵には逃げる隙がないのだ。フランス兵が銃に氣がついて、彼を突き殺すに違ひない。」

實際、もう一人のフランス兵が、銃を振りかざして、二人の鬭争者の方へ驅けて行つた。今自分が何に遭遇するかと云ふことを矢張り知らずに、勇ましく布箒を引張り返してゐる赤髮の砲兵の運命は、最早や決つて了つた。が、アンドレー公爵は之れが何んな終りを告げたか、見なかつた。彼は直ぐ傍にゐた兵士の中の誰かが、固い棒片で、自分の頭を力委せに撲ちのめしたやうな氣がした。さう痛くはなかつた、が、この痛みが彼の注意を掻き亂して、今まで見てゐた光景を見られなくしたことが何より不快であつた。

「何うしたんだらう？ 俺は倒れるのか知ら？ 俺の足はきかなくなつてきた。」と、彼は考へた、と、仰向にばかりと倒れた。彼は、フランス兵達とあの砲兵との争ひがどんな風に終つたかを見たく思ひ、赤毛の砲兵が殺されたか殺されなかつたか、砲は奪はれたか助かつたか知りたく思つたので、眼を開いたが、彼には何にも見えなかつた。彼の

上にはもう空の外、高い空、晴れ渡つてはゐないが、限りなく高い空、灰色の雲の静かに這つてゐる空の外何にもなかつた。「何といふ静かな、平和な、壯麗なことだろう。俺が今迄願つてゐたのだとは思はれない。」と、アンドレー公爵は考へた。「俺達は驅けたり、喚いたり、戦つたりしてゐたとは思はれない。フランス兵と砲兵とが憎えた、狂氣ぢみた顔付をして、布帯を引張り合つてゐたとは思はれない。この高い無際限の空を雲が這つてゐやうとは思はれない。俺はどうして前にこの高い空を見なかつたのだらう？　だが遂にそれを見出したといふ事は何といふ幸福だらうさうだ！　あの無限の天空を除いては、すべてが空虚だ、すべてが偽蹟だ。あの空の外何にもない、何にもない。だが夫れすら無いのだ。平和と静寂との外は何にもないのだ。あゝ神よ！……」

## 十七

バグラチオンの右翼では、九時になつてもまだ戦闘が開始されてゐなかつた。戦闘を開始せよと云ふドルゴルフの要求を承諾することを望まず、反つて責任を逃れたいと思つてゐる、バグラチオン公爵は、總司令官の處へ使者を遣つて、その命令を訊くやうにとドルゴルフに申し出た。左翼と右翼との間の距離は殆んど八哩もあるから、若し使者が殺されないにしても、(大抵殺されるに決つてゐるが)又、總司令官を見つけ得るにしても、(これは甚だ困難な事だ)使者が日暮れ前に歸つて來る事は六ヶ敷いと云ふことを、バグラチオンは知つてゐたのである。

バグラチオンは、その大きな、表情のない、懶げな眼で、幕僚達を見まはすと、昂奮と希望との爲め知らず識らず

茫然としてゐるラストフの子供らしい顔が、第一番に眼に留つた。で、ラストフに使者を命じた。

「ですが閣下、若し總司令官より先に陛下にお眼にかゝりましたら？」と、ラストフは帽子の庇に手をあげながら言つた。

「陛下に申しあげて宜しい。」と、ドルゴルフは急いでバグラチオンを遮りながら言つた。

ラストフは歩哨線から歸つて朝になるまで幾時間か眠つて置いたので、自分が快活に、勇敢に、敏捷になつてゐることを感じ、舉動も軽快になり、自分の幸運に對する信念もあり、そして何事も容易く、愉快に遣つて退けられさうな氣持ちになつてゐた。

彼の總ての希望は、その朝充たされたのである。今や全般的の決戦が始まるうとしてゐて、彼はそれに參加してゐる。それ所ではない、彼は最も勇敢な將軍の幕僚となつてゐる。尙その上、彼はクツウソフの處へ使者として行くのだ。ひよつとすれば、皇帝の所に行くかも知れない。

晴やかな朝であつた。ラストフが乗つてゐる馬も元氣がよかつた。彼の心は歡喜と幸福よろこびとに充ちてゐた。命令を受け取ると、彼は馬に拍車を當て、前線に沿うて駈け出した。最初は、未だ戦闘を開始せず、ヂツと立つてゐるバグラチオン軍に沿うて進んで行つたが、やがてウリーロフの騎兵隊が占めてゐる地域に這入つた。此處へ來ると進軍と戦闘準備の兆候とを認めた。ウリーロフ騎兵隊を通り過ぎると、もう前方に當つて、小銃と大砲とを發射する音がはつきり聞えてきた。砲聲はますます烈ましくなつた。

爽やかな朝の空氣の中には、もう以前のやうに、不規則な合間を置いて二發、若くは三發づゝの銃聲が聞え、つゞいて一發か二發かの砲聲が鳴り渡るのではなかつた。ブラッツェンの前方にある丘の斜面には、一齊射撃の音が聞え

た。その一齊射撃の音も頻繁に發射される砲聲の爲めに度々掻き消された。幾つかの砲聲は、もう一つ一つ聞き分けることが出来ず、一つの大きな吼聲に融け合つてゐた。

小銃の煙が、まるで追驅つこでもしてゐるやうに丘の斜面を走つてゐるのや、大砲の煙が、輪形になつたり、亂れて行つたり、一つに溶け合つたりするのなども見えた。烟の間に閃めく銃剣によつて、動いてゐる歩兵の集團や、緑色の彈藥車をひいてゐる細い筋のやうな砲兵隊なども見えた。

丘の上でラストフは暫らく馬を止めて、戦闘の光景を識別しやうとした。が、幾ら注意力を引察めても、眼にうつる光景を識別し、了解する事は出来なかつた。そこでは人間のやうな者が烟の中を動いてゐた、布のやうな軍隊が進んだり退いたりしてゐた。併し、何のためのか？ 何者なのか？ 何處へ行くのか？ 識別する事は出来なかつた。かうした光景や、かうした響きは、ラストフの心に、一種の沮喪した臆病の感じを起さなかつたばかりか、反つて元氣と決心を増させた。

「さア、も一つ、も一つ撃て見ろ！」と、彼は思ひながら再び砲聲の方へ向き、戦線に沿うて馬を飛ばし、既に戦闘についてゐる軍隊の方面へと、ます／＼進んで行つた。

「彼處はどんなになつてゐるか俺には解らない、併し好いには違ひない！」と、ラストフは考へた。

何兵種かのアウストリア兵の處を通り越してから、ラストフは其先の戦線の一部分が（それは近衛兵であつた）既に戦闘を始めてゐた事を知つた。

「ます／＼面白い！ 傍へ行つて見てやろう。」と、彼は思つた。

彼は殆んど前線に沿うて馬を驅つてゐた。騎兵の一隊が彼の方へ駆けてきた。それは列を亂して突撃から歸つて來

る味方の槍騎兵の一團であつた。その側を通り過ぎた時、ラストフは、その中の一人が血みどろになつてゐるのに氣が付かずにはゐられなかつた、が、彼は猶ほも駈けて行つた。

「あれは俺の關係した事じやないんだ。」と、彼は思つた。

それから未だ數百歩とは進まないうちに、眩しいやうな白の軍服を着て、黒馬に乗つた騎兵の大集團が、彼の左手から廣い野原一ばいに現はれ、彼の行手を遮らうとするやうに、ラストフの方へ眞直ぐに早足で進んできた。ラストフは、その騎兵の通り道を驅け抜けやうとして馬を全速力で走らせた。若し騎兵隊が、何時までも同じ速度で走つてゐたのなら、ラストフはそれを突切る事か出来たに違ひない。が、騎兵隊は次第々々に速度を早め、幾頭かの馬はもう駈足になつてゐた。ラストフには、馬の蹄言や、武器の響などが漸次高く聞えて來た。彼等の馬、彼等の姿、彼等の顔さへも、段々はつきりと見えて來た。これはフランス騎兵に對して突撃してゆく味方の近衛騎兵であつた。フランスの騎兵もそれに向つて進撃してゐた。

近衛騎兵は、まだ馬を控へながら驅けてゐた。ラストフは、もう彼等の顔を見た。一人の將校が、駿馬を全速力で走らせながら「進め！ 進め！」と、指揮するの聞もいた。ラストフは、踏み潰されるか、或はフランス軍に對する突撃の中に巻き込まれはしないかと危ぶみながら、戦線に添ふて出来るだけ馬を駈けさせた。が、矢張り駈けぬけることは出来なかつた。

騎兵隊の列の一番端れにゐた痘面の鬪抜けて大きな男は、ラストフと何うしても衝突しないわけには行かないことを見て取ると憎さげに眉を擡めた。若しラストフがこの騎兵の馬の眼の前で鞭を振ることに氣がつかなくなつたら、この騎兵は屹度ラストフと乗馬のペドゥインとを一緒に突つ轉ばして了つたに違ひない。ハラストフは、これ等の大きな

男や大きな馬に較べて見て、自分が如何にも小さく、如何にも弱いやうに思つたのであつた。(五ウエルシヨークもある、がつしりした黒馬は、耳を寝せて、急に脇の方へ反れた。が、痘面の乗手は、馬の横腹へ烈しく柏車を入れて乗り静めたり馬は尾を打ち振り、首を引延しながら、前よりも一層速く駆けて行つた。その騎兵達が、やつとラストフの傍を過ぎると、ラストフは「Hurrah! ユラー!」と云ふ歡呼の聲を聞いた。振り返ると、先頭の列が、どうやらフランス兵らしい、赤い肩章をつけた、見馴れぬ騎兵と既に入り亂れてゐるのを見た。が、夫れ切り何にも見ることは出来なかつた。その後、直ぐ何處からか大砲をうち始めたので、周囲は一面に煙に蔽はれてしまつたからである。

自分の側を通り越して行つた近衛騎兵が、砲煙の中に見えなくなつた瞬間、ラストフはその後から自分も追ひ駆けて行つたものが、それとも自分の行くべき處へ行つたものか、と思ひ惑つた。これは、フランス兵でさへ讚歎を惜まなかつた近衛騎兵の天晴れな突貫であつた。あの體の大きな立派な人達の中で、あの千留もするやうな馬に跨つて自分の側を駆けて行つた天晴な華々しい青年や、將校や下士官達全體の中で、突撃の後生き残つたものは僅か十八人に過ぎなかつたといふ事を後になつて聞いた時、ラストフは悚然とした。

「何も彼等を羨む必要はない、俺の幸運が奪はれたといふ譯ではないんだ、俺は、間もなく皇帝にお目にかゝれるかも知れない!」と、ラストフは考へて又馬を走らせた行つた。

近衛歩兵のゐる處へ着いた時、彼は、砲弾の響きからよりも寧ろ、兵卒達の顔に浮んでゐる不安な色や、將校達の顔に現はれてゐる不自然な、いかにも軍人式の嚴肅な表情から、彼等の頭上や周圍に砲弾が飛んでゐるのだといふ事に氣がついた。

近衛歩兵聯隊の中の、ある列の後を通つて行くと、ラストフは自分の名を叫んでゐる聲を聞いた。

「ラストフ!」

「えゝ!」と、ラストフはバリーヌには氣がつかずに答へた。

「素晴らしいことだつたよ、僕等は前線に出てたんだぜ。僕等の聯隊は突撃をやつたんだ!」と、バリーヌは、初めて砲火の下に立つた若者に見られる、幸福さうな微笑を浮かべながら言つた。

ラストフは馬を止めた。

「そりやよかつたね!」と、彼は言つたので、何うだつた?

「やつつけて遣つたさ!」と、バリーヌは元氣よく言つた。彼はお饅舌になつてゐた。君は想像することが出来るかね?」

バリーヌは、近衛兵が陣地を敷いた様子や、前方にゐた軍隊を見てアウストリア軍だと思つたが、突然その隊から砲弾を浴びせかけられたので、急に自分等が前線にゐる事に氣がつき、全く思ひ掛けなく戦闘を開始した模様などを語り出した。ラストフは、バリーヌの話の皆な聞かずに馬を進め始めた。

「君は何處へ行くんだ?」と、バリーヌは尋ねた。

「任務を負ひて陛下の許へ。」

「こゝにお出でになるよ!」と、バリーヌは言つた、彼はラストフが探してゐるのは、陛下ではなくて大公だと思つたのである。

バリーヌは大公を指した。

大公は、ヘルメット帽をかぶり、近衛騎兵の白い鹿革の軍服を纏ひ、二人から百歩許りの彼方に立つて、肩を怒ら

せ、眉を擧めて、白い、蒼白いアウストリアの將校に何か怒鳴つてゐた。

「何だい、あれは太公ぢやないか。僕は總司令官か皇帝に會はなければならぬんだ。」と、ラストフは言つて馬の手綱を引いた。

「伯爵、伯爵！」と、バリースのやうに活氣づいてゐるベルグが彼方側から驅けて來ながら、叫んだ。「伯爵、僕は右の手に負傷しました。(と、ハンカチーフで縛つた血のにじんでゐる手を差し出して言つた、それでも僕は前線に踏み留つてゐました。伯爵、私は左の手でサーベルを握つてゐました。伯爵、私の一家、フォン・ベルグは代々騎士なんですすからねえ。」

ベルグは、もつと何か言つてゐたが、ラストフは彼の言つてゐることを聞かずに猶ほ馬を進めた。

近衛兵の所と、誰もゐない所とを通り過ぎてからラストフは、近衛騎兵の突撃に出會したやうに、また第一線に出會ふといけなかつたので、豫備隊の列に沿つて行つた。そして最も猛烈に銃聲と砲聲の聞える所をぐるりと迂迴つた。と、不意に彼は自分の前方で、味方の背後なつてゐる、敵のゐようなどとは少しも思ひがけなかつた處に、手近かな銃聲を聞いた。

「あれは何だらう？」と、ラストフは考へた。「味方の背後に敵がゐるのだらうか？ そんな事はない筈だ。」と、ラストフは思つた、が、彼は自分の身や、戦全體の結果やを思つて恐怖の念に襲はれた。「が、たとへ何うならうとも、と、彼は考へた。「今はもう迂迴することも出来ない。此處で總司令官を探すが俺の義務なのだ。そして、もし萬事休したら、みんなと一緒に死ぬのが俺の義務なのだ。」

不意にラストフの上に襲ひかゝつた不吉の豫覺は、各種の軍隊が集合してゐるブラツツェン村の後方の地域に入つ

て行けば行く程ますます強くなつた。

「どう云ふ譯なんだ？ 何んなのだ？ 誰に向つて射つてゐるんだ？ 誰が射つてゐるんだ？」ラストフは、混亂して自分の行手を駈け抜けて行くアウストリアとロシアの兵卒達に出會した時から訊いた。

「何うしたんだか解りません！ 皆殺しちやつたんです！ 何もかももう滅茶だ！」ラストフと同様に何事が起つたのか、はつきり知らない逃走者の群は、ロシア語やドイツ語やチェー語などで彼に答へた。

「ドイツの奴等を打つ殺せ！」と、一人が叫んだ。

「奴等を地獄へ追ひこくれ——謀反人奴等。」

「Zum Henker diese Russen(なんなロシア人共は鬼の處へ行け。)」と、一人のドイツ人が叫んだ。

幾人かの負傷者が道を歩いてゐた。叫喚、罵詈、呻吟は一つの大きな唸りに融け合ひ、銃聲は静まつてゐた。ラストフが後で知つた處によると、ロシア兵とアウストリア兵とが同士打をやつたのであつた。

「あゝ、何んと云ふ事だらう？」と、ラストフは考へた。「しかも何時皇帝が御覽になるかも知れない此様な處で……いや、之は或る悪者共の仕事に過ぎないんだ。直き靜まるだらう、眞實の事ぢやないんだ。こんな事あり得よう筈がないのだ。」と、彼は思つた。「唯急いで、急いで此奴等を通り越してしまひさへすればいゝ！」

ラストフは、味方が敗北し、潰走したといふことを考へることは出来なかつた。彼は總司令官を探せと命ぜられたブラツツェンの丘に、フランスの大砲と軍隊とをハツキリと見ながら、それを信ずる事が出来なかつた、また信じたくもなかつた。

## 十八

ラストフはブラツツエン村の附近でクツウゾフと皇帝とを探せと命ぜられてゐた。併し、二人が其處にゐなかつたばかりでなく、司令官は一人もゐなかつた。そして混乱した各種の兵士が群つてゐた。彼は、早くこの群集を通り抜けてやうとして、もう疲れ切つてゐる馬を急ぎ立てた。が、進めば進む程、益々群集の混乱は烈しくなるのであつた。彼が乗りつけた大きな街道には、馬車や、あらゆる種類の車や、あらゆる種類のアウストリア兵とロシア兵の負傷したのや、負傷しないのなどが群がつてゐた。あらゆるものは、ブラツツエンの高地に敷かれたフランスの砲兵陣地から飛んで来る砲弾の蔭鬱な轟音の下で、大叫喚をあげ、大混雑をやつてゐるのであつた。

「皇帝は何處にお居てになる？ クツウゾフは何處にゐられる？」ラストフは呼び止めることの出来た者には一人々々から訊いて見た、が、誰からも答へは得られなかつた。

到頭一人の兵卒の襟を掴んで、無理遣りに返事をさせた。

「あゝ！ 兄弟！ もう、みんな疾くの昔に逃げてつて了りました！」と、兵卒は、何う云ふ譯か笑ひながら、身を振りもぎるやうにしてラストフに言つた。

酔つてゐるらしいその兵卒を放してラストフは、今度は身分のある者の従卒か調馬師と思はれる男の馬を止めて、其男に根掘り葉掘り訊き始めた。従卒は、一時間ほど前に皇帝を一臺の馬車に乗せて此道を全速力で運んで行つた事

と、皇帝が重傷を負つてゐた事とをラストフに告げた。

「そんな筈はない。」と、ラストフは言つた、

「それは多分他の人だらう。」

「私は自分で見たんです。」と、従卒は、自信のある笑ひを見せながら言つた。「もう皇帝を見覚えてたつて好い時分です。ペテルブルグで何度となく見た通りな皇帝を私は見たんです。若い顔をして、眞蒼な顔をして、馬車に坐つてゐなさいました。四頭の黒馬を驅けさせて、私達の側を飛んで行つた勢つてものは大したものでしたよ！ 私も皇帝の馬や、イリヤ・イワノキツチを知つてもいゝ時分です。イリヤ・イワノキツチと來たら、皇帝の外の人には御者はしないんですからね！」

ラストフは、彼の馬を放して、尙も進んで行かうとした。と、側を通りかゝつた一人の負傷した將校が彼に聲をかけた。「君は誰れを探してゐるんです？」と、將校は尋ねた。「總司令官ですか？ あゝ、總司令官なら、僕等の聯隊の前で、砲弾に胸を撃たれて戦死されました。」

「戦死ぢやない——負傷だ。」と、もう一人の將校が言ひ直した。

「誰がです？ クツウゾフが？」と、ラストフは訊いた。

「クツウゾフぢやない、何とかいふ名だつけ——だが、何だつて同じ事です、生き残つてゐる者は幾人もないんですからね。彼方に行つて御覧なさい、彼方のあの村へ。司令將校はみんな集つてゐます。」と、その將校は、ゴスチエラデツク村を指しながら言つた。そして行つて了つた。

自分が今、誰の處へ、何の目的で行きつつあるかを知らずにラストフは、並足で進んで行つた。

皇帝は負傷し、戦争は敗れた。が今、それを信ずることは出来なかつた。ラストフは、教へられた方角へ進んで行つた。遠くの方には塔と會堂とが見えた。何處へ急いで行くのだ？ たとひ皇帝やクツウゾフが生きてゐて、負傷してゐなかつたとした處で、今となつては、何を彼等に言つたらいいのだらう？

「この道をお出てなさい、そつちに行けば直ぐ殺されてしまひますよ！」と、一人の兵卒がラストフに向つて叫んだ。

「そつちに行けば殺されてしまひますよ。」

「おい、何て馬鹿なことを言ふんだい！」と、もう一人の兵卒が言つた。「あの人は何處へ行くのだ？ そつちが一番近いぜ。」

ラストフは、一寸思案したが、それを行けば殺されると言はれ方へと進んで行つた。

「もう、何うなつたつて關はない。若し陛下が御負傷なすつたのなら、俺などが何うして自分を守つてゐられやう。」と、彼は考へた。彼は、ブラツツェンから逃げた者が一番多く殺された地域へと這入つて行つた。フランス兵はまだその地域を占領してゐなかつた。が、無事でゐるロシア兵や、負傷したロシア兵達は、もう疾くに其所を放棄してゐた。野原には、よく手入れのよいいた耕地の中にある罅溜のやうに、三エーカー毎に十人から十五人位の戦死者や負傷者が横倒つてゐた。負傷者達は、二三人づゝ一緒になつて這ひ廻はつてゐた。時としてラストフには慈とらしく思はれるやうな不快な負傷者達の叫聲や呻聲も聞えてゐた。ラストフは、この苦しんでゐる人達を見まいとして馬を駆けさせた。彼は、恐ろしくなつた。が、自分の生命を失ふことを恐れたのではなく、自分に必要な勇氣を失ふことを恐れたのであつた。彼は自分の勇氣が、この不幸な人達を見ると挫けてしまふことを知つてゐたのである。フランス軍は、戦死者と負傷者とが撒き散されてゐる其野原に向つて發砲するのを止めてゐた。其處にはもう、生きてゐる者

は一人もゐなかつたからであつた。ところが、一人の副官が其野原を馬で驅けて行くのを見ると、砲を其方へ向けて、幾發かの砲弾を浴びせかけた。びゆう／＼といふ恐ろしい響から受ける感じと、周圍に横倒つてゐる多くの死體とは、一つの印象に溶け合つて、ラストフに恐怖と自己に對する憐みとを覺えさせた。彼は、自分の母親の最近の手紙のことを思ひ出した。「若しお母さんが、今、この野原で俺が大砲に狙撃されてゐる所を見たら、」と、ラストフは考へた。「お母さんは何んな感じに打たれるだらう！」

ゴステエラデツク村には、戰場から歸つて來たロシアの軍隊がゐた。多少混亂してはゐたが、それでも餘程規律が整つてゐた。此處までは、最うフランス軍の砲弾は達かなかつた。砲聲も、遠くの夫れのやうに思はれた。此處では、最う皆、敗戦した事を明瞭と知つたり、語り合つたりした。誰に訊ねても、皇帝が何處にゐるか、クツウゾフが何處にゐるか、ラストフに教へる事の出來る者は一人もなかつた。或者は、皇帝が負傷したと云ふ風説はまさしく適中つてゐると言ひ、他の者は又、そんな事はないと言つて、此間違つた風説が廣まつたのは、皇帝の他の隨員達と一緒に戰場に出てゐた内大臣トルストイ伯が、恐ろしさに眞蒼になり、皇帝の馬車で戰場から逃げ歸つたと云ふ事實に基くのであると説明した。一人の將校は、ラストフに向ひ、村の向ふの左手の方で、大本營の誰れかに會つたと話したのでラストフは、今はもう誰れに會へるといふ望みもなかつたが、唯自分で自分の良心の潔白なことを認めるために、其處へ向つて行つた。二哩ばかり進んで、最後のロシア軍を通り越すと、ラストフは濛濛と圍まれた或る菜園の近くに、二人の騎馬の人が、濛の方を向いて立つてゐるのを見た。帽子に白い羽根をつけてゐる一人は、ラストフには何うやら見馴れた人のやうに思はれた。もう一人の、立派な栗毛の馬に跨つた見知らぬ人は、(ラストフにはその馬は見覺があるやうに思はれた。)濛の方へ進み寄り、馬に拍車を當て、手綱を緩めたかと思ふと、軽く菜園の濛を跳び越えた。



土が、馬の後足のために土手からぼろ／＼と崩れただけであつたが、その人は急に馬を廻してまた濠を跳び越え、明かに自分と同じやうにお跳びなさいと勧めるらしく、白い羽根をつけた騎馬の人に恭しく話しかけた。ラストフに見覺のある姿をしてゐ、何故かラストフの注意を知らず識らず惹きつける方の乗手は、頭と手とて拒絶の身振りをした。その身振りで、ラストフは直ぐ、自分が痛み悲しみ、且つ崇拜してゐる陛下であることを知つた。

「併し斯んなガランとした野原の真中に、たつた一人で陛下がゐらつしやる筈はない。」と、ラストフは考へた。その瞬間、アレキサンドルは頭を振り向けたので、ラストフは自分の記憶の中に非常に生々しく刻み込まれてゐる、懐しい顔を見た。皇帝は、眞青な顔をしてゐた。その顔はこけ、眼は凹んでゐたが、併しその顔の美しさと優しさとは、一層加つてゐた。ラストフは、皇帝が負傷したと云ふ風説の嘘報であつたことを確かに知つたので幸福になつた。自分が皇帝を見てゐるといふ事が幸福であつた。彼は直接に皇帝の前へ行つて、ドルゴロフから命ぜられた使命を申し上げる事が出来るし、申し上げなければならぬのだといふ事を知つた。

併し、丁度戀してゐる青年が、待ち望んでゐた瞬間に出會して、「彼女」とたつた二人きりになつた時、震へたり、恍惚となつたりして、毎晩空想してゐたことを口に出す事が出来ず、援助か、或は延期と逃避の方然かを求めながら、おどおどして四邊を見まはしてゐるやうに、ラストフは、今自分が世の何事よりも、より以上に望んでゐたものに到達してゐるのに、何うして皇帝に近づいたら好いのか解らなかつた。そして何故さうするのが不適當であり、不都合であり、爲すべからざる事であるかといふ数知れぬ理由が心に這入つてきた。

「何だ！ 俺は陛下がひとりぼつちで、落膽してらつしやる處に附け込んでゆくのを喜んでゐるやうだ。こんな悲しみの瞬間に見知らぬ顔を御覧になるのは、陛下にとつて、御不快であり、御心苦しいことかも知れない。のみな

らず、ちよつと陛下を見たゞけて心臓が動悸々々して、口まで躍り上つて来るやうな氣がしてゐる今、何を申し上げる事が出来やう？」陛下に話しかける時の爲めに前以て想像の中で組み立てゝゐた無数の言葉は、今は一言も心に浮んで來なかつた。これ等の言葉は、大部分、全然他の場合に當つたものであつた。大部分、勝利と凱旋の時、殊に、彼が負傷して死に瀕してゐる時、皇帝が彼の雄々しい勳功を感謝し、彼が死に臨んで、行爲で證明した自分の愛を陛下に言ひ表す場合に言ふべき言葉であつた。

「それに、今は、もう午後四時だ。戦争は敗れてゐる。右翼に對する御指圖をどうして陛下に伺へやう。いや、決して俺は陛下のお側へ近寄つてはならない。陛下の御沈思を破つてはならない。陛下から御不快な眼付や、御不快な御言葉などを受けるより、寧ろ俺は千遍死んだ方が未だましだ。」と、ラストフは決心し、悲哀と絶望とを胸に抱きながら、まだ以前の通り、決心し兼ねた容子をして立つてゐる皇帝の方を絶えず振り返り／＼、其處を乗り去つた。

ラストフがこんな事を思ひ廻らしながら、悲しげに皇帝の側から乗り去つた時、フォン・トール大尉が偶然にも其所へ馬を驅つてきた。彼は、皇帝を見ると、直ぐにその側へ近づき、自分の手柄語を上申したり、皇帝が徒歩で濠を渡るのを助けたりした。皇帝は氣分が悪く、休息がしたかつたので、とある林檎の木の下に腰を下した。フォン・トールは、その側に立つてゐた。フォン・トールが長い間熱心に、皇帝に何やら話してゐる様子や、皇帝が泣いてゐるらしく、片手で眼を蔽ふて、フォン・トールの手を握られた様子などを、ラストフは遠くの方から羨しきやうに、そして悔しさうに眺めてゐた。

「あゝ、俺があゝの男の代りにゐる事が出来たのに！」と、ラストフは思つた。そして皇帝の運命に對する同情の涙をやつと仰へながら、今は何處へ、何の目的で行くのかも分らなくなり、全く絶望して乗り去つた。

彼は、自分の悲しみの原因が、自分の意氣地のないことにあるやうな氣がしたので、絶望は一層強かつた。ラストフは、皇帝の側へ行つてもよかつたのである……よかつたところではない、行かなければならなかつたのである。そして、それが皇帝に自分の熱誠を示すべき唯一の機會だつたのである。それなのに彼は、それを利用してなかつた……「俺は何をしたんだ？」と、ラストフは思つた。そして彼は馬を廻して、皇帝を見た場所へと引返した。が、濠の彼方には、もう誰もゐなかつた。唯幾つかの輻重車と馬車とが通つてゐるだけであつた。ラストフは、近くの村にクツウゾフの參謀部があると云ふことを、一人の馭者から聞いた。輻重車は其村へ行くのであつた。ラストフはその後に隨つて行つた。

ラストフの前を、クツウゾフの馭者が、馬衣を着せた幾頭かの馬をひいて行つた。馭者の後には荷馬車が行き、荷車の後には帽子を被り、短かい毛皮の外套を着た鷓足わにあしの老僕が歩いて行つた。

「タイト、ヤアい。タイト！」と、馭者が言つた。

「何んでえ？」と、老人が茫然ぼんやりして答へた。

「タイト！ Stupny molotik! (穀打ちに行きねえ！)」

「ふん、馬鹿野郎、ベツ！」と、老人は腹立たしげに唾を吐いて言つた。暫くの間黙つたまゝ歩いてゐたが、やがてまた同じ冗談が繰り返された。

午後五時頃には、戦争は各方面とも悉く敗れてしまつた。大砲が最う百門以上フランス軍の手に占められてゐた。ブルゼビーシエウスキは、その軍團と一緒に敵に降伏した。他の縱隊も大概兵員の半分を失ひ、混亂して退却し

た。ランジエロンとダフツウロフとの兩軍の中で生き残つた者達は、オーゲスト村にある池の土手や岸べんに雜然と群つてゐた。

六時頃、オーゲストの土手の邊りだけには、フランス軍が射出物凄いの砲聲がまだ聞えてゐた。フランス軍は、ブラツツエン高地の斜面に無数の砲兵を配置し、我が退却軍を砲撃してゐたのであつた。

後衛にゐたダフツウロフや、その他の人々は、大隊を集めながら、味方を追撃して来るフランス騎兵を砲撃してゐた。薄暗くなつてきた。長年の間、先の尖つた帽子を冠つてゐる水車番の老人が釣竿を持つて平和さうに坐つてゐると、その孫が、シャツの袖を捲り上げて、如露の中で慄えてゐる銀色の魚をひつくり返してゐた。オーゲストの狭い堤の上では、長年の間、粗毛ちろけの帽子を被り、青いジャケットを着たモラヴィア人が、小麥を積んだ自分の二頭曳の荷馬車に平和さうに乗つて行き、全身に粉を浴びて、眞白になつた荷馬車に乗つて歸つて行つたその堤の上——その狭い堤の上では、今や死の恐怖のために悽しい容子をした人々が、輻重車や砲車などの間や、馬の下や、車輪の間などに群つて、お互に、押し合つたり、死にさうになつたり、死にかけてゐる者を踏みつけて行つたり、五六歩行けば自分も屹度殺されるのにお互に、殺し合つたりしてゐた。

十秒毎にこの密集してゐる人達の眞中に砲弾が落ちたり、爆裂弾が破裂したりして、周囲の空氣を震動させた。そして其度毎に人々を殺し、側に立つてゐる者にバツと血汐をはねかけた。手に負傷したダラホフが、自分の中隊の（彼は最う將校になつてゐた。）兵卒十名ばかりを引き連れて歩いてゐると、馬に跨つてゐる彼の聯隊長とが、一聯隊の中で生き残つた者の代表者であつた。彼等は、群集のために押しやられて土手の入口のところに押し付けられ、四方

八方を塞がれたので立ち止つた。それは前の方で、馬が大砲の下になつたので、群集がその大砲を引つばつてゐたからであつた。一つの砲弾が彼等の後にゐた誰れかを撃ち殺した、と又一つは前に落ちて、ダラホフにさつと血を浴びせかけた。群集は絶望的に前へ進んだり、押し合つたり、衝き合つたりして、二三步進むと、また立ち止つた。

「この百歩許りの所を通り越してしまひさへすれば、確かに助かるのだが、此處に二分も立ち止つてゐて見る、屹度死ぬのだ。」と、めい／＼は考へてゐた。

群集の真中に立つてゐたダラホフは、二人の兵卒を叩き倒して堤の端まで抜け出し、池を覆ふてゐるツル／＼する氷の上へと駆け進んだ。

「此方へ曲れ！」と、彼は足の下でびり／＼と音を立てて氷の上を飛んで行きながら叫んだ。「此方へ曲れ！」と、大砲に向つて叫びつゞけた。「大丈夫だぞ……」

氷は彼を乗せてゐた、が、ぐら／＼して、びり／＼と音を發てた。大砲や群衆は愚か、彼一人だけでも瞬く間に破れて了ふのは明かであつた。人々はダラホフを見ると、岸まで押し寄せたが、まだ氷の上に足を踏み出す事を躊躇つてゐた。馬に乗り、水門の傍に立つてゐた聯隊長は、手を上げて、ダラホフに聲をかけやうと口を開いた。と、突然一發の砲弾が低く、群集の上で唸つた。群衆は皆な屈んだ。ポチャリツと水の潑ねる音がすると、將軍は馬と一緒に血の溜つてゐる中へ倒れた。が、誰も將軍を見るものもなければ、又彼を助け起さうと思ふものもなかつた。

「氷の上へ行け！ 氷の上を行け！ 進め！ 曲れ！ 聞えないのか！ 進め！」將軍が弾丸に打たれると、突然かう云ふ數知れぬ聲が聞えた。が、みんな何を叫んでゐるのか、何故叫んでゐるのか、自分でも分らなかつた。

堤の上に引きあげられた後方の一つの大砲は、氷の上に下された。兵卒の群は堤から凍つた池の面へ駆け上り出し

た。氷が先にゐる一兵士の下で罅裂くと、其兵士の片足は水の中に這入つた。彼が、それを引き抜かうとすると、今度は腰まで這入つてしまつた。其近くにゐた兵卒達は押し合ひ出した、砲車の馭者は自分の馬を止めた。が、後からは矢張り、色々な叫聲が聞えた。「氷の上へ行け、何故止つたんだ？ 進め！ 進め！」そして恐怖の叫び聲が群集中に聞えた。大砲を取りまいてゐる兵卒達は、馬に向つて手を振つたり、馬を鞭打つたりして、方向を變へて進ませやうとした。馬は岸から動き出した、と、歩兵達を持ち耐へてゐた氷は、大きな片になつて破れた。氷の上にもた四十人ばかりの者は、お互に沈め合ひながら或は前へ、或は後へ駆け出した。

砲弾は矢張り、規則正しく唸つて来て、氷や水や、殊に、堤と池と岸とを蔽ふてゐる群集の中にびしやり／＼と落ちた。

## 十九

公爵アンドレー・バルコンスキイは、ブラツツェンの丘に、手に旗竿を持つて倒れたまゝ血まみれになつて凝つと横倒つてゐた。が、自分はそのことを知らずに、静かな、物憐れな、子供らしい呻き聲を出して呻いてゐた。

晩方になると、彼はもう呻くのゝ止めて、全く静かになつた。自分の昏睡状態が何の位つゞいたのか知らなかつた。が、不意に、彼は、自分が生きてゐて、燃えるやうな、搔きむしられるやうな、頭の痛みに苦しんでゐるのを再び感じた。

「何處へ行つたらう、今まで知らずにゐて、今日初めて見たあの高い空は？」これが彼の最初の考へであつた。「それに、こんな苦しみも矢張り知らなかつた。」と、彼は思った。「さうだ、俺は今まで何も知らなかつたのだ、何も知らなかつたのだ。だが、俺は何處にゐるんだらう？」

ちつと耳を傾けると、段々近づいて来る蹄の音と、フランス語で喋つてゐる聲とが聞えた。彼は眼を見開いた。彼の上には、また例の高い空があつて、例の雲も以前より高く漂つてゐた。その雲と雲との間には青い無限が見えてゐた。蹄の音や、話聲から判断すると、自分の處へ乗りつけて来て止つた者があるやうに思はれたが、彼は頭を振向けてその者を見なかつた。

馬に乗つて来た者はナポレオンと、その二人の侍従武官であつた。ポナバルトは戦場を一巡すると、オーゲストの堤を砲撃してゐる砲兵を鼓舞するやうにと云ふ最後の命令を與へたり、戦場に殘されてゐる死傷者達を見廻つた。

「Des beaux hommes! (天晴れな者共だ!)」顔を地面に衝伏せ、もう強直つてゐる片手をぐつと衝き出し、腹匍になつて戦死してゐる黒ずんだ頭の一人のロシアの長身兵を眺めながら、ナポレオンは言つた。

「陛下、野砲彈藥を使ひ盡しました。」と、その時オーゲストを砲撃してゐた砲兵陣地から一人の副官がやつて来て言つた。

「豫備隊から運ばせるがよい。」ナポレオンはかう言つて、二二歩進みかけたが、傍らに旗を投げ出して、(旗は鹵獲物としてフランス軍に取られた。)仰向けに倒れてゐたアンドレー公爵を見ると、立ち止つた。

「Voilà, une belle mort. 立派な死方だ。」と、ナポレオンはバルコンスキイを見ながら言つた。

アンドレー公爵は、自分の事を言はれたのである事や、それを言つたのかナポレオンである事などを知つた。彼は今喋つた人が「陛下」と呼びかけられてゐるのを聞いたからである。が、その言葉を、まるで蠅がブン／＼唸るのを聞くやうに聞いた。そんな言葉に興味を持たなかつたばかりでなく、別段氣に止めやうともせず、直ぐ忘れてしまつた。彼は焼けるやうな頭の痛みを感じた。彼は血みどろになつてゐるやうな氣がした。彼は自分の上に、遠く、高く、そして永劫なる空を見た。彼は自分の傍にゐるのがナポレオン——あの英雄——である事を知つてゐたか、併しその瞬間、ナポレオンなどは、今彼の魂と、あの雲の漂つてゐる高い無窮の天空との間に起つてゐるものに較べると、小つぽけな、つまらない人間のやうに思はれた。彼の前に立つてゐる者が誰であらうと、彼の事が何と言はれてゐやうと、そんな事はその瞬間、何の意味もない事であつた。が、唯自分の前に人々が立ち止つてゐるといふことだけが嬉しかつた。そして彼の唯一の望みは、これ等の人々が自分を介抱して、蘇生よみがへさせて呉れよといふ事であつた。彼にとつて生命は非常に美しく思はれた。彼は今、生命に對して今迄とは違つた考を持つやうになつたのであつた。で、何うかして身軀を動かし、何んな聲でもいゝから出さうと努力した。彼は、かすかに片足を動かして、自分でも悲しくなるやうな弱々しい、傷ましい呻きを發した。

「あゝ、これは生きてゐる。」と、ナポレオンが言つた。「この若者を抱起して繃帶所に連れて行け！」

ナポレオンは斯う言ひながら、ランヌ元帥を迎へるために猶ほ馬を進めた。元帥は、帽子をとり、微笑を浮かべ勝利を祝しながら皇帝の側近く馬を寄せた。

アンドレー公爵はそれ以上何も覺えてゐなかつた。擔架の上に乗せられたり、搬ばれて行く間ゆすられたり、繃帶所で傷口に探針プローブを入れられたりして起された非常な痛みのため意識を失つたのであつた。日暮れ方、彼はロシアの負

傷や捕虜になつた將校達と一緒に、病院へ連れて行かれる時、やつと気が附いた。連れて行かれる途中、彼は幾らか氣持がよくなつたやうな氣がして、周圍を見廻すことも出来れば、喋ることさへ出来るやうになつた。

彼が我に歸つてから最初に聞いた言葉は、フランスの護送將校が口早に言つてゐたかう云ふ言葉であつた。「此處に止まらう。皇帝が直ぐお出でになる、この捕虜達をお目にかけて、陛下の御満足を拜さうぢやないか。」

「今日は實に澤山捕虜があつたぢやないか、殆んどロシア軍全體と云つてもいい、だから皇帝ももう捕虜なんか御覽になるのは多分飽き飽きしてゐらつしやるだらう。」と、もう一人の將校が言つた。

「けれどもね、この男は、アレキサンドル皇帝の近衛兵全體の司令官ださうぢやないか。」と、初めの將校は、近衛騎兵の白い軍服を着けた一人のロシアの負傷將校を指しながら言つた。

バルコンスキイはベテルブルグの交際社會で會つた事のあるレブニン公爵を認めた。その側にもう一人、十九位の若者で、矢張り負傷してゐる近衛騎兵が立つてゐた。

ポナバルトは駈けて来て、馬を引止めた。「一番古參の將校は誰れか？」と、彼は捕虜を見て言つた。人々は公爵レブニン大佐の名を呼んだ。

「あなたがアレキサンドル皇帝の近衛騎兵隊長ですか？」と、ナポレオンは訊いた。

「私は騎兵中隊の指揮を致して居りました。」と、レブニンが答へた。

「あなたの聯隊は立派に任務を盡しました。」と、ナポレオンは言つた。

「大將軍のお賞言葉は軍人に對する最後の褒美でございます。」と、レブニンは言つた。

「私は喜んであなたにその褒美を與へる。」と、ナポレオンは言つた。

「あなたの側に居るその青年は誰ですか？」

レブニン公爵は、スフテレン中尉ですと言つた。

その青年を見て、ナポレオンは微笑を浮べながら言つた。

「Il est vovn bien jeune se frothner à nous. (まだ非常に若いのによく我々と戦争をしに来たもんだ)」

「年の若いのは勇敢な働きをするのに何の妨げにもなりません。」と、スフテレン中尉は減入りさうな聲で言つた。

「立派な答だ。」と、ナポレオンは言つた。「若者、君は偉い人物になるぞ！」

捕虜の價値を十分分らせる爲めに、皇帝の面前に立たされてゐたアンドレー公爵は皇帝の注意を惹かずにはゐなかつた。ナポレオンは戰場で彼を見た事を覚えてゐたらしく若者——jeune homme——と云ふ名稱を用ひて彼に話しかけた。バルコンスキイは最初、かう云ふ名稱の下に、ナポレオンの記憶の中に反映したのであつた。

「Et nous, jeune homme(何うです、若者)。」と、ナポレオンはバルコンスキイに言つた。「氣分はどうです、Hon brave(我が勇士)！」

この五分間前には、アンドレー公爵は、自分を連れて來た護送兵達に、二言三言口を利く事が出来たが、今はナポレオンをぢつと見詰めたまゝ黙つてゐた。ナポレオンの心を占めてゐる凡ての興味が、その瞬間彼には如何にも詰らないもののやうに思はれたのである。卑しい處榮と勝利の喜びとを持つてゐるこの英雄は、自分が先程見て、了解してゐたあの氣高い、眞實な、優さしい大空に較べれば、如何にも小つぽけなものに思はれたのである。で、彼はナポレオンに答へることが出来なかつたのであつた。それに總ては、血を失つたための衰弱や、苦痛や、近づいて來る死の期待などによつて、自分の中に惹き起された思想の嚴肅で莊大な連鎖に較べれば、無益な下らないものゝや

うに思はれた。ナポレオンの眼を眺めながらアンドレー公爵は、偉大の虚無と、誰も其意義を理解することの出来ない人生の虚無と、生きてゐる者の中で誰も其意味を理解することも出来ない死の、更に大なる虚無に思ひ耽つてゐた。

皇帝は、答へを待たずに、ぐるりと振り向き、馬を彼方にやりながら司令將校の一人に言った。

「この諸君をよく世話して、私の野營に連れて行つて呉れ。そして私のドクトル、ラレーエーにこの人達の傷を診させ呉れ。レブニン公爵、左様なら、」皇帝は馬を促がし、駈足で乗り去つてしまつた。

ナポレオンの顔は、満心と幸福とに輝いてゐた。

アンドレー公爵を搬んで来た兵卒達は、公爵令嬢マリヤが兄の首にかけてやつた金の聖像を見附け、それを取り上げてゐたが、皇帝が捕虜たちに優しく振舞つたのを見ると、急いで聖像を返した。

アンドレー公爵は、誰が何うして其聖像をまた自分にかけて呉れたのか知らなかつた、が、彼の軍服の胸には、俄かに、細い金鎖に附いてゐる聖像が現はれた。

「それこそ何んなに好いだらう。」と、アンドレー公爵は、妹が非常な優しさと敬虔の念とを籠めて自分にかけて呉れた聖像を眺めながら思つた。「マリヤが思つてゐるやうに總てのものがハツキリしてゐて單純であつたら、何んなに好いだらう。この世の中では何處に助けを求めべきかと云ふことや、この世を終つて、あの世に行つたら、何を期待すべきかと云ふことを知つたら、何んなに好いだらう！ 今、若し俺が「主よ、我を憐み給へ！……」と、言ふ事が出来たら、俺は何んなに幸福で、何んなに平和だらう。だが、俺は誰れに左様いつたらいゝのだらう？ カ——判然しない、そして捉へやうのない力だらうか？ けれども俺は其力に向ふことも出来なければ、其力を言葉で言ひ現はす

ことも出来ない——それは偉大の總稱か、或は虚無だ。」と、アンドレーは獨語つた。

「それならマリヤが此守袋の中に縫ひ込んで呉れた、其神だらうか？ 何もない、何もない、信すべきものはない。唯俺の理解出来る凡てのものと、何んだか理解は出来ないが併し非常に重要な、莊大な虚無があるだけだ！」

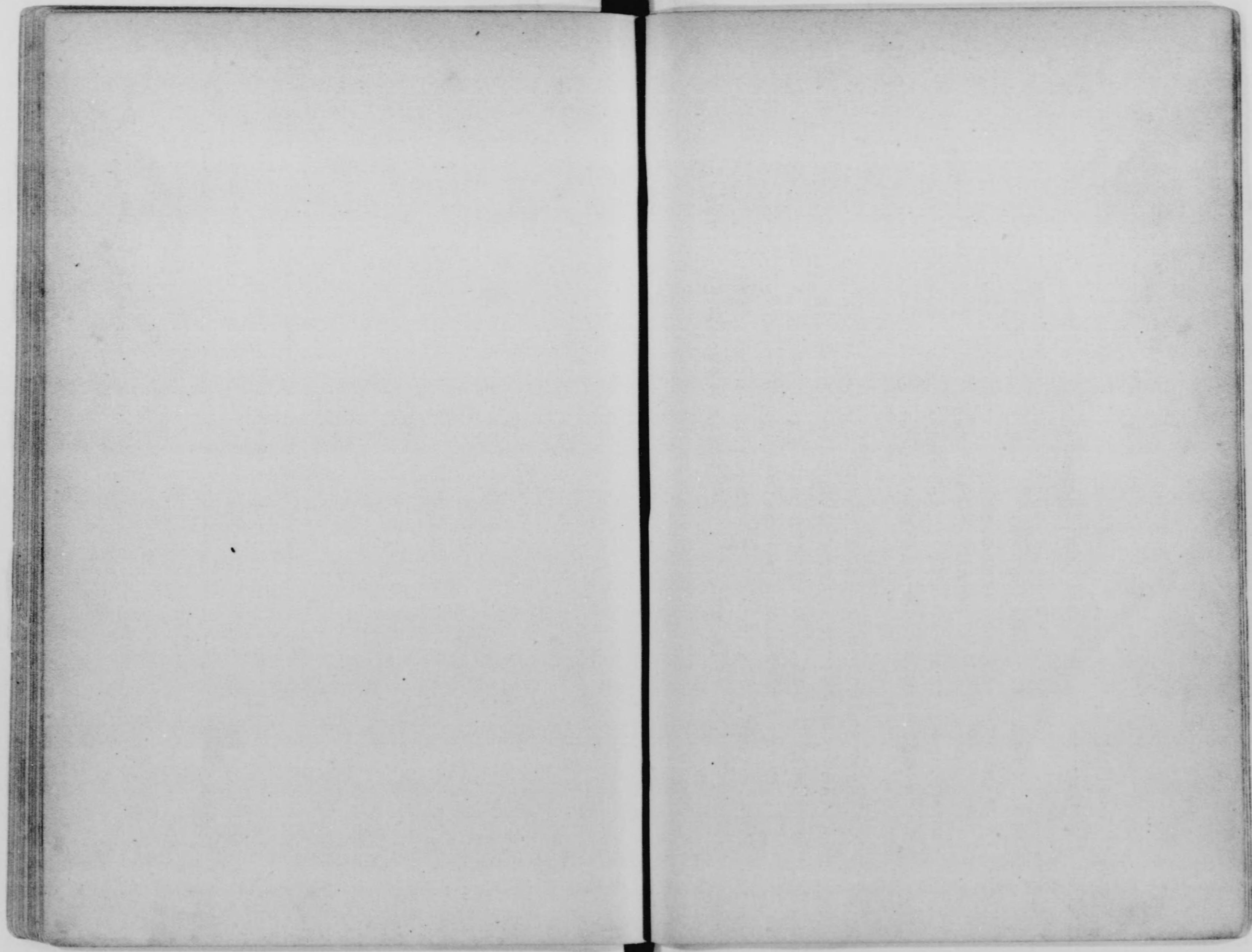
擔架は、運び出された。擔架が揺れる毎に彼は、再び堪へ切れない痛みを覺えて、熱が益々烈しくなり、臆言を言ひ始めた。父や、妻や、妹や、未來の息子に就いての幻影、戦ひの前夜に感じた優しい感情、あの小つぼけな、下らないナポレオンの姿、そして別けても、あの高い大空などが、熱に浮かされてゐる彼の夢想の主なる土臺になつてゐた。

彼はルイシーヤ・ゴオリイに於ける靜かな生活と、平和な家庭の幸福とを思ひ浮べた。彼が、その幸福を樂んでゐると、不意に、他人の不幸を喜ぶ、冷酷な、偏狭な顔付をした、小さなナポレオンが現はれた。そして、色々な疑念や苦惱が起つてきた。が、唯大空だけは平和を與へて呉れるやうに思はれた。

曉方になると、總ての夢は、無意識と昏睡との混沌たる暗闇の中に溶けて了つた。ナポレオンのドクトル、ラレーエーの意見によれば、この無意識と昏睡とは、恢復よりか、寧ろ死によつて解決されなければならなかつた。

「何しろ神経の強い、膽汁質の患者だから」と、ラレーエーは言つた。「とても助かる見込みはない。」

アンドレー公爵は、到底恢復の見込みのない他の重傷患者と一緒に、その地方の住民の看護に委ねられた。



## 第一編

一千八百六年の初めに、ニコライ・ラストフは休暇を得て、家へ歸つて行つた。

ヂエニソフも亦ウオロネーヂの家へ歸るところであつた、で、ラストフは、モスクワまで一緒に行つて、自分の家に寄つて行つて呉れとヂエニソフに勧めた。ヂエニソフは一番終りから一つ手前の驛場<sup>たてば</sup>で友達と落ち合ひ、二人で葡萄酒を三盃飲んだ、そしてモスクワまでの途中は、揺れが烈しいのも構はず、モスクワの近づくに従つて段々急き込むてくるラストフの傍で、驛橋<sup>えきせり</sup>の底へ横になり、グツスリ眠つてゐた。

「もう直ぐなのか、直ぐなのか？ あゝ、この堪<sup>た</sup>らなく厭<sup>ま</sup>な街、カラチイ（ロシア特有の一種のパン）店、街燈、橋の馭者！」町の門で旅行券をみせ、モスクワへ這入つて行つた時、ラストフは考へた。



「チエニソフ！ たうとう来ました！——眠つてゐるなあ！」彼は、全身を前へ乗り出すやうにしながら言ひつゞけてゐた、そんな事をして、櫓の進みを早めようと思つてでもゐるやうに。チエニソフは何とも答へなかつた。

「この四つ辻の角に、よく櫓駈者のザハールが立つてゐたつけ。や、やつぱりザハールがゐるぞ、馬も同じ馬だ！そしてあの小さな店は、よく我々が菓十を買つた店だ。急げ！ それ！」

「どの家ですかね？」と、駈者が訊いた。

「ほら、あすこの、一番向ふの端の大きな家だ。何うしてお前には見えないんだ？ あれが僕等の家だ。」と、ラストフは言ひつゞけた。あれが僕等の家なんだ。勿論。」

「チエニソフ！ チエニソフ！ もう直ぐ着きますよ。」

チエニソフは、頭をあげて、咳拂ひをしたが、何とも言はなかつた。

「ドミトリイ」と、ラストフは駈者臺にゐる自分の従僕に言つた。「あすこに見える燈火は確かに自家だらう？」

「確かにさうです。而もあれは、あなたのお父様の御書齋でございます。」

「まだ、みんな寝てやしまいいね？ え？ どうだらうね？」

「おい！ 僕の新しい上衣を出すのを忘れてくれるな。」と、ラストフは近頃生へたばかりの口髭を捻りながら言ひ添へた。

「おい、急げ。」と、彼は駈者に向つて、叫んで、「それから起きてらつしやい、ワアシヤ。」と、又こくり／＼やり出したチエニソフに言つた。

「おい、急げ、酒手は銀貨三ルーブルだ——急げ！」自分の家の入口からたつた三軒手前まで来た時、ラストフが叫

んだ。彼は馬が、ちつとも動いてはゐないやうな気がしたのである。終に櫓は右へ曲つて入口へ近づいた。ラストフは、頭の上に漆喰の破損れてゐる見馴れた軒蛇腹や、階段や、燈柱などを見た。彼は、櫓がまだ動いてゐるうちに飛び下りて、玄關へ駆け込む。家は、誰れが這入つて来やうと、自分の關係した事ではないとでも云ふやうに、無愛想に立つてゐた。玄關には誰もゐなかつた。

「おや、何か異状があるのではなからうか！」と、ラストフは減入りさうな氣持になつて一寸立止りながら怪んだ、が、やがて再び玄關に沿うて、見馴れた、折り曲つた階段を駆け上つて行つた。昔と同じ扉のハンドルは、その不潔なのがよく伯爵夫人を腹立たせたものだが、今も矢張り前のやうに工合悪く廻つた。玄關の廣間には、脂燭燭がたつた一本ともつてゐた。

ミハイロ爺は、自分の席で居眠りしてゐた。

一人で馬車を持上げたことのある程力の強い従僕のドロコフイは、織物の耳で靴をあみながら、坐つてゐた。彼は、扉が開いたので其方をチラリと見た、と、その眠さうな、無頓着な表情が、突然、吃驚したやうな大喜悅の表情に變つた。

「これはまア！ 若伯爵！ 若主人を見ると、彼は叫んだ。これはどうも、坊様でしたか？」から言つてドロコフイは、感謝して震へながら、奥へ知らせるつもりだつたのであらう、客間の扉口の方へ駆け出して行つた。が、又氣を變へたものらしく、歸つてきて、若主人の肩に飛びついた。

「みんな無事か？」ラストフはドロコフイから手を引き放しながら、訊いた。

「はい、神様のお蔭で、皆様御無事でございます！ 神様のお蔭！ たつた今お夕飯を召しあがつたところでござ

「います！ お顔をお見せ下さいまし、閣下！」

「全く何にも變りはないのかい？」

「神様のお蔭で、はい、神様のお蔭で。」

ラストフは、デエニソフの事はスツカリ忘れて了ひ、毛皮の外套を脱ぐと、自分の歸つて來た事を誰れも奥には知らせに行かないうちと思ひながら、足を爪立て、大きな暗い應接間へ駆け込む。何から何までが元と同じであつた、同じカルタテール、被ひのついた同じ蠟燭立。だが誰かもう若い主人を見たかみえて、まだ客間まで行かぬうちに、臨屏から、まるで嵐のやうに、何物か躍り出し、彼に獅噛みついて接吻し始めた。第二の扉、第三の扉から、第二の者、第三の者が飛び出してきて、更に抱擁し、更に接吻し、更に叫び立て、そして更に喜の涙を流した！ 何れが父なのか、何れがナターシヤなのか、何れがベエチャなのか、彼にはまるで見別けがつかなくかつた。みんな同時に叫んだり、喋つたり、彼を接吻したりしてゐた。唯母のみは、その中にはゐなかつた、その事だけが彼の記憶に残つた。

「どうも、思掛けない……ニコレンカ……お前！」

「おや、歸つてね……私たちの子供……可愛い、コーリヤ……まあ變つたぢやないの！ 蠟燭は何處？ お茶を！」

「あたしにも接吻して！」

「あたしが一番好きな人……あたしにも。」

ソーニヤ、ナターシヤ、ベエチャ、アンナ・ミハイロウナ、ヴェーラ、それから老伯爵と、みんなが彼に抱きついて

ゐた。下男や下女たちは、喋つたり、叫んだりしながら部屋へ群つてきた。

ベエチャは、ニコライの足に噛りついた。

「僕にも！」と、叫びつけてゐた。

ナターシヤは、ニコライを自分の方へ引き下し、顔ちゆうを接吻してから、後へ跳びさがり、ジャケットを引綱んだまゝ、同じ處を山羊のやうにびよん／＼跳ねながら、嬉しさにキヤツ／＼と甲高な聲を立てゝゐた。

ニコライのまはりをば、喜びの涙で輝いてゐる愛の眼が取り巻いてゐた、接吻を求める唇が取り巻いてゐた。

ソーニヤも亦緋羅紗のやうに赤くなつて、ニコライの腕に獅噛みつき、長い／＼間待つてゐた彼の眼を喜ばしげに見詰めたが、顔ちゆうを輝かした。ソーニヤは丁度十六歳で、非常に美しかつた、この幸福な、ひどい昂奮の瞬間には、殊にさうであつた。彼から目を離すことが出来ずに、ちつと彼を見つめて、微笑みながら、息を凝らしてゐた。彼は、感謝するやうに彼女をチラ／＼見た、が、尙ほ誰れかを待つてゐた、老伯爵夫人が未だ出て來なかつた。と、間もなく屏口に足音が聞えた。その足音は母の足音とは思はないほど早かつた。

併し、それがニコライの留守の間で作つた、ニコライの知らない新しい衣服を着た母親であつた。みんなが手を放したので、ニコライは母親の前へ飛んで行つた。二人は一緒にになると、母は啜泣しながら、息子の胸に顔を押し當てた。母は、顔をあげることが出来なかつた。唯ひたすら息子の驃騎兵のジャケットの冷たい粗紐に顔を押し當てるばかりであつた。誰の目にも留らずに部屋に這入つて來てゐたデエニソフは、ちつと立つて、人々を眺めながら、眼を擦つてゐた。

「御子息の友人のソシリーイ・デエニソフです。」許しげに彼を眺めてゐた伯爵に向つて、自分で自分を紹介した。

「ようこそ、私は、あなたを知つてゐます。知つてゐます。」と、伯爵はヂエニソフを接吻して抱擁しながら、言つた。「ニコライが手紙に書いて寄こしました……：ナターシャ、ヴェーラ、このお方がヂエニソフだよ。」

同じ幸福な、嬉しさうな幾つもの顔が、ヂエニソフの、髪のかくしや／＼した姿の方へ振り向いて、彼を取り巻いた。「可愛いムヂエニソフ。」と、甲走つた聲で叫んで、ナターシャは嬉しさに我を忘れてヂエニソフの方へ飛んで行き、彼を抱きかゝへて接吻した。誰も彼もナターシャのふるまひには呆れた。ヂエニソフも眞赤くなつた、が、微笑しながら、ナターシャの手を取つて接吻した。

ヂエニソフは、自分に當てられた部屋へ案内された。と同時に、ラストフ家のもは、みんな喫煙室でニコレンカのまはりに集つた。

老伯爵夫人は、息子の傍に腰を下し、しつかりと息子の手を握り通しに握り、絶えず接吻してゐた。他の人達は、その二人の周囲に詰めかけて、ニコライの舉動、言葉、眼付を一々嬉しさうに見詰め、熱心な愛の眼を決して彼から放さなかつた。弟と姉妹達とは争つて彼に最も近い席を奪ひ合ひ、彼のためにお茶や、ハンカチーフや、パイプを誰が持つて来るかといふ事で喧嘩をした。

ラストフは、みんなから示された愛情に包まれて幸福であつた。が、みんなに出會つた最初の瞬間が、餘り嬉しがつたので、何だか今の此幸福は小さなものに過ぎないやうな氣がして、もつと、もつと、もつとより以上の何事かを期待してゐた。

翌朝は旅の疲れて、ラストフは十時までグツスリ眠つた。

次の部屋は劍、袋、佩囊、口を開けたトランク、土だらけな長靴などで取り散らかつてゐた。拍車のついた磨いた

長靴が二足、丁度今壁に立てかけられたところであつた。召仕達が手洗鉢と、顔を剃るための湯と、よくブラシのかけられた衣服とを持つてきた。

部屋は、男の臭ひに充ちて、烟草くさくなつてゐた。

「おい、グレイシカ、パイプ！」と、ワスカ・ヂエニソフの皺皺れた聲が叫んだ。「ラストフ、起きろよ！」

ラストフは、膝づけになつてゐるやうな眼臉を擦りながら、髪の中のクシヤ／＼になつた頭を、暖かな枕からもたげた。

「え、遅いんですか？」

「遅いわ！ もう直ぐ十時よ。」と、ナターシャの聲が答へた、そして次の部屋で、糊のこわばつた袋のさら／＼いふ音と、少女らしい笑ひ聲とが聞えた。扉がほんの少し開いて、その隙間から、何か青いものや、リボンや、眞黒な髪の毛や、幾つかの嬉しさうな顔やがチラリと見えた。ナターシャがソーニヤとベエチャとを連れて、ニコライが起きやうとしてゐるか何うか見に来たのであつた。

「ニコレンカ、お起きなさいつてば！」再びナターシャの聲が扉口に聞えた。

「今直ぐ！」

そのうち、外側の部屋では、ベエチャが劍を見付けた、小さな少年が軍人の兄を見てよく感ずるその大喜びを感じながら、それを取りあげ、若い男の着物をきてゐない所を自分の姉たちが見てはよくないのだと云ふやうなことは少しも構はずに、寢室の扉を押し開けた。

「之れ兄さんの劍？」と、ベエチャは叫んだ。

娘達は跳んで逃げた。チエニソフは、毛むくじやらの脛を夜具の下に隠し、恐れたやうな顔をして、助けを求めるやうに戦友の方を見た。

扉はベエチャを入れてしまふと、その後から直ぐ閉つた。くすくす笑ふ聲が外に聞えた。

「ニコレンカ、寢間衣で出てらっしゃいよ。」と、ナターシヤの聲が叫んだ。

「之れ、兄さんの剣なの？」と、ベエチャは訊いた。「あなたのなの？」彼は赤黒い頬鬚を生じたチエニソフの方へ、恭々しい尊敬の色を浮べて振り向いた。

ラストフは、急いで靴足袋と靴とを穿き、寢間衣を肩に引っかけると、部屋の外へ出て行つた。ナターシヤは、拍車のついた兄の長靴の片一方を穿いて、今丁度、もう一方の足を入れやうとしてゐるところであつた。ソーニヤはぐるぐる廻はつてゐた。ニコライが出て行つた時には、丁度袋をぐるぐる廻はして、風船のやうに膨らまし、體をひよい／＼屈めてゐるところであつた。二人とも同じやうに新調の青い上衣をつけ、生々とし、ホンノリと顔を染め、機嫌が好かつた。ソーニヤは逃げ出してしまつたが、ナターシヤは、兄の腕を取つて、喫煙室へ連れて行つた。二人の間に話が始つた。二人は自分達の間だけに面白味のある澤山の遮らない事柄に就いて、いろ／＼訊いたり、答へたりする暇がまだなかつたのであつた。ナターシヤは、兄が何を言つても、又自分が何を言つても、直ぐ笑つた。それは二人の話が面白かつた爲めではなく、あんまり機嫌が好いので、笑ひになつて溢れて出る喜びを抑へる事が出来なかつたからであつた。

「まあ、好いことねえ、素敵だわね！」と、彼女は例によつて、こんな事を言ひつけてゐた。暖かな愛の光に動かされて、ラストフは、此一年半を経て初めて、自分の魂と顔とに、家を出てから一度も微笑んだことのなかつた、あ

の子供らしい笑ひの擴がつて行くのを覺えた。

「いゝえ、ねえ」と、ナターシヤが言つた。「兄さんは、もう全くの大人よ、ねえ？ 私、あなたが私の兄さんなのが、ほんたうに嬉しいわ。」彼女は兄の口髭に觸つた。「あなた方男つて何んなものだか、私、知りたいの。私達と同じなのか知ら？ さうぢやないわねえ。」

「ソーニヤは何うして逃げて行つたんだらう？」と、ラストフは尋ねた。

「おゝ、それにはいろ／＼お話しする事があるのよ！ あなたは何んな風にソーニヤに言葉を掛けるおつもり？（お前）つて呼ぶの、それとも（あなた）と呼ぶの？」

「それは時と場合さ。」と、ラストフは言つた。

「どうぞ（あなた）つて呼んであげて頂戴、その理由は後でお話ししますわ。」

「だが、何故だい？」

「それぢや、今お話しして上げるわ。ねえ、ソーニヤは私のお友達よ、あの女のために私は自分の腕を焼いた程の親友なのよ。之れ、見て御覧なさい。」モスリンの袖を捲き上げて、長い、瘡せた、軟かな腕の、丁度肘の上の、肩に近い處（そこは夜會服を着けた時でも出ない部分である）にある赤い痕を見せた。

「あの女に私の愛を見せるために、こゝを焼いたのよ。定規を火の中で熱して、そこに押しつけただけなの。」

自分の昔の勉強部屋で、肘掛に小さな蒲團のついてゐる寢椅子に腰を下し、ナターシヤの異常に熱した眼を眺めてゐると、ラストフは家庭と少年時代とのかの世界に呼び戻されて行つた、その世界は、他の人には何の意味もないものであつたが、彼には生涯の最も大きな喜びの幾分かを與へてくれたものなのである。そして愛の證據として定規で

腕を焼くといふ事が、彼には愚にもつかぬ事とは思はれなかつた、彼はそれを了解した、従つて、それに驚ろかさねはしなかつた。

「成る程ね、夫れだけかい？」と、彼は尋ねた。

「で、ね、私達は、それほど親友なのよ。それや馬鹿な事だわ——定規なんか。でも、私達は永久にお友達なのよ。あの女は人を愛すると永久に愛するのよ。私には夫れが解らないの。私は直き忘れちまふんですもの。」

「成程ね、それから？」

「それでね、あの女は私を愛してゐると同じやうに、あなたを愛してゐるのよ。」ナターシャは急に顔を赤らめた。「ねえ、あなたは御自分が出発なさる前の事を覚えていらつしやるでせう……あの女は、あなたがそんな事はスツカリ忘れておしまひになるつて言ふのよ——あの女はあなたの事をかう言つたの、私は何時もあの方を愛してゐますわ、でも、あの方は御自由になさればいゝわつて。ほんとに何て立派な、高尚な事だせう！　ねえ、ねえ、ほんとに高尚な事だせう？　ねえ？」と、ナターシャは非常に眞面目になり、非常に感動して尋ねた。その様子で見ると、今言つてゐる事は、前にも涙を流して語つた事があるのらしかつた。

ラストフはちよつと思に沈んだ。

「僕は一度言つた言葉は決して變へないよ。」と、彼は言つた。「それにソーニヤはあんなに可愛らしいぢやないか、自分の幸福を抛棄するやうな馬鹿者があるもんか。」

「さうだわ、さうだわ、」と、ナターシャは叫んだ。「あの女と私とでもうその事は話したの。あなたがさう仰ることには私達知つてゐたのよ。でも、それでは可けなくつてよ、何故つて、ねえ、若しあなたがさう仰ればあなたが御自

分の言葉で御自分を縛つておしまひになるのだとお考へになるんだと、さうすると、あの女がさうさせやうとして態々そんな事を言つたやうになりますわ。つまり、あなたが餘儀なくあの女と結婚させられてしまふやうな風になるでせう。そんなのだと大變好くないことになるわ。」

ラストフは、それはみんなナターシャとソーニヤによつて熟考せられた事であるのを知つた。前日、彼はソーニヤの美しいのに驚ろかさされた、今日もチラリと見たが、尙ほ一層美しくさへ思はれた。彼女は、十六の可愛らしい娘で、明かに彼を熱烈に愛してゐた。(彼は東の間もそれを疑ふ事は出来なかつた。)「たとへ結婚しなかつて、今あの女を愛して悪いといふ譯が何處にあらう。」と、ラストフは考へ込んだ。「併し……今俺には他にいろんな楽しみや興味があるんだ！」

「さうだ彼方にとつちや實にうまい結論だ、」と、彼は考へた。「俺は自由でゐなければならんぞ。」

「成程、それは尤もだ、では。」と、彼は言つた。「その事は後で話をしやう。あゝ、歸つてきてお前達と一緒にゐるのが僕は實に嬉しい！」と、彼は言ひ添へた。「それで、何うだい、お前はバリスの事は忘れてしまつたらうね？」  
「馬鹿なこと！」と、ナターシャは笑ひながら叫んだ。「私一度だつてあの人の事も、他の人の事も思やしくつてよ、思はうとも思はないわ。」

「おや、さうかい、さうかい！　ではお前は何が望みなんだい？」

「私？」と、ナターシャは訊き返した、と、その顔は幸福な微笑で輝いた。「あなたはデュポールを見た事があつて？」

「はい、さう。」

「有名な舞踏者のデニソフを見た事がないの？ あら、それや解らなくてよ。私——私はいかなのよ。」ナターシャは兩腕を曲げて、舞踏者がするやうに裳をかゞげ、二三歩駈け退り、ぐる／＼廻つて趾頭旋回を行き、小さい足を一緒に揃へて、ほんの爪先で突つ立ち上り、二三歩前へ進み出た。

「ねえ、かういふ風に立つのよ、ほら、かういふ風に。」と、彼女は言ひつけてみた、が、爪先で何時までも立つてゐる事は出来なかつた。「私、かういふものにならうとしてゐるのよ。誰とも結婚なんかしようと思はなくてよ。舞踏者になるつもりなの。でも、誰にも言つちや厭よ。」

ラストフは、デニソフが自分の部屋で美しく思つた程、高い聲で、楽しさうに笑つた。ナターシャも一緒になつて笑はずにはゐられなかつた。

「ねえ、好い考へでせう？」と、ナターシャは訊いた。

「あゝ、全く。ぢやお前はもうベリリスとは結婚するつもりはないんだね？」

ナターシャは、顔を眞赤にした。

「私は、誰とも結婚しやうとは思はなくてよ！ あの人に會つたら、私、自分でさう言つてやるわ。」

「え、さう言つてやる？」

「でもそんな事はみんな馬鹿氣た事だわ。」ナターシャは喋りつゞけた。「で、ねえ、デニソフつて好い人？」と、彼女は訊いた。

「あゝ、好い人だよ。」

「それぢや、さよなら、着物を着更へてゐらつしやい。あの方恐ろしい人なの——デニソフは？」

「なに、恐ろしいかつて？」と、ニコライが訊き返した。「いゝや、リスカは面白い男だよ。」

「あなたは、あの人をリスカつて呼ぶのね……可笑しいわ。ぢや、大變好い人なんですかね？」

「大變好い人だとも。」

「ぢや、急いで仕度してお茶にいらつしやい。家中みんなと一緒に飲むんですから。」

かう言つてナターシャは、ひとり十五才の幸福な少女のみが浮べられるやうな微笑を浮べながら、爪先で立ちあがり、舞踏者がするやうに部屋を出て行つた。ラストフは、廣間でソーニヤに出會ふと眞赤な顔をした。彼女に對してどんな態度を取つたらいゝのか解らなかつた。昨日は、二人は會つた嬉しさの最初の刹那に接吻したのであつたが、今日はそんな事は思ひも及ばないやうな氣がした。ラストフはみんなが、母や姉妹たちが、自分を探るやうに見てゐて、自分がソーニヤに對してどんな態度を取るかと怪んでゐるやうに感じた。彼は、女の手を接吻して、「あなた」と呼び、「ソーニヤ」と呼んだ。けれども互ひに見交はず二人の眼は、もつと嬉しく物を言ひ、優しく接吻してゐた。彼女の眼は、ナターシャといふものを仲介として、敢て男に昔の約束を思ひ起させやうとした許しを乞ふたり、男の愛に對する感謝を表はしたりしてゐた。彼の眼は、女が自分に自由を與へた事を感謝して、それは何れにしても、自分分は決してお前を愛する事は止めやしない、何故つて、お前を愛さないなんていふ事は到底出来ないんだから、と云ふことを語つてゐた。

「どうも不思議ねえ、でも。」と、みんなが沈黙した瞬間を撰んで、ヴェーラが言つた。「ソーニヤとニコレンカとが、會つてもお互ひに他人のやうに話してゐるのは。」

ヴェーラの言葉は、彼女のいつもの言葉のやうに本當であつた、けれど大方の彼女の言葉のやうに總ての人達を不

愉快にさせた——顔を赤らめたのは、單にソーニヤや、ニコライや、ナターシャばかりではなかつた、自分の息子がソーニヤを愛してゐるのが、息子の華々しい結婚の妨げとなりさうだと恐れてゐる伯爵夫人も亦、まるで小娘のやうに赤くなつた。

ラストフが驚いた事には、新しい軍服を着たヂエニソフは、香油を塗つたり、香水をふりかけたりして、客間でも、まるで戦場のやうに目立つた彼となり、ラストフがこの男がこんなだとは思ひも寄らなかつた程に、貴婦人や紳士達に對して感慫であつた。

二

軍隊からモスクワに歸つて來ると、ニコライ・ラストフは、一家の者には秀者として、一番良い息子、みんなに崇拜されるニコレンカとして、歓迎された。親類の者には、愛すべき、愉快な、禮儀正しい青年として、知人達には、美しい驃騎兵中尉として、巧みな舞踏者として、又モスクワぢゆうでの指折りの好い花舞の候補者の一人として、歓迎された。

ラストフ家は、モスクワぢゆうに知られてゐた、老伯爵は自分の領地をすつかり抵當に入れたので、その年は澤山金を持つてゐた、それ故、自分の競馬馬を持ち、モスクワでは未だ見た事もないやうな特別な裁方の最新流行の乗馬ズボンや、小さい銀の拍車のついた非常に爪先の尖つてゐる流行の長靴を穿いたニコレンカは、非常に愉快に時を費

す事が出来た。

ラストフは、生活の舊狀態に自分を適應させてゆく初めの少時の間がたつと、また家にゐるのを非常に幸福に感じた。聖書の試験に落第した時の絶望や、楯の取者に拂ふべき金をガウリーロに借りた事や、人眼を忍んだソーニヤとの接吻や——そんな事がみんな、今の自分とは到底測るべからざる程遠く離れてしまつた子供らしい事として見返された。今や自分は銀の組紐のついたジャケットを着て、聖ゲオルギイの十字章を胸につけた驃騎兵中尉なのだ、自分は、競馬に馴らしてゐる馬を一面持つてゐて、有名な競馬家達や、年とつた尊敬すべき人々と交際してゐるのだ。ニコライは又並木街に住んでゐる或る貴婦人も知合ひになつて、いつも夜になつてから訪ねて行つた。アルハローフ家の舞踏會では、マズールカ(舞踏の一種)の指揮をして、カーメンスキイ元帥に戦争の話をしたり、ヂエニソフから紹介された四十格好の大佐には、同輩の言葉使ひをしたりした。

皇帝に對する彼の熱情は、モスクワでは少し緩んだ、皇帝に會はなかつたからでもあるし、又會ふ機會がその時分には、まるでなかつたからでもある。それでも尙ほ皇帝の事や、皇帝に對する自分の愛の事をよく語るのであつた、そんな時はいつでも、自分は今總てを語つてゐるのではない、皇帝に對する自分の感情の中には、他の誰もが了解する事の出来ない或物があるのだといふ心を、その音調に仄めかすのであつた。そして、その全心を擧げて、モスクワ全體に擴まつてゐるアレキサンドル・パウロキツチ皇帝崇拜の感情に賛同した。その頃モスクワでは、皇帝は、「天使の權化」といふ稱號を奉られてゐたのである。

隊に歸へる前、モスクワに滞在してゐた短い間に、ラストフはソーニヤに益々接近するどころか、却つてずつと遠くつてしまつたのであつた。彼女は、大變美しく、可愛らしく、熱烈に自分を愛してゐるといふ事も明白であつた。け

れども彼は、戀などに注意を拂つてゐる暇のないほど、爲すべき事が澤山あるやうに思はれ、若者に取つては束縛される事が恐ろしく、他にいろ／＼したい事があるために自由といふものを最も貴く思ふ、青年の、あの年代に達してゐたのである。かうしてモスクワに滞在してゐた間に、ソーニヤのことが心に浮んでくると、彼は、密にかう思ふのが常であつた――

「なアに！ これから先きあの位な女はまだ幾らもあるだろう！ 今は未だ俺れが知らなくつたつて、あの位の女は何處かに澤山あるんだ。戀のことを考へたければ、これからだつて十分時がある、今はそんな暇はない。」

おまけに女と交際するのは、何だか自分の男としての威厳を貶すやうに彼には思はれた。舞踏會に行つて女の間に立交る場合には、自分は、自分の意思に逆らつてさうやつてゐるのだと云ふ風を装ふてゐた。競馬、イギリス俱樂部、ヂエニソフと酒を飲む事、それに續く夜の訪問――さういふ事は總て、それとは別問題で、さういふ事は總て元氣のある、若い驍騎兵のやるべき正しい事であつた。

三月の初め頃、老伯爵のイリヤ・アンドレーキツチ・ラストフは、バグラチオン公爵を主賓とするイギリス俱樂部の晩餐會の仕度で非常に忙しかつた。

伯爵は、寢間着のまゝで、大きな廣間の中を絶えず彼方此方と歩いては、俱樂部の支配人と、老人の料理人の有名なフェオクチイスツに會つて、バグラチオン公爵の晩餐會に使ふアスパラガスや、新しい胡瓜や、苺や、積の肉や、魚などについて指圖を與へてゐた。

俱樂部の創立以來、伯爵はその部員でもあり、又その管理者でもあつた。彼は、バグラチオン招待會の開催を俱樂部から委託された。といふのは、こんな丁重な大規模の饗宴を催すことの出来る人を求めるのは困難であつたし、殊

に宴會開催のために金が入用な場合に自分の財を擲つことが出来、又喜んでさうする人を求めるのは更に一層困難であつたからである。料理人頭と俱樂部の支配人とは、に／＼顔で伯爵の命令を聞いてゐた、何故といふに、他の人を相手の場合には、伯爵を相手にする場合程、數千ルーブルもかゝる晩餐會から自分達が宜い金儲けをすることの出来ぬのを知つてゐたから。

「ちや、宜いか、海扇だ、バイの皮に海扇を入れる事を氣をつけるんだ、解つたか。」

「冷物は、えーと――三皿でございましたな？」と、料理人頭が訊いた。

伯爵は一寸思案した。

「それより妙くする譯には行かんよ、三皿と……メイヨネエズが一皿に」と、指を折りながら言つた。

「それから、大きな鱈魚を取つて置けといふ閣下の御命令でございましたな！」と、支配人が訊いた。

「さうだ、何うも詮方がない、奴等が負けんでも買はたけりやならんよ。あゝ、何といふ事だ、忘れてしまふ處だつた。勿論テーブルには今一品出さなければならんよ。あゝ、こりや大變だ！」伯爵は頭を擱んだ。「そして誰が一體花を取りに行くのだな？ ミチエンカ！ おい、ミチエンカ！ 貴様馬を飛ばせろ、ミチエンカ。」召しに應じてやつてきた執事に向つてかう言つた。「ポドモスコウニの領地へ馬を飛ばせろ。それはモスクワの近在にある伯爵の所有地であつた。そして園丁のマクシンカに、農奴を働かして温室から飾花を取るやうに言ひ附けるのだ。温室にあるのをみんな此處に持つて來いといふのだぞ、毛氈で荷造りをしろと言つてくれ。それから、金曜日までに二百鉢いるのだといふのだぞ。」

それからそれへと種々雑多な指圖をした揚句、働いた疲れを休めようと、伯爵夫人の處へ行きかけるのであつた、



が、又もや何か他の事を思ひ出して、取つて返し、料理人頭と支配人とを呼び戻して、再び命令を與へ始めるのであつた。彼等は、軽い、男らしい足音と、拍車のチリン／＼鳴る響きとを扉口に聞いた。美しい、赤い顔をして、黒くなりかけてゐる口髭を生した若伯爵が這入つてきた。彼は明かにモスクワの氣樂な生活のために、色光澤よく、身寄麗になつてゐた。

「ヤア、お前！ 私の頭はぐる／＼廻つてるよ」と、多少恥しさうな微笑を息子の方へ向けながら、老紳士は言つた。「手傳つて呉れないか！ まだ歌謡手を雇はなければならぬのだよ、なア。音楽の方は、もうすつかり片が付いたが、併しジブシイの歌謡手を幾人か雇はなければなるまいな？ お前達軍人は、さういふものが好きなんだ。」

「一體、お父様、バグラチオン公爵は、シェーングラアベンの戦争準備にだつて、今のあなたのやうな騒ぎはしやしませんでしたよ。」と、微笑しながら息子は言つた。

老伯爵は、腹を立てたやうな風をした。

「うむ、さういふお前が自分でやつて見るが好い！」さう言つて伯爵は、料理人の方へ振り向いた。料理人は愕然な、つゝましやかな顔付をして、注意深く、そして同情するやうに、父から息子を見まはしてゐた。

「これが近頃の若い者の流儀だ、なア、フェオクティスツ」と、伯爵は言つた。「奴等は我々老人を嘲笑かしてゐる！」  
「御尤もでございます、閣下、若い方は唯御馳走を召食つてさへゐりや、それで好いんで、それを整へたり、料理したりすることは、てんで御存知ありませんや！」

「その通りだ、その通りだ！」伯爵は、かう叫んで、快調に息子の両手を握りながら、「さア捉まへたぞ！ 今直ぐ二頭立の櫓に乗つて、ベズウホフの處へ行つて、イリヤ・アンドレーキッチ伯爵の使だが、蒜と新しいバイナツブルと

を呉れと云ふて来て呉れ。あすこより他では、手に入らぬのだからな。若し主人がゐなかつたら、家の中に這入つて行つて、公爵令嬢たちに使の用向を話して呉れ。宜いか、歸りにはラズグーリヤにまはるのだぞ——馭者のイバツカが道を知つとる、——そして、イリニューシカを探し出して、お前覺えて居るだらう、オルロフ伯爵の處で、白いコザツク服を着て踊つたあのジブシイだ、あの男を此處へ連れて来て呉れ。」

「そして、あの男と一緒にジブシイの娘共も此處へ連れて來ませうか？」と、ニコライは笑ひながら訊いた。

「さア、さア！……」

この吐端、アンナ・ミハイロウナが、決してその顔を去つた事のない、物慣れた心配さうな慎しみの混つた、キリスト教徒らしい柔順な様子をして、音もなく部屋に歩み入つた。アンナ・ミハイロウナが、伯爵の寢間着である處へやつて来るのは毎日のことであつたが、それでも伯爵はアンナ・ミハイロウナがやつて來ると屹度面喰つて、自分の着物の辯解をするのであつた。

「そんな事有仰いますなよ、親愛な伯爵」と、彼女はつゝましましやかに眼をつぶつて言つた。「私今ベズウホフに會ひにまゐります」と、彼女は言つた。「若いベズウホフが歸つてまゐつたんでございますよ。ですから、伯爵、入用なものはあの人の温室から貰ふ事に致しませう。それに、私、自分の用でもあの人に會ひたいんですから。あの人はパリースの手紙を私に送つて呉れたんですよ。お蔭様で、パリースはもう參謀附になりました。」

伯爵は、自分の仕事の一部分をアンナ・ミハイロウナがやつて呉れるといふので大喜びで、彼女のために馬車を持つて來るやうに命令けた。

「ベズウホフに來るやうに言つて下さい。名を書き込んで置きますから。あの男は家内と一緒に連れて來たてせうか

？」と、伯爵は訊いた。

アンナ・ミハイロナは、眼を上へ向けた、深い悲しみの表情がその顔にうかんだ。

「ねえ、あなた、あの人は、それは不幸なですよ。」と、彼女は言つた。「若し噂がほんたうでしたら、それは恐ろしくございますよ。私共があの人を幸福を喜んでゐる間は、こんな事は思ひも及ばなかつた事なんですからねえ。あのけだかい、天使のやうな性質の、あの若いベズウホフが！ さうです、私は心からあの人を氣の毒に思ひます、私の力で出来ませう限りは、慰めて上げようと思ひます。」

「といふと、一體どうしたんですか？」と、若いラストフも年老いたラストフも、二人ながら尋ねた。

アンナ・ミハイロウナは、深い溜息を吐いた。「あのマリヤ・イワノウナの息子のドラホフがね。」と、彼女は如何にも秘密らしい囁き聲で言つた。「すつかり、あの女を取り込んでしまつたといふ噂なんです。ビエールが、あの男を連れ出して、ベテルブルグの自分の家へ招んだんです。それが今ではかうなつたんですよ！……女は此處へ来てゐますが、その無頼漢も女の後を追つて来てゐるんですよ。」と、アンナ・ミハイロウナは言つた。唯ビエールに對する同情のみを表はさうと心には思つてゐたのであるが、思はず出て来る聲の抑揚や薄笑ひなどは、寧ろ彼女がドラホフと呼んだその無頼漢に向つての同情を表はしてゐた。「ビエール自身はその心配で全くへこたれて了つてゐるといふ話ですよ。」

「成程、兎に角俱樂部に来るやうに言つて下さい——氣晴しになるでせうから。それは大規模の饗宴ですよ。」

翌日、三月三日の午後二時頃、二百五十名のイギリス俱樂部員と、五十名のお客とが、その日の主賓たる、マウストリア戦争の英雄、バグラチオン公爵の到着を待つてゐた。

アウステルリッツの敗戦の報が傳はるや、全モスクワ市は、最初は、混亂の中に投げ込まれてしまつたのであつた。その時代には、ロシア人はいつも勝利にばかり馴らされてゐたので、敗戦の報を受取つても、或る人々は、てんで夫れを信じないし、又他の人々は、その不可思議な出来事の説明を、何か或る特別な事情の中に求めるのであつた。知名な人々や、確實な情報を持つた身分のある人々などが悉く集まるイギリス俱樂部では、十二月のうちは、即ちその報知が來初めた頃は、戦争の事や最近の敗戦などについては一言も言葉が交はされなかつた。みんな申し合せて沈黙を守つてゐるやうであつた。ラストプチン伯爵とか、ユリー・ウラヂミロキツチ・ドルゴルキイとか、ワルーエフとか、マルコフ伯爵とか、それからウイヤゼムスキイとか、かういふ俱樂部で、いつも會話の種を蒔き出す連中は、俱樂部には姿を見せないで、各自の家の親しい集合で額を集めてゐた。

自分等の意見を、他の連中から得てゐる、モスクウ交際社會中の一部の連中（實際イリヤ・アンドレーキツチ・ラストフ伯爵はそのうちに屬してゐた）は、少しの間、指導者もなく、戦争の經過に關する定見もなしてゐた。

モスクワ市民等は、何か知らぬ悪い事があるのだと思つた、が、之等の悪い報知を判断するのは困難であつたので、黙つてゐる方が宜いと思つた。

けれど、それから少し経つと、會議室から出てくる陪審官のやうに、指導者たちが自分等の意見を與へるために再び俱樂部に現はれて來たので、明かな、確固とした定見が見出された。ロシア軍が撃破されたといふ——實に信じ得べからざる、前代未聞の、不可能な——その事實を説明すべき、いろ／＼な原因が発見された、そして、すべての事が明瞭になり、同じ話がモスクワの隅から隅まで繰返された。その原因といふのは次のやうなものであつた。アウストリア軍の裏切りと、缺點の多い兵站部と、ポーランド人のブルゼビシエフスキイ及びフランス人のランジエロ

ンの裏切りと、クツウゾフの無能と、そして今一つは（これは歴へつけられたやうな語調で吐かれたのであるが）何の人格も能力もない人物を信用した皇帝の若くて無経験だといふ事とであつた。

だが軍隊は、ロシアの軍隊は、世にも稀なるもので、勇氣の奇蹟を成就げたのだ、と誰も彼もが言つてゐた。兵卒も、將校も、將官も——すべて勇者であつた。けれど、その勇者の中の勇者はバグラチオン公爵であつた、公爵は、シエングラーベンの戦ひでは拔群の働きを示し、更らにアウステルリッツの退却の際には、彼のみ一人、自分の隊を整然として退却させ、そして終日我に倍する敵を撃退し得たのであつた。バグラチオン公爵がモスクワで、斯くも人氣のある英雄にされたのは、彼がよその人であつて、モスクワには誰も親戚がないといふ事實に基いてゐた。彼は、親戚の助けを藉りるでもなく、策略をめぐらすでもなく、みづから自分の道を開き得た純然たる英雄的なロシア軍人の代表的人物として考へられ、更に又イタリ戦争の記憶によつてスウオロフと聯想して考へられたのであつた。のみならず、斯くの如き名譽を彼に與へる事は、モスクワ人のクツウゾフに對する嫉妬と不信任とを表す一番良い方法なのであつた。

「若しバグラチオンが一人もひなかつたら、誰か彼を造り出さなければならぬまいて、」ヴォルテールの言葉をもぢつて、頓智家のシンシンが、こんな事を言つた。

クツウゾフの事は、人々は何とも言はなかつた、言つたにしたらところで、奴は宮廷の檢風器だ、老老の色情狂だ、など言つて、ひそ／＼悪口を吐いた。

モスクワぢうが、木を澤山伐つて見る、いつかは自分の指を切らなくちやならなくなるから、といふ、今度は敗戦したが前の度々の勝利を思ひ出し慰めとしる、といふ意味のドルゴルコフ公爵の言葉と、フランス兵をば、戦ひに

臨むのには大袈裟な言葉で刺戟してやらなければならず、ドイツ兵には前進するよりは退却する方が更らに危険だといふ事を論理的に證明してやらなければならぬ、が、ロシア兵は、扣へ目にして、餘り不注意に進み過ぎないやうに氣をつけてさへやれば、それで宜いのだ、といふラストブチンの言葉とが繰り返されてゐた。

アウステルリッツで我軍の將校及び兵卒共が行つた個人々々の華々しい働きに關する新しい武勇談が、到る所絶えず聞かれた。或る兵士は軍旗を救つた、今一人は五人のフランス兵を殺し、今一人はたつた一人で五門の大砲に彈丸をこめつけてゐた。右の手に負傷すると直ぐ左の手に劍を持ち代へて、敵軍に突貫して行つたベルグの話が、ベルグを知らない人々の口から語られた。バルコンスキイに就いては何事も言はれなかつた、唯親しく彼を知つてゐる人々のみが、彼が妊娠した妻と、個人の老いたる父とを後に殘して、未だほんとに若盛りだのに死んでしまつた事を惜しんだ。

### 三

三月の三日には、イギリス俱樂部の總ての部屋々々は、ガヤ／＼いふ騒々しい聲に充された、俱樂部員やお客達は、軍服やフロクコートを身に着けて、ある者は白粉をつけ、ロシア直衣を着たりなどして、さながら春になると群れつどふ蜜蜂のやうに、立つたり、會つたり、別れたり、あちこち駆けまはつたりしてゐた。白粉をつけた法被の從僕が、スリツパと靴足袋とを穿いて、扉口々々に立ち、用があれば直ぐ勤めやうとして、お客や俱樂部員の一舉一動を

見逃すまいと、一生懸命に見守つてゐた。此處に列席した人々の大部分は、何れも相當な年配の、人に尊敬されてゐる人々で、ゆつたりした自信のある顔と、肥つた指と、決然とした身振りと聲とを持つてゐた。この階級に屬してゐるお客や部員達は、各自いつもの定つてゐる席に腰を下し、又いつもの定つてゐる集團を作つて一緒にゐるのであつた。

列席者のうちの小部分のものは、その時限りのお客であつた——主として青年で、その中にはヂエニソフ、ラストフ、今ではまたセミヨノフスキイ聯隊の士官となつてゐる、ダラホフなどがゐた。これ等青年、殊に青年將校の類には舊時代の人々に對して、「尊敬と服従、これを僕等はみなさんに捧げようとして居ります、併し何れにしても未來は僕等のものである事を御記憶下さい」とも言つてゐるやうに思はれる、年長者に對する懇とへり下つたやうな服従の表情が浮んでゐた。

俱樂部の古い部員のネスギーツキイも亦そこにゐた。

妻の指圖に従つて髪をのばし、眼鏡を廢めたビエールは、流行の頂上といふ服装をしてゐたが、それでも憂鬱な、意氣銷沈した様子しながら、部屋々々を歩きまはつてゐた。何處でもさうであるが、此處でも彼は自分の富に對して尊敬を拂ふ人々の雰囲気に取り巻かれ、その人々に對して、彼は、習慣となつてしまつた王者のやうな無頓着な、人を輕侮むやうな様子で振舞つてゐた。

年齢から云へば、未だ若い人々に屬してゐるのだが、富や親戚縁者などの關係から見れば、老人仲間の一員であつた、そこで彼は前の部類から、後の部類へと移つたのであつた。年老いた部員の中でも最も著名な人達が、仲間の中心となつてゐて、知らない人々をさへ、有名な人々の言葉を聞くために、恭々しくその仲間に近寄つて行つた。ラス

トブチン伯爵や、ワルーエフや、ナリーシキン等のまはりには、稍や大きな集團が作られてゐた。ラストブチンは、ロシア兵が逃げてくるアウストリア兵のために踏まれるので、その逃走者たちの間を劍をかざして道を切り開いて行かなければならなかつた光景を述べてゐた。

ワルーエフは、アウステルリッツの戦ひに就いて、モスクワの市民が何んな批評をしてゐるかを探るために、ウワロフがベテルブルグから差遣されたといふ事を、自分を取り巻いてゐる連中に、内々知らせしてゐた。

第三のまどゐでは、ナリーシキンが、アウストリアの策戦會議の席上で、スウオロフがアウストリア將官の、間拔けき加減に、鶏の啼聲の眞似をして答へたといふ古い話を繰返してゐた。その側に立つてゐたシンシンは、その餘り六ヶ敷くもない驚當——鶏の啼眞似をするといふこと——さへも、クツウゾフは、スウオロフから學ぶ事が出来なかつたらしい、と言つて、みんなを笑はせようとしたが、年老いた部員たちは、この頓智家を嚴と睨み、今日はクツウゾフの事はその位でも口にすべき場合ではないといふ事を、それによつて了解させようとした。

イリヤ・アンドレーキッチ・ラストフ伯爵は、柔かい長靴を穿いて、心配さうに食堂と客間の間を絶へず、あちこち忙しさうに歩るきながら、主立つた人々や、さうでない人々に、忙がしさうな挨拶をしてゐた、彼はさういふ人々をみんな知つてゐて、みんなに同じ待遇を與へてゐた。折々彼の眼は、自分の若い息子のしとやかな、活氣のある姿を探し求めては、喜ばしさうにヂツと見つめて、眼くばせをした。若いラストフは、近頃知合ひになつて、意氣投合してゐるダラホフと、窓のところ立つてゐた。老伯爵は二人の側へ行つて、ダラホフと握手をした。

『少しお出かけ下さい。それでは、あなたは此子とお友達で……あちらで一緒に英雄を氣取つてゐなすつたんですつて……あゝ！ ヲシーリイ・イグナチウチ……御機嫌好う、』と、その時這入つてきた老紳士の方へ振り向い

た、が、その紳士と未だ挨拶も終らないうちに、満場が、さつと動揺めいたかと思ふと、一人の従僕が驚いたやうな顔付をして、駆け込んで来て、

「お見えになりました」と、知らせた。

ベルが鳴つた。幹事達は駆け出して行つた。いろ／＼な部屋にばら／＼になつてゐた客人達は、方匙シヤケルの中シヤケルで振り集められるライ麦のやうに、一塊りに集つて、大きな客間の扉口に待つてゐた。

控へ間の扉口に、帽子も剣も着けてゐないバグラチオンの姿が現はれた、帽子や剣は倶楽部の慣例にならつて、玄關番に渡して来たのであつた。彼は、アウステルリッツの戦ひの前夜、ラストフが見た時のやうに、アストラハンの帽子を冠つたり肩に馬の鞭を掛けたりしてはゐなかつたけれど、ロシアや外國のいろ／＼の勳章や聖セントゲオルギイの星章を左の胸間に下げた、きつちりした新しい軍服を着てゐた。宴會に出席するために態々今し方髪を刈つたり、頬鬚を鉄ハんやりしてきたらしかつたが、それが却つてその容貌を一層悪くした。無邪氣な樂しげな様子をしてゐたが、それが彼の決然とした男らしい目鼻立ちと混り合つて、彼の顔にまがひもなく稍や滑稽な表情を與へてゐた。

バグラチオンと一緒に這入つて来たベクレシヨーフ及びフォードル・ペトロキツチ・ウワローフの兩人は、扉口にヂツと立ち止り、バグラチオンを最も重要なお客として自分達よりも先に進ませようとした。バグラチオンは當惑した、そして二人の禮讓を利用しやうとしなかつたので、扉口では足が絡り合つた。が、結局バグラチオンが先に這入つて来た。彼は、手の置場にも困つたといふ様子で、應接間の寄木細工の床の上を、恥かしさうに、ぶきつちやうに歩いた。彼は、シェーングラアベンド、クルスク聯隊の先頭に立つて歩いた時のやうに、砲火を肩して耕野を歩く方が、もつと平氣で、もつと安らかであつたに違ひない。

幹事たちは、第一の扉口で出迎へて、かういふ名譽あるお客に接する喜びを二言三言喋り、答も待たずに、彼を取り囲み、まるで、ふん掴へでもするやうにして客間へ導いて行つた。客間の扉口には、内に這入る事が出来ない程倶楽部員やお客が群つてゐて、まるで何か珍奇な動物でも見るやうに、バグラチオンの顔を、人の肩越しに一眼でも見ようとしては、互ひに押し合ひ、合ひしてゐた。

イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、誰よりも元氣な笑ひ聲を出しては、「道を開けて下さい、君、道を開けて下さい、道を」と、絶えず叫びながら、群集を押し分けて、客人達を客間に導き、中央の安樂椅子に坐らせた。名ある人々や、倶楽部の主立つた部員やが、新たに來た客人達を取り巻いた。

イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、再び群集を押し分けて部屋から出て行つたが、少し經つて大きな銀の皿を持つた今一人の幹事と一緒に又現はれて来て、その皿をバグラチオン公爵に差し出した。皿の上には英雄の名譽のために作られ、印刷された詩が乗つてゐた。

バグラチオンは、その皿を見ると吃驚して、助けを求めようとでもするやうに、周囲を見まはした。が、總ての人の眼は、自分が素直にそれを受けるだらうといふ事を豫期してゐるやうに見えた。で、みんなの力を脱のがれられないやうな氣がして、バグラチオンは決然と兩手でそれを取り、それを持つてきた伯爵の顔を、怒つたやうに、非難するやうに眺めた。誰かおせつかいにもバグラチオンの手から皿を取り、或は、さうして夜が来るまで、それを持つてゐて、食卓の上まで持つて行つてやらうとしてゐるのであるやうにも見えた。その注意を詩の方に向けさせた。それは、私は讀みませう。バグラチオンは、かう言はうとするやうな様子をして、紙の上に疲れた眼を据ゑながら、眞面目な、心を籠めた表情をして、讀み初めた。詩の作者が夫れを取つて、自分で高らかに讀み出した。バグラチオン公爵は首

を垂れて聴いた。

かくアレキサンドルの御代を榮し、

我等の爲めに、王座なるタイトを護れ、

怖るべき將軍と善良なる人間とは一致協力せよ、

リフエイは故國に於て、シーザアは戰場に於て。

さらば幸多きナポールレオンは、

自らの經驗によりてバグラチオンの人物を知り、

ロシアのアルキードを苦しむることを敢てなさざらん。

けれど、その詩を読み終らないうちに、給仕長が、「お食事の仕度が出来ました！」と、よく徹る聲で高らかに言つた。扉が開いて、「勝鬨揚げよ、勇ましきロシア人、樂しく歌へ」といふ舞踏歌の調べが食堂からドツと響いて來た。

イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は、未だ詩を読みつゞけてゐる作者の方を腹立たしきうに睨みながら、食堂に這入つて呉れといふ合圖として、バグラチオンに叩頭した。

合衆一同は詩よりも、食事の方が大切だと思ひながら、立ち上つた。バグラチオンは、又も人々に先立つて、食堂に這入つて行つた。二人のアレキサンドル——ベクレシヨーフとナリーシキン——の間の名譽の席に、バグラチオンを坐らせた、(これも亦皇帝の名に因んで態とかうしたのであつた)。三百人の人々は、その階級や身分に従つて、食卓のまはりに並べられ、高い身分の人が、この名譽噴々たる主賓の近くに位置を占めた——丁度水が水平を見出さうとして流れると同様に頗る自然に。

食事が始まる直ぐ前、イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は、自分の息子を公爵に紹介はせた。バグラチオンは、その息子を思ひ出して、不器用な、連絡のない事を二言三言云つた——尤もその日彼の喋つた事はみんなさうだつたのだが。イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は、バグラチオンが自分の子供に話しかけてゐる間大得意で、みんなを見まはした。

ニコライ・ラストフは、チェニソフと、それから近頃友達になつたダラホフと三人して、殆んど食卓の眞中の處に一緒に坐つてゐた。三人に向ひ合つて、ビエールがネスギーツキイ公爵と一緒に坐つてゐた。イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は、他の幹事等と共に、バグラチオンの眞向ひに坐つてゐたが、モスクワ式款待の化身ともいふべき彼は、極力公爵をもてなした。

彼の勞力は、無駄にはならなかつた。饗宴全體が——肉類も四十日齋の精進料理も同じやうに——素晴らしいものであつたが、それでも尙ほ伯爵は、食事の終るまで、全く心を安めることが出来なかつた。カアヴァー(肉を截り盛りする人)に合圖をしたり、従僕に小聲で何やら指圖をしたりしては、準備して置いた皿が一つ／＼持つて來られるのを、そは／＼して待つてゐた。何がら何まで申分がなかつた。

二品目の皿は、大きな鱈魚で、(それを見たイリヤ・アンドレーキッチは、恥しいやうな嬉しさに顔を眞赤にした)従僕は鱈の骨をボンと抜いて、シャンペンを注いで廻り出した。

大分好評を博したその魚の後で、イリヤ・アンドレーキッチ伯爵は他の幹事等と眼を交はして、「屹度澤山乾杯があるだらうから、そろそろ始めるとするか！」かう囁いて、杯を手にして立上ちつた。満場はひつそりして、何を彼が言ひ出すかと待つてゐた。

「吾々の君主たる皇帝陛下の御健康を祝し奉ります」彼はかう叫んだ、と、その瞬間彼のやさしい眼は、歡喜と熱情

との涙にうるんだ。同時に樂隊は、「勝鬨揚げよ」の曲を奏し出した。一同は、自分等の席に立上つて、「萬歳」と、叫んだ。と、バグラチオンは、シエーングラアベンの野で叫んだ時と同じ聲で、やはり「萬歳」と、叫んだ。

若きラストフの熱心な聲は、他の三百名の聲々を壓して聞えた。彼は、殆んど涙を流さんばかりとなつた。

「天皇陛下萬歳！」と、彼は叫んだ。「萬歳！」一息に杯を飲み干して、それを床に叩きつけた。多くの者がその例に従つた。そして、高い叫聲は長い間つゞいた。やがて騒ぎが静まると、従僕等が破砕れた杯を掃き出し、一同は再び自分等の席につき始めた。そして自分等のした騒ぎを微笑しながら、喋りだした。

イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、もう一度立ち上つて、自分の皿の傍に置いてあつた手控にチラリと眼を呉れて、今度は最近の戦役の英雄ビョートル・イワノキツチ・バグラチオン公爵の健康のために乾杯しようと言ひ出した。さう言つた伯爵の青い眼は、又もや涙に霞んだ。「萬歳！」と、再び三百人の客人の聲々が叫んだ、そして今度は樂隊の代りに、歌謡手等の合唱が、パウエル・イワノキツチ・ツウゾフの作つた合唱歌をうたひ出した。

如何なる障もロシア軍を止むる能はず、

勇氣は勝利の保證なり、

我に多くのバグラチオンあり、

敵はみな我等が脚下にひれ伏さん」云々

歌謡手等が歌ひ終るや否や、又も乾杯に乾杯を重ねたが、イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、益々感動するばかりであつた。そして、更に杯が破られ、更に一層の騒ぎがあつた。彼等は、ベクレシヨーフや、ナリーシキンや、ウワーロフや、ドルゴルコフや、アブラークシンや、ワルーエフ等の健康を祝し、幹事たちの健康を祝し、委員たちの健康

を祝し、俱樂部全體の健康を祝し、俱樂部の客人全體の健康を祝し、そして最後に、特に、今日の宴會の主宰者たるイリヤ・アンドレーキツチ伯爵の健康を祝して、杯を乾した。その乾杯を見た伯爵はハンカチーフを取り出して、その中に顔を隠しながら、實際に泣いた。

#### 四

ビエールは、ダラホフやニコライ・ラストフと向ひ合ひに坐つてゐた。彼は、いつものやうに食ふやうに食べたり、盛んに飲んだりしてゐた。が、多少彼を知つてゐるものは、その日彼の上に何か非常な變化が起りかけてゐるのを見抜くことが出来た。彼は、食事中ずつと黙り込んでゐた。眼をしばたゝいたり、きつと見詰めたりして、自分のまはりを見まはしてゐるかと思ふと、まるで、ぼかんとした様子をして、何ものかに眼を見据ゑながら、指で鼻柱をこすつてゐた。その顔は悄然として陰氣であつた。自分の周圍に起つてゐる事などは見も聞きもしないで、何か一つの苦しい、不安な事を考へてゐるらしかつた。

彼を苦しめてゐる此不安な疑惑は、モスクワで従妹の公爵令嬢から、ダラホフが自分の妻と大變仲が好いといふ事を諷つけられたのと、今朝受け取つた匿名の手紙とによるのであつた。その手紙は、總ての匿名の手紙に特有な陋劣な滑稽な調子で、貴下は眼鏡をかけてゐられるが、物事がはつきりお見えにはならないらしいとか、貴下の奥さんとダラホフとの關係は公然の秘密で、知らぬは貴下ばかりである、とか書いてあつた。

ビエールは、公爵令嬢の諷言も、この匿名の手紙も、共に全く信じはしなかつたが、併し、それでも今自分と向ひ合つて坐つてゐる、ダラホフの顔を見るのは恐ろしかつた。視線が偶然にもダラホフの美しい、罪のない眼と會ふ度に、ビエールは、何から恐ろしくてゾツとするやうなものが、魂の中につけて来るかのやうな気がした、そして急いで横を向いてしまつた。進まぬながらも、自分の妻のすべての過去の事や、ダラホフに對する態度などを思ひ起して見ると、手紙に言はれてゐる事は全く本當かも知れない、尠くとも自分の妻の事を言つてゐるのでなかつたら、本當と思はれるかも知れないといふ事が、ハツキリ解つた。

ビエールは、ダラホフが、すつかり以前の位階に復して、ペテルブルグに歸り、自分を訪ねてきた時のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。ダラホフは、昔の亂暴な時代に親しい友達だつた縁故から、眞直ぐにビエールの家へやつてきた。ビエールは、彼を自分の家にと泊めて金を貸してもやつた。ビエールは、エレンが微笑しながら、ダラホフが家に滞在することに就いて不満を唱へた事や、ダラホフが自分に向つて妻の美しさを皮肉に賞めたことや、そして自分等がモスクワにくる時まで、ダラホフは一度も自分等の處から去らなかつたことなどを思ひ出した。

「さうだ、あの男は素敵な好男子だ、」と、ビエールは考へた、「俺はあの男の心持を知つてゐる。俺が自分からあの男の爲めに盡してやつたり、世話してやつたり、助けてやつたりしてやつたものだから、あの男は却つて俺の名を恥しめたり、俺を笑ひものにしたたりすることに、一種特別な面白味があるのだらう。若し、あのことが事實とすれば、俺を裏切ることが彼奴に取つて、何んなに面白いものなのだか、俺は知つてゐる、俺には解る。さうだ、若し事實だとすれば、だが俺には、それが信じられない。俺には、それを信する権利もなければ、又信することも出来ない。」

ビエールは、ダラホフが、巡査を熊の背中に縛りつけて、川の中に投げ込んだ時や、全く腹を立てる何の原因もな

いのに、或る男に決闘を申し込んだ時や、ピストルで以て一撃の下に橋馬車の馬を殺してしまつた時などのやうに、慘酷をする時、その顔に浮べる表情を思ひ起した。あの表情が、彼を見てゐる時よくダラホフの顔に現はれた。

「さうだ、彼奴は決闘好きの暴漢なんだ、」と、ビエールは考へた、「彼奴に取つては人一人殺す事なんか何でもないんだ、屹度すべての人間が彼奴を恐がつてゐると思つてゐるのだ。それが彼奴は好きに違ひない。屹度彼奴は、俺が彼奴を恐れてゐると思つてゐるのだ。それに、實際俺は彼奴を恐れてゐる、」ビエールは、かう考へ込んだ。と、再びかういふ考へから、何やら恐ろしいゾツとするやうなものが、自分の魂の中に起りかけてゐるやうな気がしてきた。

ダラホフとヂエニツフとラストフとは、相變らずビエールと向ひ合つて坐つてゐたが、大變愉快さうに見えた。

ラストフは、楽しさうに二人の友達——その一人は勇ましい驃騎兵で、今一人は名代の決闘家の浮浪漢であつた——に話をしては、折々ビエール(彼の晩餐會に於ける様子は、屈托した、ボカンとしてゐる大様な姿の爲めに、目に立つてゐた)に皮肉な視線をチラリ／＼と投げた。ラストフは、排斥するやうにビエールを見つめた。それは、第一には、彼のやうな氣の利いた驃騎兵の眼には、ビエールが金持の平人で、美人の良人で、そして實際いはゆるお婆さんであつたからである。第二には、ビエールは屈托してボカンとしてゐて、ラストフを認めず、叩頭したのに對しても、つひ禮を返さなかつたからである。人々が立上つて、皇帝の健康を祝して飲んだ時にも、思ひに沈んでゐたビエールは、立上りもしなければ、盃を取り上げもしなかつた。

「あなたは一體何うしたのですか?」と、ラストフは熱心な荒々しい眼をして彼を眺めながら怒鳴つた。「聞えないんですか。吾々の君主たる皇帝の御健康を祝するんですぞ!」

ビエールは、溜息をして夫れに従ひ、立ちあがつて盃を乾し、みんな再び腰を下すのを待つて、やさしい笑顔をラ



スタッフの方へ向けた。「おや、君に気がつきませんでした。」と、かう言つた。だが、ラストフは、彼のことは何とも思つてゐなかつたので、「萬歳！」を叫んでゐた。

「何故元々通りに知己にならなんだい？」と、ダラホフがラストフに言つた。

「いや、あんな奴、彼奴は馬鹿です。」と、ラストフは言つた。

「別品の良人には優しくするもんだぜ。」と、ヂエニツフが言つた。ビエールは、三人の言葉は聞えなかつたが、自分の事を言つてゐるのだといふ事は解つた。彼は、顔を赤くして横を向いた。

「それぢや今度は一つ美人の健康を祝さうよ。」ダラホフは、かう言つて、口の兩隅に微笑を隠してはゐるが生眞面目な表情をして、ビエールの方へ向いた。

「美人の健康のために、ペトルーシヤ、そして又彼等の戀人のために。」と、彼は言つた。

ビエールは、眠を落したまゝ、ダラホフの方を見もしなければ、何とも答へもしないで、盃を吸つてゐた。

クツウゾフの合唱歌の寫しを配つてゐた從僕は、主立つた方の客人の一人としてビエールの側に一枚置いて行つた。

ビエールが、それを取らうとすると、ダラホフが前に乗り出してきて、彼の手からその手紙を引奪つて讀み出した。

ビエールは、ダラホフの顔をチラリと見て、直ぐ眼を落した。食事の間ずつと心を苦しめてゐた何やら恐ろしい、ソツとするやうなものが起き上つて、彼を捉へた。彼は、その不様な躰をズツとテーブルの上に乗りに出した。

「取る奴があるか！」と、彼は叫んだ。

その叫び聲を聞いて、それが誰に向つて言はれてゐるのかを見たネスギーツキイと、その右隣りの男とは、吃驚して狼狽して、ベズウボフの方へ振り向いた。

「まあ、まあ、一體何うしたといふんだ？」と、おどろした聲々が囁いた。

ダラホフは、矢張り同じやうな微笑を浮べ、その明るい、愉快さうな、残酷な眼で、かう言ふかのやうに、ビエールを眺めた。

「さア來い、俺の勝手だ。」

「返してはやらんよ。」と、彼はハツキリと言つた。

眞背になり、唇をふるはせて、ビエールは詩の寫しを引奪つた。

「貴様……貴様……破落戸！……決闘しよう。」かう言つて彼は、椅子を脊後へ除け、食卓から立上つた。

ビエールは、かうして、こんな言葉を言つた瞬間、二十四時間のあひだ自分を苦しめてゐた妻の不貞といふ疑問が、たうとう、間違ひなく、さうだと答へられたやうな氣がした。彼は、妻を憎んだ。そして永久に彼女から離れてしまつた。

ヂエニツフが、ラストフをこの事件と關係させまいとして、いろ／＼懇願した甲斐もなく、ラストフは、ダラホフの介添人となることを承諾した、そして食事が済んでから、ベズウボフ(ビエール)の介添人のネスギーツキイと、いろ／＼の決闘の手筈の事を論じ合つた。ビエールは、家に歸つた、けれどラストフはダラホフとヂエニツフと一緒に俱樂部に止つて、夜遅くまで、ジブシイや歌謠手たちの歌に耳を傾けてゐた。

「それでは又明日、ソコルニキイで。」と、俱樂部の階段でラストフと別れる時、ダラホフが言つた。

「て、君は全く平氣なかい？」と、ラストフは訊いた。

ダラホフは立止つた。

「ねえ君、僕はたった一言で君に決闘の秘訣を教へてやるよ。決闘に出て行くのに遺言状を書いたり、両親に向つて長い手紙を書いたり、又自分が殺されやしまいかなんて思つたりすれば、そいつは馬鹿で、その通り殺されるよ。そんなぢやなくて、何でも出来るだけ早く確實に、相手を殺さうといふ確固とした信念を抱いて出かけて行き給へ。さうすれば萬事が都合よく行くもんだ。コストロマの熊殺しがよく僕に話したよ、(熊ですかい)と奴は言つたけ、「誰だつて熊の恐くねえ人間はありませんや。だが熊にぶつつかつたとなつたら、もう恐い事なんか何處かへ行つちまつて、唯逃がしてなるもんかつて思ふだけでさア!」と、かうだ。ねえ、僕のいふのも丁度それと同じ筆法だ。A dem-ain, mon cher(ちや明日、ね)」

翌日の午前八時に、ビエールとネスギーツキイとがソコルニキイの森に着いて見ると、もうダラホフとヂエニソフとラストフとは、そこに來てゐた。ビエールは眼の前の事件とは何の關係もない回想に耽つてゐる人のやうな様子をしてみた。その顔は、やつれて、黄色く見えた。彼は昨夜、夜もすがら眠らなかつたのであつた。彼は、ボカンとして四邊を見廻まはし、眩しい太陽の中にもゐるやうに眼をしかめてゐた。彼は、専ら次の二つの考へに耽つてゐた。一夜を眠らずに考へた後では、もう疑ふ餘地の一點もなくなつた妻の不貞といふ事と、そして、自分に取つて何でもない男の名譽を守る義務などは決して持たないダラホフには、罪がないのだといふ事と。

「恐らく俺が彼奴の場合に立つたら、やつぱり同じ事をやつたかも知れないぞ」と、ビエールは考へた。「實際儘かに同じ事をやつたに違ひない。とすれば、何のために此決闘だ、この人殺しだ? 俺が彼奴を殺すか、それとも彼奴が俺の頭か肘か或は膝を打貫くか何方かだ。此處から逃げ出して、何處かに身を隠すことが出来たら、これが彼の心に浮んで來た望みであつた。」

だが、かういふ考へが心の中に浮んでゐるその瞬間、彼は、彼を見てゐた介添人達に尊敬の念を起させたやうな、特別に平靜な、無頓着な顔をして、振り向き、「もう直きですか?」とか、「もう宜かアないですか?」とか、訊くのであつた。

萬事仕度が出来上つて、境の線を記すために劍が雪の中に突き刺され、そしてピストルに弾丸がこめられると、ネスギーツキイはビエールの側に近づいて行つた。

「僕は自分の義務を果さないことになるんです、伯爵」と、ネスギーツキイはおど／＼と言つた。「又あなたが介添人として僕をお撰び下すつたその信任と名譽とを辱めることになるんです、この嚴肅な剝削に、この非常に嚴肅な剝削に、若し、私があなたに眞實のことを言はなかつたら。私は此争闘は十分な根據がなく、血を流す價值がないと思ひます……あなたが善くありません、全く善くありません。あなたは正氣を失つたのです……」

「お、さうです、實に馬鹿な事でした」と、ビエールは言つた。「それぢや、あなたの後悔を私が先方に通じて來るのを許して下さい。屹度吾々の敵手はあなたの辯解を受ける事を承知しますよ」と、ネスギーツキイが言つた。(此男は此事件に立ち合つてゐる他の人々と同じやうに、又かういふ事件に立ち合ふ總ての人々と同じやうに、この喧嘩が實際の決闘になるなど、は信じられなかつた)「ねえ、伯爵、物事を抜き差しならぬ所まだ推し進めるよりは、自分の失敗を認める方が、餘つ程氣高い事です。双方とも大した罪はないんですよ。では、先方に傳へる事を許して下さい……」

「いゝや、君は一體何を言つてゐるんです?」と、ビエールは言つた。「そんな事は何うだつて構ひません……では用意が出来ましたか?」と、彼は言ひ添へた。「たゞ僕がどんな風にして、何處に行けばいゝのか、そして何處を狙つ

たらいゝのか、それだけの事を教へて下さい。」不自然に優しい微笑をうかべて、彼は言った。彼は、ピストルを取り上げた、そして今までピストルを手にした事がなかつたものだから、その事を白状するのは厭だつたけれど、何うして発射するのか尋ねはじめた。「あゝ、さうです、勿論、僕は知つてゐる、唯忘れてゐたんです。」と彼は言った。

「辯解なんかするもんか、斷じて何もしない。」と、ダラホフは、これも和解させようと盡力してゐるヂエニソフに向つて、かう言つて、やがて彼も亦指定された場所に進み寄つた。

決闘場として選ばれた場所は、この二三日暖い天候のために溶け出した雪に蔽はれてゐる、松の森の小さく切り開かれたところで、彼等の櫓の残してある往來からは八十歩ばかり隔つてゐた。敵同士は、その切り開かれた空地の向ふ端に、互ひに四十歩の距離を置いて立つた。介添人達は、歩数をはかる時に、自分等の立つてゐる處から、境界を記すために十歩の間隔を置いて、地面に突き刺してあるネズギーツキイとヂエニソフとの剣に至る間の、深い、濕つた雪の中に足跡を残した。雪解と霧とは未だ續いてゐた。四十歩を離れると何ももの見えなかつた。三分間のうちに總ての仕度は整ふたけれども、未だ始めるのを延ばしてゐた。誰も黙り込んでゐた。

## 五

「さア、始めよう。」と、ダラホフが言つた。

「無論、」と、ビエールは矢張り同じやうに微笑を浮べて言つた。

恐怖の感情があたりに充ち渡つてゐた。何でもな事から起つた事件が、今はもう元へ引き戻す術もなくなり、人間の意思に逆らつて勝手に進み出し、行く處まで行かなければ止まらなくなつたといふ事が明かであつた。ヂエニソフが、先づ境界のところに進み出て、こんな言葉を發した、――

「お互ひに總ての和解を拒絶した以上は、始める方が好いだらう。さアピストルを取つて、「三」と言つたら一緒に進みだし給へ。さア……一！ 二！ 三！……」ヂエニソフは、怒つたやうにかう叫んで、境界線から身を退いた。

二人は、踏みつけられた足跡の上を次第に近く進み寄つて、霧の中に互ひの姿を認めるやうになつた。決闘者は、境界線に近づいた時、勝手に時を撰んで發射する権利を持つてゐた。ダラホフは、ピストルを上げないで、その明るいキラ／＼した青い眼で、ちつと自分の敵手の、顔を見詰めたが、そり／＼と進んだ。その口は、いつものやうに、何やら微笑に似たものを浮べてゐた。

「それぢや、勝手な時に射つてもいゝんだね。」と、ビエールは言つた、そして「三」といふ言葉をきくと足早やに歩き出したが、踏みつけた足跡を踏み迷つて、足跡のない雪の上に踏み出したりした。ビエールは、そのピストルで自分自身を射ちはすまいかと恐れてゐたらしく、一ばいに右の手を張つてピストルを持つてゐた。何だか右の腕を支へさうになるやうな氣がしたので、そして、それは禁じられてゐる事を知つてゐたので、彼は態と左の腕を脊中の方へまはしてゐた。

六歩進んで、足跡から雪の中に乗り出してから、ビエールは自分の足許を眺めまはし、それから再びチラリと素早くダラホフの顔に眼を呉れたかと思ふと、教へられた通りに指を伸ばして發射した。そんなに大きな響きがしよう

は少しも豫期しなかつたので、ピエールは自分の發射に、ぎよつとした、が、やがて、自分の感覺を冷笑して、靜かに立つてゐた。霧のために一層濃くなつた煙が、最初は彼に何にも見せなかつた。けれど、期待してゐた敵の發射は聞えなかつた。聞えたのはダラホフの早い足音であつた。そしてその姿が煙の中に見えてきた。ダラホフは片手で左の脇腹を掴み、もう一方の手で下げたピストルを攫んでゐた。ラストフがその側に駈け寄つて、何やら言つてゐた。

「い……い……いや、」と、ダラホフは、齒の間から呟いた。「いや、未だ終ひぢやないんだ、」そして倒れさうな、よめいた歩調で二三歩劍の方へぢたばた歩いて行つて、その傍の雪の上に倒れた。左の手が血で蔽はれてゐるので、それを上衣でこすり、その手で身を支へた。顔は眞青で、擧げて、震へてゐた。

「さ……」と、ダラホフは言ひ出したが、直ぐにその言葉をハツキリと言ふことは出来なかつた。「さア、」と、やつとの事て言つた。

ピエールは、歎息をしない許りになつて、ダラホフの方へ駈け出し、二つの境界線の間の地面を横切らうとした。すると其時、「境界線へ！」と、ダラホフが叫んだ。ピエールは、その意味を了解して、劍のところへ立ち止つた。二人の間は、たつた十歩しか隔つてゐなかつた。ダラホフは頭を下げて、貪るやうに雪を噛み、再び頭を上げて身を起し、立上らうと試みたが、しつかりした重心點を見出さうとして又腰を下した。彼は、冷たい雪を一口ぶり取つて、それを吸つた。唇は顫へたけれど、それでも矢張り微笑してゐた。眼は衰へて行く力を引き止めようとする争闘の緊張と激怒とに輝いてゐた。彼は、ピストルを上げて、狙ひを定め出した。

「斜めになれ、ピストルの眞正面に立つな、」と、ネスギーツキイが言つた。

「眞正面に向ふな！」チエニツフも、敵に對してはあがあるが、かう叫ばずにはゐられなかつた。

同情と後悔との温順な微笑をうかべて、ピエールは力なく腕を開き、腕をだらりとして、その廣い胸を眞直ぐにダラホフの方へ向けながら、悲しさうに敵を見てゐた。チエニツフとラストフとネスギーツキイとは、眼を見張つた。その途端、短銃の音とダラホフの激怒した叫び聲とが聞えた。

「失錯つた！」ダラホフは、かう叫んで、雪の中に、顔を俯伏せにして、力なく倒れた。ピエールは、自分の頭を掴んで、後を向き、取り止めのない言葉を高い聲で呟きながら、雪の中の小徑から、森の中に這入つて行つた。

「馬鹿な……馬鹿な！ 死……虚偽……」と、顔を擧めながら彼は繰返しつゞけてゐた。ネスギーツキイは、彼を引き止めて、家に連れて行つた。

ラストフとチエニツフとは、負傷したダラホフを運び去つた。

ダラホフは、眼を閉ぢて、黙つて櫓の中に横倒り、いろ／＼訊かれる間に對して一言も答へなかつた。が、モスクワに這入る頃になつて、彼は急に我に返り、やつとこのことで頭を持ち上げながら、自分の傍に坐つてゐるラストフの手を取つた。ラストフは、ダラホフの顔に浮んでゐる、まるつきり變つた、思ひがけない熱烈な優しい表情に心を動かされた。

「何うだね？ 気分はどうだね？」と、ラストフは尋ねた。

「悪い！ 併しそんな事はどうでもいゝんだ。なア、君、」ダラホフは、可細い聲でかう言つて、「此處は何處だね？

あ、モスクワだね。僕はどうでもいゝ、だが僕は彼女を殺した、彼女を殺したのだ……彼女には此事が耐るまい。

彼女には堪へられない……」

「誰の事だ？」と、ラストフは訊いた。

「僕の母さ。僕の母、僕の天使、僕の愛慕する天使、僕の母さ、」と、ラストフの手を握り締めながら、ダラホフはツと泣き出した。で、少し沈着いて来ると、自分は母と一緒に暮してゐる、若し自分の死ぬのを見ようものなら、母は驚愕に堪へることは出来ないだらう、とラストフに話した。そして、ラストフに母のところへ行つて、覺悟させて置いて呉れと懇願した。

ラストフは、その頼みを果してやるために、一足先に櫓を走らせた。そして、非常に驚いたことには、ダラホフが、この風暴者の、名代の決闘家のダラホフが、モスクウで年老つた母と、一人の駝背の妹と一緒に暮してゐて、而も最も優しい息子でもあり、兄でもあつたといふことを彼は知つた。

## 六

ピエールは、近頃妻と二人つきりになつた事はめつたに無かつた。ペテルブルグでもモスクワでも、二人の家は絶えず來客で一杯であつた。

決闘した日の夜は、彼は寢室には行かないで、何時もよくするやうに、夜つびで廣い書齋で過した。その書齋は、昔の父の部屋、誠にベズウホフ伯爵の死んだ、その部屋であつた。

彼は、寢椅子に横になり、自分の身に起つた凡てのことを忘れるやうに、眠らうとしたが、さうする事が出来なかつた。感情と思想と回想のはげしい嵐が、急に魂の中に起つて來て、眠るは愚か、一所にぢつと坐つてゐる事さへも

出來ず、寢椅子から跳ね起きて、早い足取りで、部屋の中を歩きまはられずにはゐられなかつた。

或る瞬間には、結婚してから間もない時分の、肩を裸かにし、倦怠したやうな、熱情に燃える眼を持つた妻の幻を描いたが、やがて忽ち、その妻の傍に、宴會の時に見たやうな、美しく無作法な、無情な、皮肉なダラホフの顔を見た、それから又、雪の中へ跟めき倒れた時の、苦痛のため眞背になつて顔へてゐる同じダラホフの顔を見た。

「一體どうしたといふんだ？」と、彼は自ら尋ねた。「俺は、あの女の戀人を殺したのだ。さうだ、妻の戀人を殺したのだ。さうだ、さういふ事が起つたのだ。何故なんだらう？ 俺は何うしてこんな事になつたんだらう？」

「それは、お前がその女と結婚したからだよ、」と、心の聲が答へた。

「だが、何うして俺に罪があるんだらう？」と、彼は訊いた。

「お前が、あの女を愛してもせずに結婚したからだ、自分をもあの女をも欺いたからだ。」

そして、自分がワシーリイ公爵の家で、晚餐の後で、あの大變に言ひ難い「僕はあなたを愛してゐます」といふ言葉を言つた時の事をあり／＼と思ひ出した。

「みんな、あれから來たのだ。その時でさへ俺はさう感じたんだ、」と、彼は考へた。「その時でさへ、かういふ事は悪い事だと俺は感じてゐたのだ、あんな事をする権利は、俺にはないと感じてゐたのだ。そして、その通りになつてしまつたのだ。」

彼は密月を思ひ出し、その追憶で顔を赤らめた。殊にあり／＼として、頭が上らぬ位恥しいのは、結婚後間もない、ある日の記憶であつた。晝の十二時に絹の寢間着をきて、寢室から書齋に出て來て見ると、書齋には執事頭がゐて、恭々しく叩頭をしたが、ピエールの顔と、その寢間着とを見て、かすかに微笑んだ、夫れがまるで、その微笑に

よつて、恭々しく主人の幸福に對する同情を表はさうとしてでもゐるやうであつた。

「そして俺は、幾度彼女の事を誇り、彼女の莊嚴な美を誇り、彼女の交際の如才なさを誇つたものだらう、」と、彼は考へた。「彼女がベテルブルグ中の人々を招待した俺の家を誇り、彼女の近づき難いこと、美しさを誇つたものだらう。俺はこんなことを自分で誇つてゐたのだ。その時分俺は、彼女を自分で理解してゐないと思つてゐたものだ。彼女の性質を考へて見れば、俺は自分に向つて、自分が悪いのだ、自分は彼女を理解してゐない、彼女は果てしない沈着と満足とを持つてゐて、物を擇り好みする性質や慾望などが缺けてゐるといふ事を理解してゐないと、幾度言つたものだらう。だが、その謎は、總て、彼女が放埒な女なのだ、といふ恐ろしい一語に解かれてゐる。俺はその恐ろしい言葉が解つた、そして何も彼も明かになつた。」

「アナトールは、いつも彼女に金を借りに來ては、彼女の裸かの肩をキスして行つた。彼女は金は出さなかつたが、併しキスは許してゐた。彼女の父親は、冗談を言つて、よくあの女に嫉妬を起させようとしたが、落着いた微笑をうかべて、自分は嫉妬なんか起すやうな馬鹿ぢやないとよく言つてゐた。良人の仕度い放題にさせて置けばいゝんです、かう彼女は俺のことを言つてゐた。俺がある時、お前は妊娠らしい兆候はないかと訊いたら、彼女は侮辱するやうに笑つて、自分は子供なんか欲しがらうな馬鹿ぢやない、一生あなたの子供は生みません、と、言つた。」

それから彼は、妻の思想の粗野で愚鈍なことや、最も高貴な貴族社會の生れでありながら、一種獨特な、下品な表情をする事などを考へた。「私そんな馬鹿ぢやなくつてよ」とか、「あなたまアやつて御覽なさい」とか、「*Allez vous en, onener, 散歩をなさいな*」とか、彼女はよく言ふのであつた。

妻が若者にも老人にも、男にも女にも感じの好い印象を與へてゐるのを見ると、よくピエールは、何故自分が妻を

愛し得ないのか解らなかつた。「さうだ、俺は今まであの女を愛さなかつたのだ、」と、ピエールは自分に向つて言つた。「俺は、あの女が放埒な女だ、といふ事を知つてゐたのだ、」と、心に繰返した。「而も俺は自分に向つてそれを白狀し得なかつたのだ。」

「それからダラホフは何うだ。あの男は雪の中に坐つて、無理に笑顔を作つてゐる、そして恐らく何だか氣取つたやうな風をして俺の後悔に答へながら、死んでしまふのだ。」

ピエールは、所謂見かけの弱い性格なものにも拘らず、自分の悲哀を打明けるべき友を求めようとはしないといふ種類の人間の一人であつた。彼は、自分の苦痛は自分一人て引受けた。

「彼女が、彼女一人が總ての罪を背負はなければならぬんだ。」と、彼は考へた。「けれど、夫れが何うしたんだ？俺は何うして彼女と自分を結びつけたのだ？（お前を愛してゐる）など、何うして言つたのだ、それは偽だつたのだ、偽より、もつと悪るかつたのだ、」と、心に言つて、「俺に罪がある……俺は受けなければならぬ……何を？自分の不名譽をか、一生の不幸をか？ いや、そんな事は些細な事だ、」と、思つた。「人間の不名譽、そんなことは凡て相對的なことだ、そんな事は凡て、自身から離れたことなのだ。」

「ルイ十六世は、人々が、彼は恥づべき罪人である、と言つたので、處刑された（かういふ考へがピエールの心を横切つた、）そして、さう言つた人々は、彼等の見地から見れば正しかつた、と同様に、ルイ十六世のために殉教者となつて身を捨て、ルイ十六世を聖者として祭つた人々も亦正しいのだ。それからロベスピエールは暴君だといふので處刑された。一體誰が正しくて誰が間違つてゐるのだらう？ どつちも間違つてゐない。唯生きられるだけ生きる、俺が今一時間前に死んでしまつたかも知れないやうに、明日死なぬとも限らない。人生は、永遠と比較すれば、たつた

一瞬間に過ぎぬではないか、それなのに何でくよくよするものがある？」

だが、彼がさういふ事を考へ、自分が安靜になつたと思つてゐるその刹那に、不意にあの女の幻が、それも自分が最も不誠實な戀を、最も烈しく打明けた時のあの女の幻が浮んで来た、彼は、さつと血液が心臓に逆を覚え、再び跳り上り、動きまはつて、手に觸れるものは何でも、壊したり裂いたりして了はないではみられなかつた。

「何だつて俺は(お前を愛してゐる)など言つたらう？」と、彼は心の中で繰り返してゐた。で、この問を十度目に繰り返した時、「だが、あの悪魔め機帆船ガレイの中で何をしてみたらう？」と、いふモリエールの言葉が頭に浮んで来た、彼は自分を嘲笑つた。

その夜、彼は従僕を呼んで、ペテルブルグへ行くための荷造りを命じた。今は何んな風にして妻に話しかけて宜いものか、考へることが出来なかつた。一通の手紙を妻に残し、その中で、自分は永久にお前と別れるつもりだと云ふことを告げて、此處を去つてしまはうと決心した。

朝になつて、従僕が珈琲を持って書齋に遣入つて来た時、ピエールは、一冊の開いた書物を手にしたまゝ、丸棗椅子オットマに横になつて眠つてゐた。

彼は眼をさましたが、自分が何處にゐるのか分らなくて、長い間周囲を見まはしてゐた。

「奥様が閣下はお家うちだらうかとお尋ねでございます」と、従僕は言つた。

けれど、ピエールが何ういふ返事をしてやらうかと決心する暇もなく、伯爵夫人自身が靜かに、凛りんとした風で部屋に遣入つて来た。彼女は、銀の刺繍のある白繻子の寝間着をつけ、髪の毛を、二つの大きな巻髪にして、美しい頭に冠のやうに巻きつかせてゐた。彼女は平靜な様子をしてはゐたが、その稍や出額でびたいの大理石のやうな額に、痛癢筋を一つ

表はしてゐた。いつものやうな自制と安靜とを保つて、彼は、従僕が部屋を出て行くまでは口を開かなかつた。彼女は、決闘のことを知つてゐて、それに就て話して来たのであつた。で、従僕がコーヒーを置いて出て行くまで待つてゐた。ピエールは、眼鏡越しに、おづ／＼と妻の顔を眺めた、そして丁度大共に取りかこまれた野兎が、その敵の面前で、耳を後にうしろそらして臥るやうに、讀書をしようとしてみた。併し、それは馬鹿げた、不可能なことだと感じたので、再びおづ／＼と妻を眺めた。彼女は、腰を下ろさずに、蔑さげすむやうな微笑をうかべて良人を眺めながら立つて、従僕の出で行くのを待つてゐた。

「今度の事は一體何ういふんですの？ 何だつて、あんな事をなすつたのです？ ねえ、あなた、彼女は厳しく言つた。」

「僕が？ 僕が？ 何を？」と、ピエールは言つた。

「勇氣のある行爲をなさるつもりだつたのね！ さア、返辭して下さい、今度の決闘は何ういふ意味なのです？ 決闘をして何を證明しやうと思ひになつたのです？ え！ それを一つ私に聞かせて下さい。」

ピエールは、安樂椅子の上で重さうに向き返つて、口を開いたが、併し答へる事は出来なかつた。

「お答へなさいたくなければ、私が話して上げませう……」と、エレンは言葉をつゞけた、「あなた人の噂を悉く信じたんでせう。誰かあなたに言つたんでせう……」と、エレンは笑つた、「ダラホフが私の戀人だつて……」

あなたは夫れを信じたのです！ だけれど、あなたは今度の事で何を證明なさいました？ 今度の決闘で何を證明なさいました？ 御自分が馬鹿者だといふ事をせう、でも、そんな事は誰でも知つてゐますわ。そのお蔭で何んな事

になるとお思ひになつて？　ねえ、私がモスクワぢゆうの笑ひ草にされるといふ事と、それから、世間の人みんなが、あなたが酔拂つて、自分のする事が解らなくなつてしまつて、理由もないのに嫉妬して一人の男に決闘を申し込んだといふ噂をする事と、「エレンは聲を高めた、そして益々激昂してきた、而もその男といふのは有らゆる點で、あなたよりは良い人ですのに……」

「ふむ……ふむ……」と、ビエールは顔ぢゆうに小皺を寄せながら、妻を見もしなければ、筋肉ひとつ動かしもしないで、唸つた。

「そして、何うしてあの人が私の戀人だなど、お信じになつたのです？……え？　私があの人とお交際をするのが好きだからなんでせう？　若しあなたが、もつとお惻巧で、もつと愉快にしてみらつしやれば、私はあなたと御一緒にゐる方が好きになるでせうよ。」

「何も言つて呉れるな……頼むから、」ビエールは皺めれ聲で呟いた。

「言はないでゐるもんですか。私は言ひたいだけ言ひますわ。私思ひ切つて言ひますがね、あなたみたいな良人を持つた女で、戀人を拵へない人は餘り澤山はありませんよ、でも私は、そんな事はしなかつたんです、」かうエレンは言つた。

ビエールは、何か言はうとして、妻にはその意味が解らないやうな變な眼附でテラリと彼女を見たが、そのまゝ再び横になつた。彼はその瞬間肉體の苦痛を感じてゐた。胸に重いものが込み上げたやうな氣がして、息を吐くことが出来なかつた。この苦痛を止めるには、或る事をしなければならぬといふ事を知つてはゐたけれど、その爲ようと思ふ事は餘りに恐ろしかつた。

「我々は別れた方が好からう、」と、彼は皺めれ聲でハツキリと言つた。

「別れる、結構ですとも、たゞ私に財産を下さるさへすればね、」と、エレンは言つた……「別れるつて——それは私を恐がらさうとする嚇しでせう！」

ビエールは、寢床から跳ね起きて、ひよろ／＼しながら妻の方へ突進した。

「殺すぞ！」かう彼は叫んだ、そして今まで自分にあらうとは思はなかつた程の力を出して、机から大理石板を掴み上げると、一步妻の方へ進み、彼女を眼がけてそれを振つた。

エレンの顔は、見るも恐ろしさうであつた。彼女は金切聲を立て、良人の傍を飛び退いた。父の性質がビエールに現はれてきた。ビエールは、狂亂の忘我と魅力とを感じた。大理石板を叩きつけて、それをこた／＼に碎き、そして兩手を擴げてエレンに跳びかゝり、「出て行け！」と、家ぢゆうのものが、それを聞いて戦慄したほどの恐ろしい聲で叫んだ。若しその瞬間に、エレンが部屋の外に逃げ出さなかつたならば、實際ビエールは何んな事をしたか解らなかつた。

一週間後に、ビエールは自分の財産の大半をなしてゐる、大ロシアの領地全部の上り高を妻に譲つて、單身ベテルブルグへ行つてしまつた。



アウステルリッツ敗戦と、アンドレー公爵の戦死の報知とがロイシーヤ・ゴオリイに達してから、二ヶ月経つた。ロシア大使館を通じて種々搜索したり、書面を出したりして手を盡した甲斐もなく、アンドレー公爵の死體は終に見つからなかつたし、又彼は捕虜の間にもひなかつた。彼の父や妹に取つて一番困つた事は、彼が戦場で田舎の人々に救はれ、或は次第に恢復に赴きつゝあるか、それとも亦死にかけてゐるかは分らないが、何處かで、自分の身の上を話すことが出来ないで、見ず知らずの他人の間に、たつた一人臥てゐるかも知れないといふ希望が、尙ほ残つてゐた事であつた。

老公爵が、初めてアウステルリッツの敗戦を讀んだ諸新聞は、例によつてロシア軍は、赫々たる勝利の後退却の止むなきに至り、隊伍整々として退却せりといふ、頗る簡単な、不得要領な記事を掲載してゐた。

老公爵は、我軍の負けたといふことを此公報で知つた。その新聞がアウステルリッツの敗戦の報を傳へてから一週間後に、クツウゾフから一通の手紙がきて、老公爵の息子がその戦場で著した働きを知らせた。

「私の面前で、」かうクツウゾフは書いた。「貴下の御息息は手に聯隊旗を持ち、聯隊の先頭に立つて、父上及び祖國の名を恥しめない英雄のやうに倒れた。今に至るまで、御息息の生死不明なるは、私は固より、全軍擧つて遺憾とするところです。併しながら私は、御息息が、まだ生きてをられるであらうといふ希望を抱いて、自分を慰め、又貴下

をも慰めやうとして居ます。何故ならば、若しさうでないとすると、休戦の旗の下に送つて來た、戦場で發見された

將校の名簿の中に、貴下の御息息の名がある筈だからであります。」

この手紙を受け取つたのは夜遅く、丁度たつた一人で自分の書齋にゐた時であつたが、その翌日老公爵は何時ものやうに朝の散歩に出て行つた。併し、執事に會つても、園丁に會つても、建築技師に會つても、黙つてゐて、怒つたやうな顔はしてゐたが、何とも言はなかつた。

公爵令嬢アリヤが、何時もの時間に這入つて行くと、老公爵は旋盤の傍に突つ立つてゐたが、嬢の方へは振返らずに、何時ものやうに夫れを廻してゐた。

「あゝ？ アリヤ嬢かい！」かう彼は不自然な聲で急に言つて、旋盤を放した。輪は惰力で未だぐる／＼廻つてゐた。公爵令嬢マリヤは、その輪の軋る音の消えて行くのを、その時續いて起つた事と聯結させて、永い間記憶してゐた。公爵令嬢マリヤは、父の傍へ行つて、その顔を見た、と不意に、何もかも自分の體の中で、ぐつたり弛んでしまつたやうな氣がした。眼はもうハッキリ物を見ることが出来なくなつた。悲しさうでも、絶望してゐるやうでもないが、恨みを含んだやうな、法外な苦悶に充ちてゐる父の顔から、人生の中で最も悪い、或る恐ろしい不幸、自分が今まで知らなかつた不幸、取り消すことの出来ない償ひ得べからざる不幸——愛する者の死——が、自分の身に落ちかゝつて來たのだ、自分を壓倒しに襲つてきたのだといふ事をマリヤは知つた。

「お父様！ アンドレーのことは……」と、不經綫で不様な公爵令嬢は、父が、その目を見るに堪へられなくて啜り泣きながら横を向いた程の、悲哀と忘我との何とも云へぬ美しさを浮べて、かう言つた。

「報知があつた。捕虜の間にも戦死者の間にも見つからんとクツウゾフが手紙で言つて寄越した」と、老公爵は、そ

の叫び聲で娘を追ひ出さうとでもするやうに、鋭く叫んだ。「戦死したのだ！」

公爵令嬢は、氣絶もしなければ、卒倒もしなかつた。一體顔が青かつたが、それ等の言葉を聞くと、その顔は變り、美しい涼しい眼には、何もつかの光輝が現はれた。この世の悲しみや喜びとは異つた一種の喜悅、歡喜ともいふべき何物か、心の中に感じた苦い悲哀の上に漲つた。彼女は、父を恐ろしいと思つてゐる事をすっかり忘れてしまつて、父の傍に進み寄り、その手を取つて自分の方に引き寄せ、父の姿を眺めた、節張つた頸のまはり腕を巻きつけた。

「お父様、」と、彼女は言つた、「私の傍を離れないで下さい、二人して一緒に兄さんの爲めに泣きませう。」

「被落戸奴等が、惡黨共が！」と、老人は娘から顔を反向け叫んだ。「軍隊を滅し、人間を滅しをつて！ 何のためなのだ？ さア、彼方へ行つて、リザにさう言つて來なさい。」

公爵令嬢マリヤは、父の傍の肘掛椅子に力なく沈んで、ワツと泣き出した。優しい、が同時に傲慢な表情をして、自分マリヤから別れて行つた時の兄の様子を、今眼の前に浮べることが出來た。優しく、皮肉に聖像を身につけた時の兄の姿をも思ひ浮べた。「今は信じてゐらつしやるだらうか？ 御自分の不信仰を悔いてゐらつしやるか知ら？ 今何處にゐらつしやるのだらう？ あの永遠の平和と祝福とのお國にか知ら？」と、思ひ惑つた。「お父様、何うしたのですか聞かして下さい、」と、彼女は涙ながらに尋ねた。

「あつちへ行け、行け——ロシアの好人間共とロシアの名譽とを廢滅させてしまつた敗戦で殺されたんだ。あつちへ行け、マリヤ嬢。リザにさう言つて來なさい。私も行く。」

公爵令嬢マリヤが父の處から歸つて行つた時、小さい公爵夫人は、坐つて仕事をしてゐた、そして、妊娠してゐる女に特有な、幸福らしい安らかさを負びた、あの一種獨特な、物の内部を見やうとするやうな眼付で見上げた。その

眼は明かに、マリヤを見てゐるのではなく、自分自身の内部を深く、——自分の體の中に出來上りつゝある、或る幸福な神祕を眺めてゐるのであつた。

「マリイ、」と、小さい公爵夫人は、刺繡臺から離れて、後に凭れながら言つた、「手を貸して頂戴。」彼女は義妹の手を取つて、それを自分の腹に當てた。その眼は、何物かを待ち設けるやうに微笑し、その柔毛のある唇は上り、子供らしい歡喜を負びて其儘になつてゐた。

公爵令嬢マリヤは、その前に跪いて、義姉の着物の褶に自分の顔を隠した。

「そら……そら……解るでせう？ 私變な氣がしてよ。そしてね、マリイ、私大變あの方が好きになつて行くんですよ、」と、リザは、輝く幸福な眼で義妹を眺めながら、言つた。

公爵令嬢マリヤは、頭をもたげることが出來なかつた、彼女は泣いてゐた。

「何うかなすつて、マリイ？」

「何でもないの……唯悲しくなつたんですの……アンドレーの事を思つて悲しくなつたんですの、」と、マリヤは義姉の着物の褶で涙を拂ひながら言つた。

朝のうち幾度となく公爵令嬢マリヤは、義姉の心に豫め用意をさせようとして見たが、その度毎に泣き出してしまふのであつた。一體物事に注意深い方ではなかつたが、何の事だか譯が解らない此義妹の涙が、小さい公爵夫人を動搖させた。彼女は、何も言ひはしなかつたが、何もかを探すやうに、不安さうに身のまはりを見まはした。晝飯前に、彼女が恐がつてゐる老公爵が、特に不安な、意地の悪さうな顔色をして部屋に這入つて來たが、一言も物を言はずに出て行つて了つた。彼女は、妊娠してゐる女にのみ見られるやうな、自分の體内に注意を集中したと云つたやう

な表情をして、公爵令嬢マリヤを見てゐた、そして、不意にワツと泣き出した。

「アンドレーから便りがありましたの？」と、彼女は言った。

「いゝえ、未だ便りのある筈がないぢやありませんか。でもお父様が心配さうな様子をしてゐらつしやるので、それで私恐いんですの。」

「それでは、あなた何も聞いたんぢやないんですのね？」

「何も聞きませんわ、」と、公爵令嬢マリヤは、その涼しい眼で決然と義姉を見ながら言った。彼女は、義姉には打明けまいと決心し、もう問もないと思はれてゐるお産までは、この悪い報知を秘して置くやうに父を説得したのであつた。公爵令嬢マリヤと老公爵とは、思ひ／＼の方法で、自分等の悲しみを忍んで隠してゐた。老公爵は、もう希望の綱を断つて、アンドレー公爵は死んだものと決めてしまつた。息子の行方を探ねるためにアウストリアまで書記を遣つたけれども、モスクワへ息子の記念碑を注文して、それを自分の家の庭に建てるつもりであつた、そして誰にも彼にも息子は死んだと語つてゐた。彼は昔の生活を少しも變へずに続けやうとした、が、もう力が足らなかつた。散歩するのも少くなれば、食べるのも少くなり、眠るのも少くなつて、毎日／＼次第々々に弱つて行つた。

公爵令嬢マリヤは、未だ希望を保つてゐた。彼女は、生けるものとして兄のために祈禱をし、今／＼と東の間も、兄の歸つてくる報知を待つてゐた。

## 八

「ma bonne amie、(ねえ、あなた、)」と、三月十九日の朝飯後に、小さい公爵夫人が言つた。その小さな柔毛のある唇は、昔のやうに上の方へ上つてゐた。けれど、恐ろしい報知が來てからといふものは、微笑も、聲の調子も、舉動さへも、その家の中では哀傷の極印を負ひてゐるので、それが爲め其原因は知らないながらも、家全體に漲つてゐるその氣分に影響された小さい公爵夫人の微笑が、今では共通の悲しみの重荷を、他の何ものよりも多く語つてゐる程になつた。

「ねえ、あなた、(フオーカの所謂)今朝のフルシユティックが私には悪かつたんぢやないかと思ふの、」

「何うかなさいまして、義姉さん？ お顔の色が青いわ。まア、眞青ですよ、」公爵令嬢マリヤは、吃驚してかう言つて、その柔かな、重々しい足取りで義姉の側に駆け寄つた。

「マリヤ・バグダノウナを呼びにやりましたか、閣下？」そこに居合はした女中の一人が言つた。マリヤ・バグダノウナは、その地方のある町の産婆で、この二週日間ルイシーヤ、ゴオリイに滞在してゐたのであつた。

「あゝ、ほんとにねえ、」と、公爵令嬢マリヤは同意した。「ほんとにさうなのかも知れないわ。私が呼びに行つて來ませう。氣を確かに持つてゝね、義姉さん。」と、彼女はリザに接吻して、部屋を出て行かうとした。

「あゝ、いゝえ、いゝえ！」かう言つて、唯眞青なばかりではなく、小さい公爵夫人の顔は、眼の前の避け難い肉體

の苦痛に對する子供らしい恐怖を現はした。

「いゝえ、不消化なのよ、不消化なのですと云つて頂戴、さう言つて頂戴、マリイ、さう言つて頂戴！」かう言つて、小さい公爵夫人は、子供らしい苦痛と氣紛れと、慥とらしく大袈裟な風をして、小さな手を絞りながら、泣き出した。公爵令嬢マリヤは、マリヤ・バグダノウナを連れて來るために部屋から駆け出して行つた。

「mon Dieu mon Dieu! (神様!) おゝ!」と云ふ聲を彼女は後に聞いた。

産婆は肥つた、小さな、白い手をこすりながら、意味ありげな沈着き拂つた顔をして、もう彼方から出かけて來たところであつた。

「マリヤ・バグダノウナ! もう、あれが始まつたらしいの、」と、公爵令嬢マリヤは言つて、大きく開いた、吃驚したやうな眼で、産婆を眺めた。

「まア、それはお目出度い事でございます、」と、マリヤ・バグダノウナは、別段足を早めようともしないで言つた。「あなた方お若い方は、こんな事は何もお知り遊ばさなくともようございませうよ、」

「でもお醫者さんは何うして未だモスクワから來ないんでせう?」と、公爵令嬢は言つた。(ヘリザとアンドレー公爵との望みに従つて、モスクワに醫者を迎へにやつてあつたので、今か今かとその來るのを待つてゐたのであつた。)

「大丈夫でございますよ、お嬢さま、そんなに御心配遊ばしますな、」と、マリヤ・バグダノウナは言つた。「お醫者が見えませんが、大丈夫でございます。」

五分経つと、何が重いものが運ばれる音を、公爵令嬢は自分の部屋にゐて聞いた。覗いて見ると、何のためにか從僕達が、アンドレー公爵の書齋にあつた皮の長椅子を寢室に移してゐるところであつた。人々の顔には重々しい、沈

静な色が浮んでゐた。

公爵令嬢マリヤは、一人で自分の部屋に坐つて、家の中のいろ／＼の響きに耳を聳立ててゐた。誰か外を通る時には時々扉を開けて、廊下の模様を眺めた。四五人の女が静かな足音を立てながら、右へ左へと通つた。彼等は公爵令嬢をチラリと見ては、直ぐ顔を反向けてしまふのであつた。公爵令嬢は、到底尋ねてみる元氣がなかつたので、自分の部屋に歸り、扉を閉ちて、肘掛椅子に靜かに腰を下したり、祈禱書を取り上げたり、神龕の前に跪いたりした。が、祈禱は自分の胸の騒ぎを鎮めては呉れなかつた、それは彼女に取つて苦しみでもあり、驚きでもあつた。突然部屋の扉が靜かに開いて、頭にカアチーフを着けた老乳母のプラスコウヤ・サアウイシナの姿が闕の上に現はれた。この婆さんは、老公爵が差し留めた爲めに、マリヤの部屋には滅多にやつてきた事がなかつた。

「一寸お邪魔に上りました、マシーエンカ、」と、乳母は言つた。「これこの通り、天使の御前に對さうと思つて公爵様の御婚禮の時の蠟燭を持つてまゐりました、お嬢さま、」と、溜息をしながら、彼女は言つた。

「まア、私ほんとに嬉しいよ、婆や、」

「神様はお情け深かうございます、お嬢さま。」

乳母は、神龕の前に金色の蠟燭をともした、そして編みかけの靴足袋を持つて扉の傍に腰を下した。公爵令嬢マリヤは、本を取つて読み出した。唯足音や人の聲が聞えた時だけ、公爵令嬢と乳母とは、一人は吃驚して訊ねるやうな風に、もう一人はその顔に慰め、安心させるやうな色を浮かべながら、互ひに顔を見合せた。

公爵令嬢マリヤが、自分の部屋に坐つて感じてゐる感情は、家全體を壓服して、總ての人々の心を捉へてゐたのであつた。産婦の苦痛を知つてゐる人が少なければ少いだけ、産婦の苦痛が軽くなるといふ古い信仰に従つて、みんな夫